静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第100集

徳倉B遺跡

平成9年度　東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

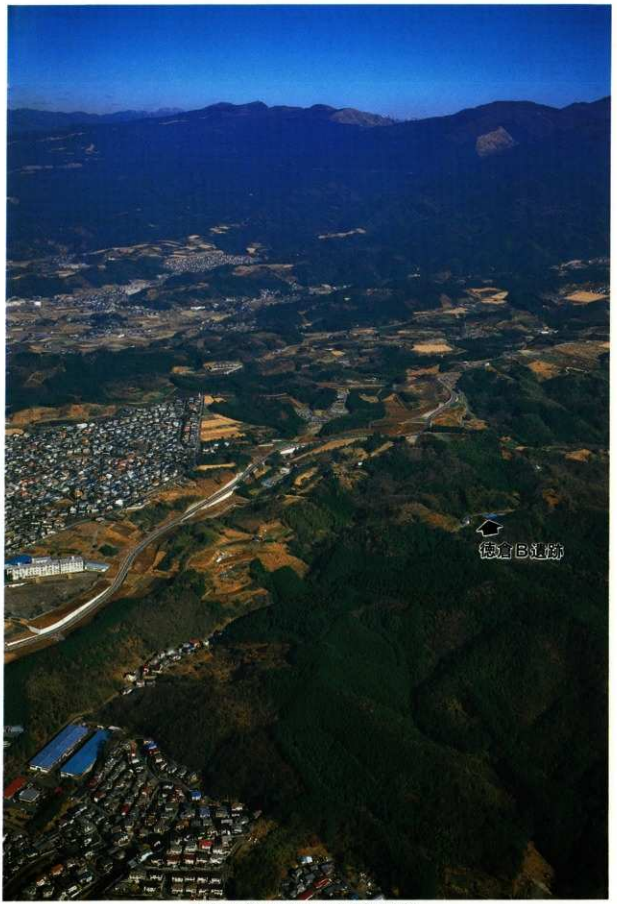
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第100集

徳倉B遺跡

平成９年度　東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９８

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡周辺（箱根西麓より愛鷹山麓を望む）

遺跡全景（徳倉B遺跡より箱根西麓を望む）

中近世　炭窯断面図

縄文時代中期の土器（藤内）

序

箱根山西麓と愛鷹山東南麓は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が、数多く確認されている静岡県の東部における代表的な地域である。今回報告する徳倉B遺跡も、箱根山西麓に位置し、緩やかな北斜面上に立地する縄文時代を中心とした遺跡で、縄文時代の早期から中近世までの遺構や遺物が多数検出されている。

徳倉B遺跡の調査は、箱根山西麓から愛鷹山南麓の広大な裾野を横断する東駿河湾環状道路建設に伴う事前調査の一環として、建設省沼津工事事務所から委託を受け、平成8年4月より平成9年3月まで現地調査を行った。この東駿河湾環状道路建設に伴う調査は、平成4年度に焼場遺跡が最初に調査されて以来平成7年度までに、下原遺跡・加茂ノ洞B遺跡・八田原遺跡・上ノ池遺跡の調査が行われた。平成8年度には本遺跡をはじめとして桧林A遺跡や大平遺跡・押出シ遺跡の調査が実施された。平成9年度になると、小池遺跡や長平衛平遺跡・中峯遺跡の調査が行われ、後半から下原遺跡や生茨沢遺跡の調査が始まった。この東駿河湾環状道路建設に伴う一連の発掘調査によって、箱根山西麓における旧石器時代から縄文時代を中心とした貴重な資料が年々増加している。

徳倉B遺跡では、縄文時代の遺物が多数出土した。特に土器は、早期前半の撚糸文系や押型文系の土器から早期後半の条痕文系の土器、前期後半の竹管文系の土器、中期前半の勝坂式期の土器等の良好な資料がたくさん出土している。石器は、旧石器時代と考えられるナイフが数点、縄文時代を代表する石鏃や石斧等が100点以上出土している。また住居跡は発見されなかったが、縄文時代の土坑やピット・集石等も確認されている。

調査の方法では、トータルステーションを用いた遺物の取り上げシステムが進み、図化にあたってはコンピューターのグラフソフトを利用するなど、デジタル化が進んできている。このことは、第三者による二次的な利用が容易になることである。東駿河湾環状道路関係の調査が進むにつれて、箱根山西麓地域の貴重な資料が次々にデジタル化されていくことは、この地域の旧石器時代から縄文時代を考えていく上で大変な成果である。また蓄積されたデーターが、今後さまざまな形で活用・研究されていくことを願っている。

最後になったが、調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省沼津工事事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会・沼津市教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力をいただいた。この場をかりて深くお礼申し上げたい。また、調査を温かく見守っていただいた地域の方々、現地および整理にあたった研究所の職員や作業員、助言・指導をいただいた多くの方々にも感謝いたしたい。

1998年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　言

1　本書は静岡県三島市徳倉に所在する徳倉B遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成8年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、平成8年4月から平成9年3月まで現地調査を実施した。

3　徳倉B遺跡の資料整理は、平成9年4月から平成10年3月まで実施した。

4　発掘調査及び報告書刊行に係る調査体制は、下記のとおりである。

現地調査

平成8年度	所　長	斎藤　忠
	副所長	池谷　和三
	常務理事	三村田昌昭
	調査研究部長	石垣　英夫
	調査研究第四課長	橋本　敬之
	主任調査研究員	仲家三千彦
	調査研究員	青野　好身（平成8年4月～平成9年1月）
		鈴木　譲（平成9年2月～平成9年3月）

整理報告

平成9年度	所　長	斎藤　忠
	副所長	池谷　和三
	常務理事	三村田昌昭
	調査研究部長	石垣　英夫
	調査研究第四課長	橋本　敬之
	主任調査研究員	仲家三千彦

5　調査にあたっては、次の方々・団体に御指導、御助言を賜った。また、調査地近隣の方々に御理解と御協力を得た。記して感謝の意を表します。

鈴木裕篤　池谷信之　高尾好之　山本恵一（敬称略）

三島市教育委員会　沼津市教育委員会

6　本書の作成・執筆・編集は、主に仲家が行った。

7　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

8　発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。また、遺跡で出土した全遺物の出土データーは、希望者に閲覧の用意がある。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　調査区の方眼設定は、国家座標（平面直角座標Ⅶ系）の軸線を基準に、国家座標（-94450.00・38710.00）＝（A・1）と設定した。

2　出土遺物は、各層ごとに4桁の通し番号を付して取り上げ、土器P・石器S・礫Rの略号を付した。

3　石器の実測は、原則として第三角投影図法に拠った。また、一部の石器実測については株式会社アルカに委託した。

4　出土遺物の実測図及び写真図版の縮尺は、基本的に土器1/3、剥片石器4/5、礫石器1/3で掲載した。

5　遺物の出土位置については、一覧表内に座標で明記した。座標は、A1グリット杭を（X・Y）＝（0・0）とし、南北方向をX軸に、東西方向をY軸にとった。

6　挿図中の図面は、全て北方向を図面の上とし、特別変更のある場合のみ方位により北方向を示した。縮尺は各図に示すとおりである。

7　土層の色調は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修1997）を使用した。

8　本文中・挿図中の表記は以下のとおりである。

層　名		遺構名	
BB	黒色土層	SP	ピット
Ku	栗色土層	SF	土坑
FB	富士黒土層		

目　　次

巻頭写真
序
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 7
第1節　調査の方法 …… 7
第2節　調査の経過 …… 7
1　確認調査 …… 7
2　本調査 …… 9
第3節　資料整理の方法 …… 9
第4節　遺跡の基本土層と土層堆積状況 … 10
1　基本土層 …… 10
2　土層堆積状況 …… 13
第Ⅳ章　調査の成果 …… 14
第1節　中近世 …… 14
1　中近世の遺構 …… 14
a　概観 …… 14
b　土坑 …… 21
c　炭窯 …… 34
d　その他の遺構 …… 35
2　古墳時代の遺物 …… 38
a　古墳時代の土器 …… 38
第2節　縄文時代 …… 39
1　縄文時代の中期の遺構 …… 39
a　概観 …… 39
b　土坑 …… 39
c　焼土 …… 48
d　集石 …… 51
e　その他の遺構 …… 51
2　縄文時代の早・前期の遺構 …… 57
a　概観 …… 57
b　土坑 …… 61
c　焼土 …… 64
d　その他の遺構 …… 64
3　縄文時代　早・前期の土器 …… 66
a　概観 …… 66
b　1群（撚糸文） …… 66
c　2群（押型文） …… 66
d　3群（条痕文） …… 70
e　4群（東海系条痕文） …… 75
f　5群（早期末の土器） …… 76
g　6群（無文ないしは条痕文） … 77
h　7群（竹管文） …… 77
i　8群（北白川） …… 82
4　縄文時代　中・後期の土器 …… 93
a　概観 …… 93
b　9群（新道） …… 93
c　10群（藤内） …… 101
d　11群（井戸尻） …… 106
e　12群（浅鉢・有孔鍔付土器） … 106
f　13群（堀之内・安行） …… 106
5　縄文時代の土製品 …… 115
6　富士黒・栗色土層出土の石器 … 116
a　概観 …… 116
b　石鏃 …… 121
c　有舌尖頭器 …… 122
d　ナイフ形石器 …… 122
e　楔形石器 …… 123
f　錐 …… 123
g　スクレイパー …… 123
h　石匙 …… 124
i　石核 …… 124
j　石錘 …… 124
k　磨製石斧 …… 124
l　打製石斧 …… 125
m　磨石 …… 125
n　磨・敲石 …… 125
o　特殊磨石 …… 127

p 蔽 石 …… 127
q 石 皿 …… 127
第Ⅴ章 ま と め …… 138
第1節 中 近 世 …… 138
第2節 縄文時代 …… 138
写真図版

挿図目次

第1図 東駿河湾環状道路と周辺の遺跡 …… 1
第2図 徳倉B遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第3図 調査区と周辺の地形 …… 5
第4図 調査区周辺の地形 …… 8
第5図 調査区グリット配置図 …… 8
第6図 基本土層柱状図 …… 10
第7図 土層堆積図 …… 11
第8図 BB層礫分布図 …… 14
第9図 BB層遺構全体図 …… 15
第10図 BB層土坑分布図1 …… 17
第11図 BB層土坑分布図2 …… 18
第12図 BB層ピット分布図 …… 19
第13図 BB層土坑実測図1 …… 23
第14図 BB層土坑実測図2 …… 25
第15図 BB層土坑実測図3 …… 27
第16図 BB層土坑実測図4 …… 29
第17図 BB層土坑実測図5 …… 31
第18図 BB層土坑実測図6 …… 33
第19図 BB層炭窯実測図1 …… 36
第20図 BB層炭窯実測図2 …… 37
第21図 古墳時代土器 …… 38
第22図 Ku層遺構全体図 …… 41
第23図 Ku層土坑・焼土分布図 …… 43
第24図 Ku層土坑実測図 …… 45
第25図 Ku層土坑・焼土実測図 …… 47
第26図 Ku層礫分布図 …… 49
第27図 Ku層集石分布図 …… 50
第28図 Ku層集石実測図1 (1/20) …… 52
第29図 Ku層集石実測図2 (1/20) …… 53
第30図 Ku層集石実測図3 (1/20) …… 54
第31図 Ku層集石実測図4 (1/20) …… 55
第32図 Ku層ピット分布図 …… 56
第33図 FB層礫分布図 …… 57
第34図 FB層土坑・焼土分布図 …… 58
第35図 FB層遺構全体図 …… 59
第36図 FB層土坑・焼土実測図 …… 63
第37図 FB層ピット分布図 …… 65
第38図 早・前期土器分布図 …… 67
第39図 早期第3群土器分布図（条痕文） … 71
第40図 個体別土器分布図
（清水柳E・野島） …… 73
第41図 前期第7群土器分布図（諸磯b） … 79
第42図 土器実測図1
（第1・2・3群a類b類 1/3） …… 83
第43図 土器実測図2（第3群b類 1/3） … 84
第44図 土器実測図3（第3群c類 1/3） … 85
第45図 土器実測図4
（第3群c類d類 1/3） …… 86
第46図 土器実測図5
（第3群e類 第4群a類b類 1/3） … 87
第47図 土器実測図6（第5・6群 1/3） … 88
第48図 土器実測図7（第7群a類 1/3） … 89
第49図 土器実測図8（第7群a類 1/3） … 90
第50図 土器実測図9
（第7群a類b類 1/3） …… 91
第51図 土器実測図10
（第7群c類 第8群 1/3） …… 92
第52図 中期第9群土器分布図（新道） …… 94
第53図 中・後期土器分布図 …… 95
第54図 個体別土器分布図（新道） …… 98
第55図 中期第10群土器分布図（藤内） … 102
第56図 個体別土器分布図（藤内） …… 104
第57図 土器実測図11
（第9群a類 1/3） …… 107
第58図 土器実測図12
（第9群a類 1/3） …… 108
第59図 土器実測図13
（第9群b類 1/3） …… 109

第60図　土器実測図14
（第９群ｂ類 1/3）…… 110
第61図　土器実測図15
（第10群ａ類 1/3）…… 111
第62図　土器実測図16
（第10群ｂ類１ 1/3）…… 112
第63図　土器実測図17
（第10群ｂ類２ 1/3）…… 113
第64図　土器・土製品実測図18
（第11・12・13群，土製品 1/3）…… 114
第65図　石器出土分布図 …… 117
第66図　石器分布図１ …… 119
第67図　石器分布図２ …… 120
第68図　石器実測図１（石鏃 4/5）…… 128
第69図　石器実測図２
（石鏃・有舌・ナイフ・楔 4/5）… 129
第70図　石器実測図３
（楔・錐・スクレイパー 4/5）… 130
第71図　石器実測図４
（スクレイパー・石匙 4/5）…… 131
第72図　石器実測図５
（石核・石錘 4/5）…… 132
第73図　石器実測図６
（磨製・打製石斧 1/3）…… 133
第74図　石器実測図７
（磨石・敲磨石 1/3）…… 134
第75図　石器実測図８
（敲磨石 1/3）…… 135
第76図　石器実測図９
（敲磨石・特殊磨石 1/3）…… 136
第77図　石器実測図10
（敲石・石皿 1/3）…… 137
第78図　早・前・中期土器分布図 …… 139
第79図　縄文時代石器分布図 …… 139
第80図　第１・２群土器・石鏃分布図 …… 141
第81図　第10・11群土器・石斧分布図 …… 141

挿表目次

表１　東駿河湾環状道路関係
埋蔵文化財包蔵地 …… 2
表２　周辺遺跡一覧表 …… 4
表３　作業工程表 …… 9
表４　ＢＢ層土坑計測表 …… 20
表５　ＢＢ層土坑内覆土一覧表 …… 20
表６　ＢＢ層炭窯計測表 …… 35
表７　ＢＢ層炭窯内覆土一覧表 …… 35
表８　Ｋｕ層土坑計測表 …… 40
表９　Ｋｕ層土坑内覆土一覧表 …… 40
表10　Ｋｕ層焼土計測表 …… 48
表11　Ｋｕ層焼土内覆土一覧表 …… 48
表12　ＦＢ層土坑計測表 …… 62
表13　ＦＢ層土坑内覆土一覧表 …… 62
表14　ＦＢ層焼土計測表 …… 62
表15　ＦＢ層焼土内覆土一覧表 …… 62
表16　縄文時代の石器組成表 …… 116

写真図版目次

図版１　調査区発掘前（北西側より）桧林伐採
　　調査区発掘終了（北西側より）
図版２　調査区全景（東側より）
　　１区ＢＢ層遺構完掘状況（南側より）
図版３　ＢＢ層土坑断面・完掘、炭窯断面・完掘状況
図版４　１・２区Ｋｕ層遺構完掘状況（南、北側より）
図版５　Ｋｕ層ピット断面、土坑断面、集石、焼土断面状況
図版６　１区ＦＢ層ピット集中状況（南側より）
　　ＦＢ層精査終了状況（西側より）
図版７　ＦＢ層土器・礫出土、ピット断面・完掘、焼土断面状況
図版８　早期縄文土器（撚糸文、押型文、子母口、清水柳Ｅ）
図版９　早期縄文土器（清水柳Ｅ）
図版10　早期縄文土器（野島）
図版11　早期縄文土器（野島、鵜ヶ島台）
図版12　早期縄文土器（茅山上層、入海Ⅰ、入海Ⅱ、石山）
図版13　早期縄文土器（条痕、繊維土器）
図版14　前期縄文土器（諸磯ｂ）
図版15　前期縄文土器（諸磯ｂ）
図版16　前期縄文土器（諸磯ｂ・ｃ）
図版17　前期縄文土器（十三菩提、北白川下層）
図版18　中期縄文土器（新道）
図版19　中期縄文土器（新道）
図版20　中期縄文土器（新道）
図版21　中期縄文土器（新道）
図版22　中期縄文土器（藤内）
図版23　中期縄文土器（藤内）
図版24　中期縄文土器（藤内）
図版25　中期縄文土器（藤内）、後期縄文土器（堀之内、安行）、土製品
図版26　石鏃、有舌尖頭器、ナイフ形石器、楔形石器
図版27　楔形石器、錐、スクレイパー、石核、石錘
図版28　磨製・打製石斧
図版29　磨石、磨・敲石
図版30　磨・敲石
図版31　特殊磨石、敲石、石皿

第Ⅰ章　調査に至る経緯

伊豆半島の玄関口に位置する三島市は、箱根西南麓の豊かな自然と富士山の美しい湧水に恵まれ、古くから人々が生活する上で好適であった。市内各所には、私たちの先祖の足跡を残す埋蔵文化財の包蔵地が至るところに認められる。江戸時代には、東海道の宿場町として東西交通の要所となった。現在でも、富士・箱根・伊豆といった観光地への入り口としてにぎわっている。しかし、昨今の経済発展、特に車社会の発展により当地域の道路の渋滞は慢性的である。これを緩和するために計画されたのが東駿河湾環状道路である。この道路は、第１図に示したように、沼津市岡宮から愛鷹山麓、黄瀬川を越え、箱根西麓から三島市を縦断して函南町の熱函道路に至り、国道136号線の伊豆中央道に連結する片側２車線の広規格道路である。この路線上には、建設省がつけた０地点から42地点の遺跡があり、当研究所において平成３年から確認調査が開始され、遺構・遺物が確認された場所について本調査が行われてきた。

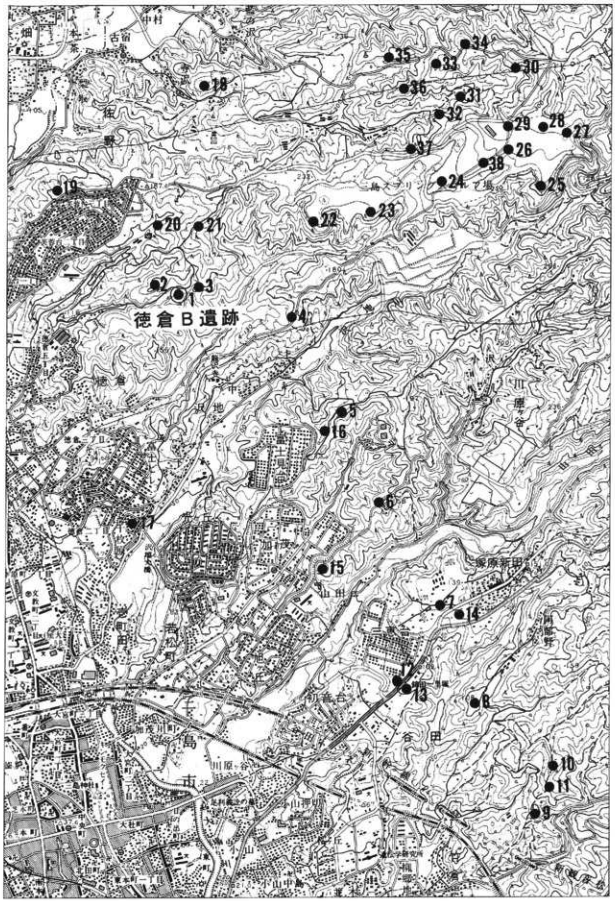
その詳細については、表１にまとめた。

徳倉Ｂ遺跡は、この東駿河湾環状道路建設工事に伴う一連の発掘調査のひとつであり、周知の遺跡として三島市の遺跡地図にも掲載されている。平成７年度に当研究所によって確認調査を行ったところ、栗色土層と富士黒土層から土器や石器を検出した。このため、工事の主体者である建設省中部建設局沼津工事事務所と静岡県教育委員会にその旨を報告し、遺跡が残されている可能性がある約3,500㎡について平成８年４月より本格的調査を開始した。

第１図　東駿河湾環状道路と周辺の遺跡

表1　東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地

番号	所在地	各市町村整理番号	遺跡名	調査状況
1	沼津市	4	上松沢平	調査予定
2	沼津市	3	虎杖原1号墳	調査予定
3	沼津市	2		調査予定
4	沼津市	1	丸尾北	調査予定
5	長泉町	14	柏窪B	調査予定
6	長泉町	54	桜畑上	調査予定
7	長泉町	53	山岸A	H9確認調査
8	長泉町	42	木戸	H9確認調査
9	長泉町	37	池田B	調査予定
10	長泉町	38	鉄平	調査予定
11	長泉町	48	大平	H8本調査
12	三島市	0		調査予定
13	三島市	1	萩B	調査予定
14	三島市	2	北ノ入A	H7確認調査、以後本調査予定
16	三島市	4	長平衛平	H9本調査
17	三島市	5	小池	H9本調査
18	三島市	6		
19	三島市	7	徳倉B	H8本調査
20	三島市	8	上ノ池	H7・8本調査
21	三島市	9	遺跡なし	H5確認調査
22	三島市	10	八田原	H7本調査「八田原遺跡」1997
23	三島市	11	加茂ノ洞B	H6本調査「加茂ノ洞B遺跡」1996
24	三島市	12	遺跡なし	H5確認調査
25	三島市	13		市道につき調査対象外
26	三島市	14	五百司	H5確認調査「焼場遺跡B地点・五百司遺跡」1996
27	三島市	15	焼場	H4・7本調査「焼場遺跡A地点」1994 「焼場遺跡B地点・五百司遺跡」1996
28	三島市	16　17	下原	H5本調査「下原遺跡Ⅰ」1995、「下原遺跡Ⅱ」1996
30	三島市	18	押出シ	H8・9本調査
31	三島市	19	生茨沢	H8確認調査
32	三島市	20	中峯	H9本調査「中峯遺跡」1997
33	三島市	21	桧林A	H8・9本調査
34	三島市	22		調査予定
35	三島市	23		H9確認調査
36	三島市	24	ヌタウチ下山	H9確認調査
37	三島市	25		H9確認調査
38	三島市	26	田頭山	調査予定
39	三島市	27	大明神洞	調査予定
40	三島市	28	長命洞B	調査予定
41	三島市	29	大場向山B	調査予定
42	三島市	30		調査予定



第２図　徳倉Ｂ遺跡と周辺の遺跡

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

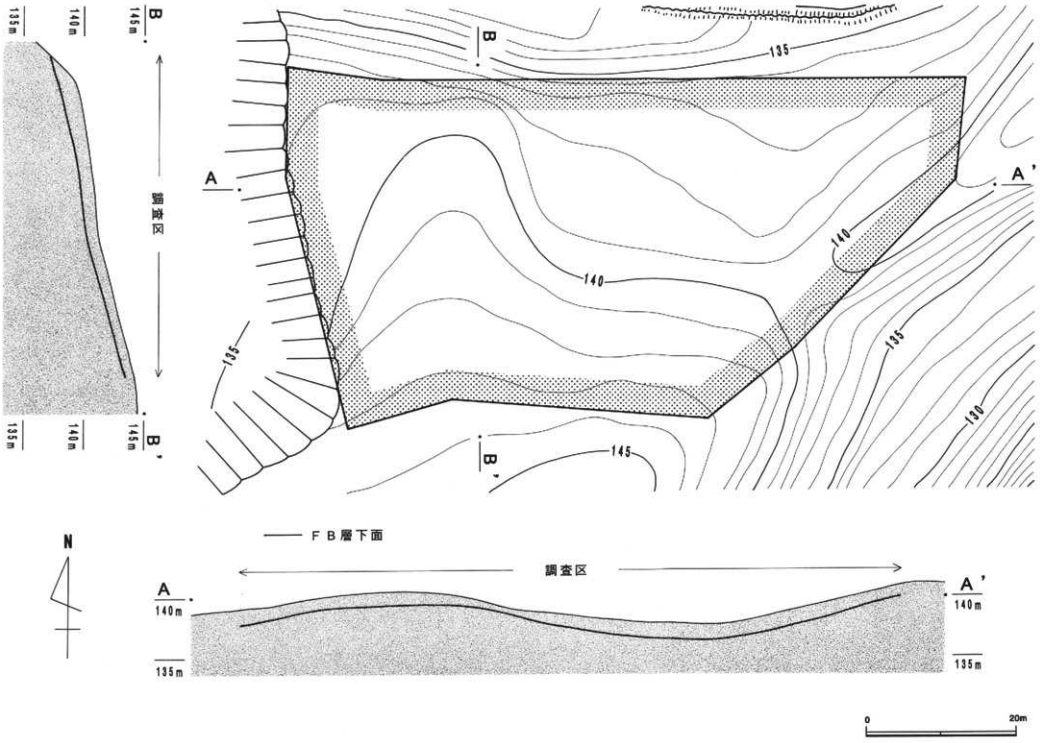
徳倉B遺跡は三島市街地の北東約４km、箱根山西麓から延びる標高約150mの丘陵の緩やかな北斜面に位置している。本遺跡が位置する箱根山は、今から40万年前に誕生した比較的古い火山である。その西麓は今から約５万年前、箱根山第３期の活動とされる盾状火山の形成に伴う多量の火砕流（新期軽石流）の流下によって、きわめて緩やかな斜面が形成され、さらに６万年前頃から活動を開始した古富士火山による降下火山灰が厚く堆積、層厚20mにも及ぶ箱根西麓ロームの丘陵地形が形成された。この火山灰に厚く覆われたなだらかな斜面は、大場川及びその支流によって解析され、樹枝状に分岐派生したいくつもの丘陵が作り出されている。この箱根山西麓の丘陵には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が数多く確認されており、西部地域の磐田原台地や東部地域の愛鷹山東南麓と並ぶ、静岡県内における該期遺跡の代表的なものである。三島市域だけをみても、その数は400箇所以上にもなり、今後の調査の進展に伴い遺跡は確実に増加の一途をたどることが予想される。

表２と第２図に本遺跡周辺に位置する縄文時代の遺跡一覧を示した。この中から主だったものについて概術する。縄文時代の遺跡は、数は多いものの良好な集落遺跡は僅少であり、下原遺跡（７地点）で前期諸磯期の単独住居跡が検出され、十石洞遺跡（15地点）では中期末葉利ＥⅣ式の敷石住居跡を検出した。また、片平山遺跡群〔徳倉片平山Ｌ（22地点）・徳倉片平山Ｋ（23地点）・ソノエンサレＢ（37地点）・片平山（24地点）・徳倉片平山Ⅰ（27地点）・徳倉片平山Ｈ（28地点）・中村Ｃ（38地点）・徳倉片平山Ｂ（29地点）・徳倉片平山Ｊ（25地点）〕で中期勝坂期の住居址が６軒検出された。千枚原Ａ遺跡（17地点）は、県東部における縄文時代の中期曾利期から加曾利Ｂ期の代表的な集落遺跡で、４度目の調査では、敷石住居址６軒、炉跡多数を発見した。また、住居址は確認されていないが、初音ヶ原遺跡群（12・13地点）や小平遺跡群（10・11地点）では早期前半の撚糸文系・押型文系の良好な資料が出土している。この丘陵に隣接する北側の丘陵にも遺跡は多い。八田原遺跡（４地点）・加茂ノ洞Ｂ遺跡（５地点）・焼場Ａ・Ｂ遺跡（６地点）では、早期後半の条痕文系から前期後半の竹管文系の土器が出土している。

このように縄文時代の遺跡はたくさんあるが、千枚原遺跡（17）を除くと大集落といえるものはなく、本年度発掘調査中で、中期の住居跡が多数検出されている押出シ遺跡への期待は大きい。

表２　周辺遺跡一覧表

1	徳倉B遺跡	14	塚原南原遺跡	27	徳倉片平山I遺跡
2	小池遺跡	15	十石洞遺跡	28	徳倉片平山H遺跡
3	上ノ池遺跡	16	加茂・向山遺跡	29	徳倉片平山B遺跡
4	八田原遺跡	17	千枚原A遺跡	30	佐野片平山F遺跡
5	加茂ノ洞B遺跡	18	屹草峠遺跡	31	佐野片平山S遺跡
6	焼場A・B遺跡	19	赤松遺跡	32	佐野片平山T遺跡
7	下原遺跡	20	徳倉片平山E遺跡	33	佐野片平山H遺跡
8	押出シ遺跡	21	徳倉片平山D遺跡	34	佐野片平山G遺跡
9	桧林A遺跡	22	徳倉片平山L遺跡	35	陣笠山A
10	小平B遺跡	23	徳倉片平山K遺跡	36	陣笠山H
11	小平C遺跡	24	片平山遺跡	37	ソノエンサレB
12	初音ヶ原A遺跡	25	徳倉片平山J遺跡	38	中村C
13	初音ヶ原B遺跡	26	片平山A遺跡		



第３図　調査区と周辺の地形

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

徳倉Ｂ遺跡（７地点）は、周知の遺跡であるが隣接した小池遺跡（５・６地点）、上ノ池遺跡（８地点）と併行して確認調査を行ったため、第４図に示したように、３遺跡を含めた方眼設定を行った。遺跡全体を把握するために、国家座標（Ｘ・Ｙ）＝(-94450.00・38710.00) 上を原点Ａ１とし、Ｘ方向にアルファベットを、Ｙ方向に数字を付し、遺跡全体に10ｍの方眼を設定してグリットとした。また。Ａ１の座標を仮に（Ｘ・Ｙ）＝（０・０）とし、遺物・遺構の位置を示すのに用いた。これらは全て地理座標に準じているため、南北方向にＸ軸を、東西方向にＹ軸をとる。

調査区は遺跡の中心と思われる南側の尾根頂部は含まれず、北側の谷部に緩やかに下る斜面上にある。調査前は桧林で、伐採後遺跡の大まかな土層の堆積状況と範囲確認のために２×２ｍのテストピット（第５図）を３箇所設定した。その結果、中部ローム層の上に富士黒土層、栗色土層、黒色土層が堆積しており、各層より土器や石器等の遺物が出土した。休場層より下層は崩落が激しく、旧石器時代の調査には期待がもてない状況であった。地形確認のために遺跡の東西方向のＨラインと南北方向の33ラインにトレンチを入れ土層確認を行った。調査は、900本にもおよぶ桧の抜根作業と表土除去を人力で行い、１区から４区までは富士黒土層までを精査し、以下12箇所のテストピット（第５図）で中部ロームを確認して調査を終了した。

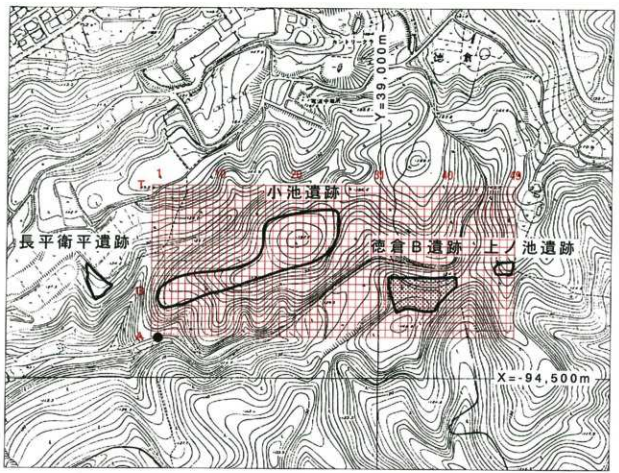
遺物の取り上げはトータルステーションを用いて行った。遺物には層別に土器＝Ｐ、石器＝Ｓ、礫＝Ｒの略号と４桁の通し番号を付し、Ｘ・Ｙの座標と標高（Ｈ）の記録とともにコンピューターに保管した。

また礫群の取り上げや遺構・セクションについては原則的に１／20の図面によって記録している。

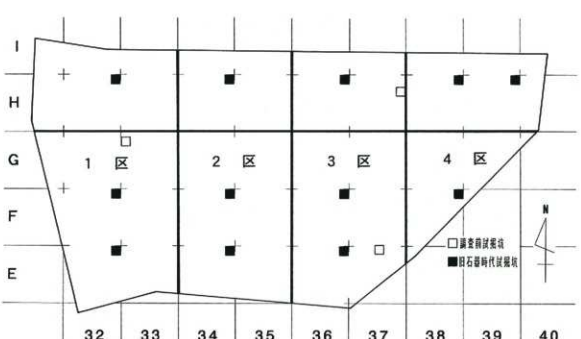
第２節　調査の経過

１　確認調査

徳倉Ｂ遺跡（７地点）の確認調査は、隣接する５・６地点（小池遺跡）、８地点（上ノ池遺跡）とともに行われた。調査期間は平成７年12月より平成８年１月までである。徳倉Ｂ遺跡は周知の遺跡であったため遺跡範囲内にある桧林の伐採後、国家座標にそって方眼設定を行った。それに基づいて２×２ｍの試掘坑（第５図）を３ヶ所設定し、遺跡の範囲と土層堆積状況を確認した。試掘調査の結果、黒色土層（ＢＢ）、栗色土層（Ｋｕ）、富士黒土層（ＦＢ）から土器や石器・礫が出土した。土層は富士黒土層までは良好に堆積していたが、休場層（ＹＬ）より下層は崩落が激しく旧石器時代の調査には期待がもてないことが予想された。この結果を踏まえて平成８年４月１日より本調査の準備を始めた。



第4図　調査区周辺の地形



第5図　調査区グリット配置図

2 本調査

本調査は平成８年４月の第２週より開始した。調査区を20mごとの南北の土層帯によって、西側より１区・２区・３区・４区（第５図）とした。調査区は松林であり、試掘調査の時点で樹木は伐採されていたが、900本以上の根っこが残っていた。試掘調査の結果から、抜根や表土除去に重機を使うことができないため全て人力で行った。このため、６月末まで抜根と表土除去に時間がかかってしまい、７月より本格的に発掘調査を開始した。１区・２区については、表土除去終了後、黒色土層（ＢＢ）の精査、８月に入り褐色土層の精査を行った。中近世と思われる黒色土層（ＢＢ）からは、炭窯遺構や土坑・ピット等の遺構が検出された。栗色土層の精査に入ると、縄文時代中期の土器や石器・礫が多数出土した。９月になり、３区・４区も黒色土層（ＢＢ）の精査に入った。３区の中央部では、中近世の土坑が密集して検出された。栗色土層の遺構が出そろったところで遺構の写真撮影を行った。１月から２月は、全区富士黒土層の精査を行うとともに、縄文時代の遺構の検出を続けて行った。土器や石器・礫等の遺物が多数出土すると同時に、土坑やピット・集石等の遺構も多数検出された。

富士黒土層（ＦＢ）の精査終了後、旧石器時代の確認調査を行った。土層帯に沿ってのトレンチ調査と並行して試掘坑１号から12号を設定した。旧石器時代の体場層より下層は、現谷地形形成の際の解析によって失われ、中部ロームを確認して調査を終了した。

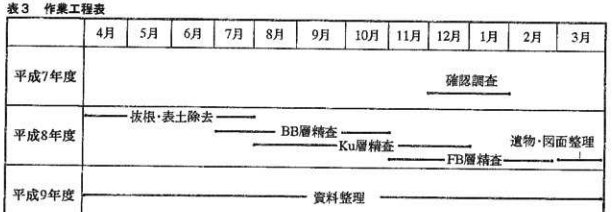
第３節　資料整理の方法

整理作業は、平成９年４月～平成10年３月まで行った。出土遺物の内訳は縄文式土器2,956片、縄文時代の石器506点である。本書には、担当調査員の責任において抽出した遺物を図化し掲載した。また石器54点については㈱アルカに実測及びトレース業務を委託した。

遺物の分布図に関しては、現地でトータルステーションで取り上げてきたデーターをデーターベースとして、グラフ作成ソフトで読み込み、図化した。地形測も同様である。各遺物の情報は、出土地点を含めてカード型データーベースソフトで管理し、保管している。

実測・計測が終了した遺物はＢ４版の遺物カードを作成する。この遺物カードは１遺物１枚を原則としており、実測図を貼付し、出土位置・図面番号・写真番号・登録番号・収納番号等を記入して保管している。しかし、土器については破片が多く、同一個体と考えられるものについては１枚のカードに記入した。

表３　作業工程表

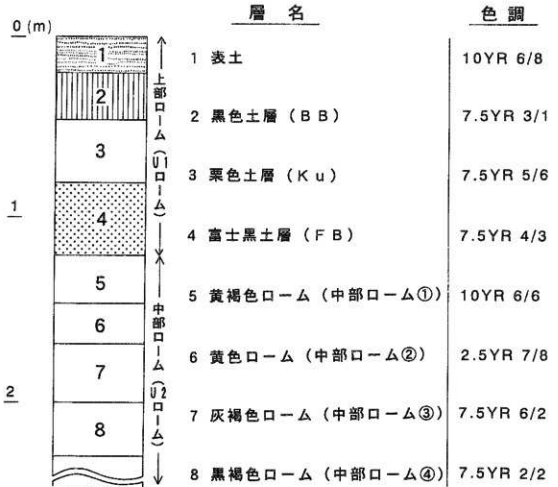


第4節　遺跡の基本土層と土層堆積状況

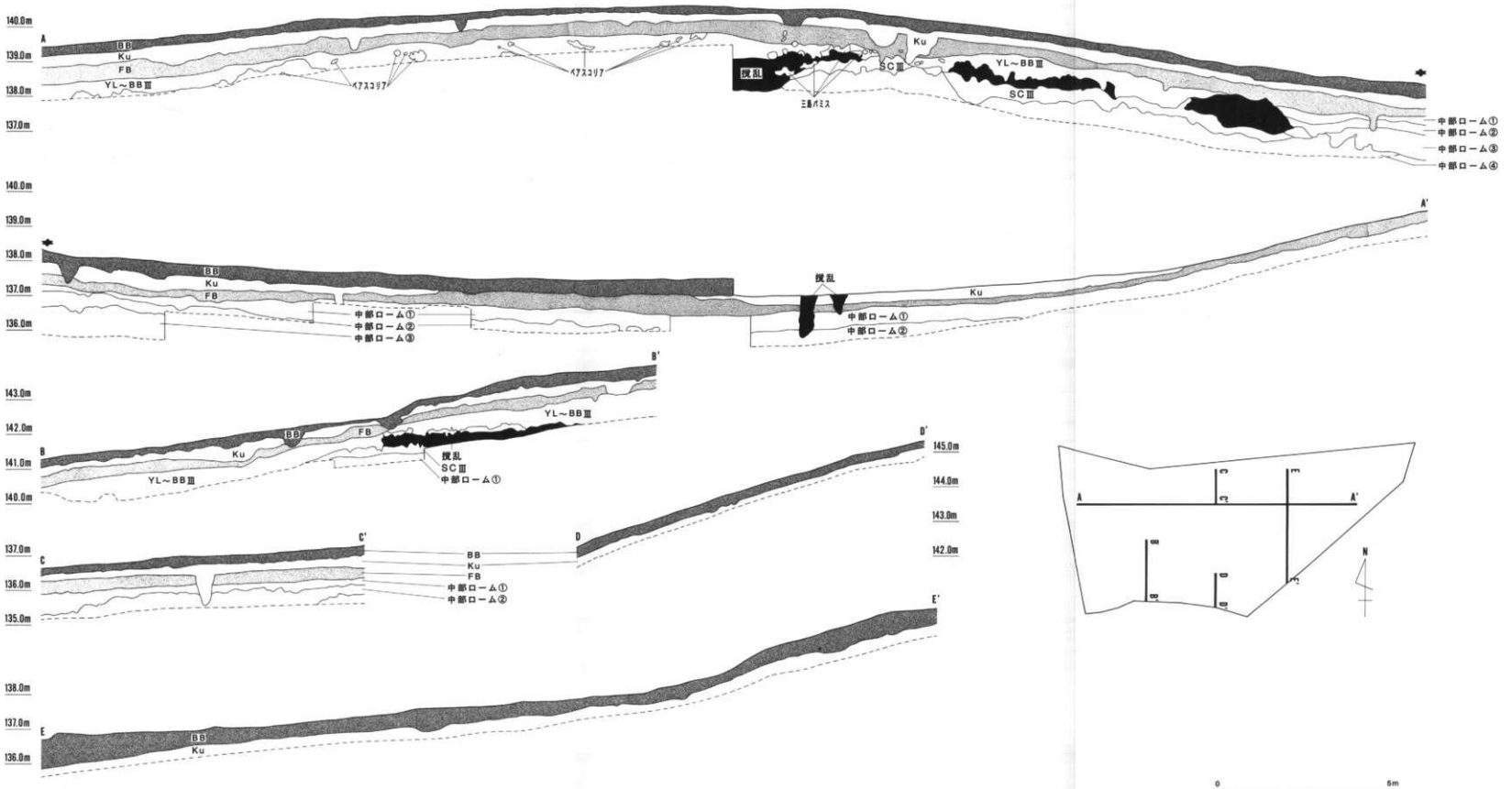
1　基本土層

御倉B遺跡が立地している箱根西麓の土層は、テフラの供給源が同じ富士山ということもあって、愛鷹南麓の土層と類似している。しかし、富士山からの距離が離れているためか、栗色土層、富士黒土層、黒色帯等の諸層にも若干の相違を感じる。基本的には同じ層序を示すので、層名は愛鷹南麓に準じたものを用いる。

1	表　　土	明黄褐色土。	締まりがなく、植物の根茎を多く含む。
2	黒色土層　（ＢＢ）	黒褐色土。	5～10㎜大の黒色スコリアを含む。
3	栗色土層　（Ｋｕ）	明褐色土。	パウダー状の細粒。1～4㎜大の白色パミスと橙色スコリアを少量含む。
4	富士黒土層（ＦＢ）	褐色土。	5～10㎜大の黒色スコリアと暗赤褐色スコリアを含む。
5	中部ローム層　①	黄褐色土。	2～5㎜大の橙色のスコリアを少量含む。
6	中部ローム層　②	黄色土。	明るい黄色で、2～3㎜大の橙色のスコリアを少量含む。
7	中部ローム層　③	灰褐色土。	粘性が強い。
8	中部ローム層　④	黒褐色土。	3～6㎜大の黒色スコリアを多量に含む。



第6図　基本土層柱状図


140.0m
139.0m
138.0m
137.0m
A
BB
Ku
FB
YL～BBⅢ
ベアスコリア
ベアスコリア
撹乱
三島パミス
SCⅢ
Ku
YL～BBⅢ
SCⅢ
中部ローム①
中部ローム②
中部ローム③
中部ローム④
140.0m
139.0m
138.0m
137.0m
136.0m
A'
BB
Ku
FB
中部ローム①
中部ローム②
中部ローム③
撹乱
Ku
中部ローム①
中部ローム②
143.0m
142.0m
141.0m
140.0m
B
B'
BB
FB
Ku
YL～BBⅢ
YL～BBⅢ
撹乱
SCⅢ
中部ローム①
145.0m
144.0m
143.0m
142.0m
137.0m
136.0m
135.0m
C
C'
D
D'
BB
Ku
FB
中部ローム①
中部ローム②
138.0m
137.0m
136.0m
E
E'
BB
Ku
A
A'
N
0
5m

第７図　土層堆積図

2　土層堆積状況

徳倉Ｂ遺跡は、箱根火山（古期外輪山）の西側斜面にあたる。この箱根西麓部の表層は、火山灰や火山灰の風化したいわゆるローム層におおわれている。また、愛鷹・富士火山の南東に位置し、両火山がテフラの主な供給源になっている。そのうえ、カルデラ形成にかかわる箱根火山の軽石流が西麓部に堆積し、さらに箱根火山起源のテフラも加わっている。このローム層は、「箱根西麓ローム層」といわれ、下位（Ｌ）、中位（Ｍ）、上位（Ｕ２）、上位（Ｕ１）の４層に区分されている（高橋1975・1976）。Ｌローム層は関東ローム層の多摩ロームに相当し、箱根山古期外輪山溶岩を覆う最も古い段階のローム層である。Ｍローム層は新規箱根軽石流を挟在させ、紫灰色を呈する特徴的なローム層で下末吉ローム層に相当する。Ｕ２ローム層は、約３万年前から６万年前にかけて堆積された層準とされ、三島パミス等の特徴的なテフラ含み、武蔵野ロームあるいは愛鷹ローム層の中部ロームに相当する。Ｕ１ローム層は、古期富士火山がおもな供給源でスコリア層と黒色帯の互層が特徴である。この層は、考古遺物が包含されている層で、関東ローム層の立川ロームあるいは愛鷹ローム層の上部ロームに相当する。

徳倉Ｂ遺跡は、箱根山南西麓の尾根上に位置するが、調査区は遺跡の北側にあたり、緩やかな傾斜地となっている。遺跡の中心は、調査区南側の尾根頂上部にあると思われるが縄文時代を中心に土器・石器などの遺物や土坑・ピットなどの遺構が多数検出された。

本遺跡が営まれた頃は、Ｕ１ローム（上部ローム）が堆積した時期にあたる。試掘調査や本調査での上層観察からＵ１ローム（上部ローム）の特徴であるスコリア層と黒色帯の互層があまりみられず、中近世の包含層と考えられる黒色土層（ＢＢ）と縄文時代の包含層の褐色土層（Ｋｕ）、富士黒土層（ＦＢ）の３層が確認できた。（第７図）休み場層以下、黒色帯とスコリア層の互層が特徴的な旧石器時代の文化層は、ほとんど残っていない。現谷地形形成の過程で崩落したものと思われるが、２区の日列東西トレンチで休場層以下第Ⅲスコリア層までの混入土と思われる層が確認できた。調査区のほとんどは富士黒土層を掘り下げるとＵ２ローム（中部ローム）に達してしまう。また、Ｍローム層より下位と考えられる軽石層が所々に露出する。この軽石層の礫に調査時点では気がつかず、富士黒土層の礫として多量に取り上げた可能性がある。特に１区の南側にその傾向がはっきり見られた。富士黒土層より下層については、遺物も確認できないので調査を終了した。

第Ⅳ章　調査の成果

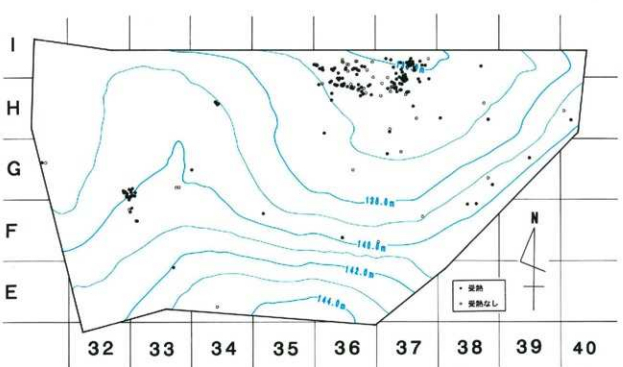
第1節　中近世

1　中近世の遺構（BB）

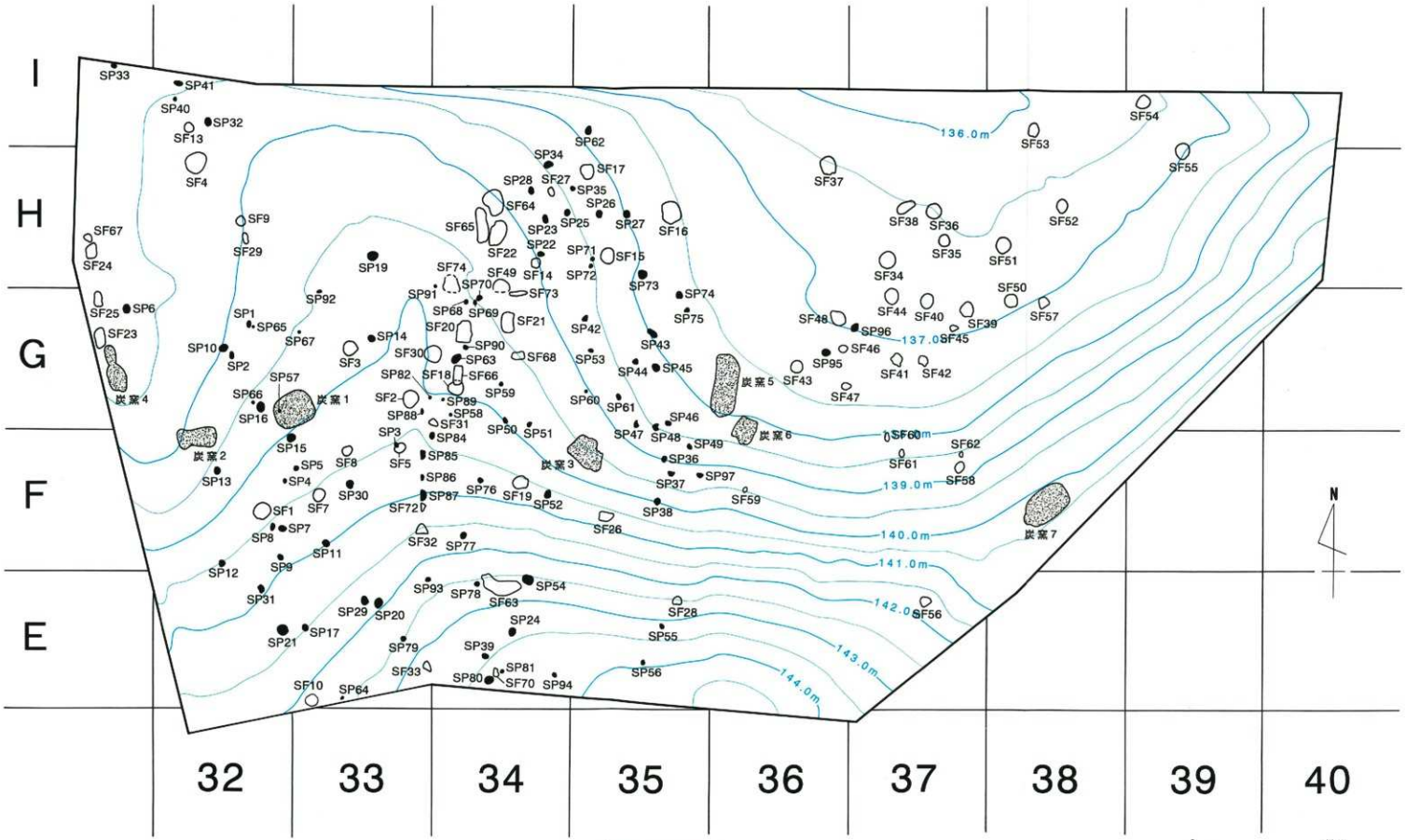
a　概　観

徳倉B遺跡は、試掘調査の段階で縄文時代の包含層である栗色土層と富士黒土層の2層の調査を考えていた。全体的に土層の堆積が薄いので、桧の抜根作業や表土除去を人力で行っていたところ、表土及び黒色土中より礫（第8図）が出土した。同様に、弥生土器や土師器・かわらけ等が表土及び黒色土中から樹木の根に絡んだ状況で出土したり、採集されたりした。遺物は、ほとんどが調査区北側の谷部に流れ込む形で出土している。また、この時期に伴う遺構は黒色土中では検出できず、栗色土層上面まで下げて確認を試みたところ、土坑やピット・炭窯等の遺構が栗色土層に堀り込むかたちで多数検出された。このことから、当初縄文時代以降、特に中近世の文化層に関しては、想定していなかったが、この時期が存在することが分かり中近世の調査を行うことになった。

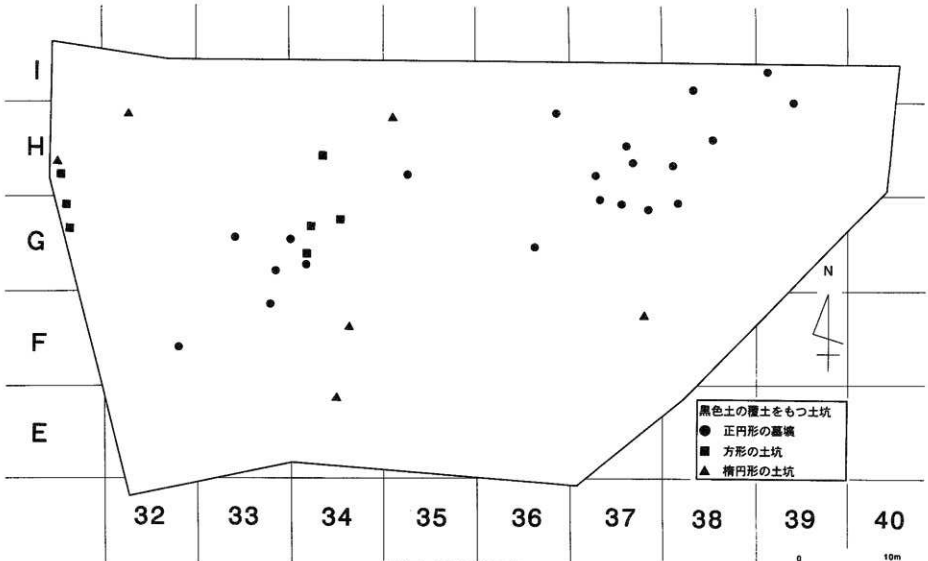
第9図が中近世の遺構全体図である。土坑が69基、炭窯7基、ピットが96基検出された。遺構は、調査区全域ににひろがっており、その分布状況に際だった特徴はない。覆土には遺物が含まれていなかったので、時期についてははっきりしない。しかし、覆土の色によって時期に若干の違いがあるように思われる。



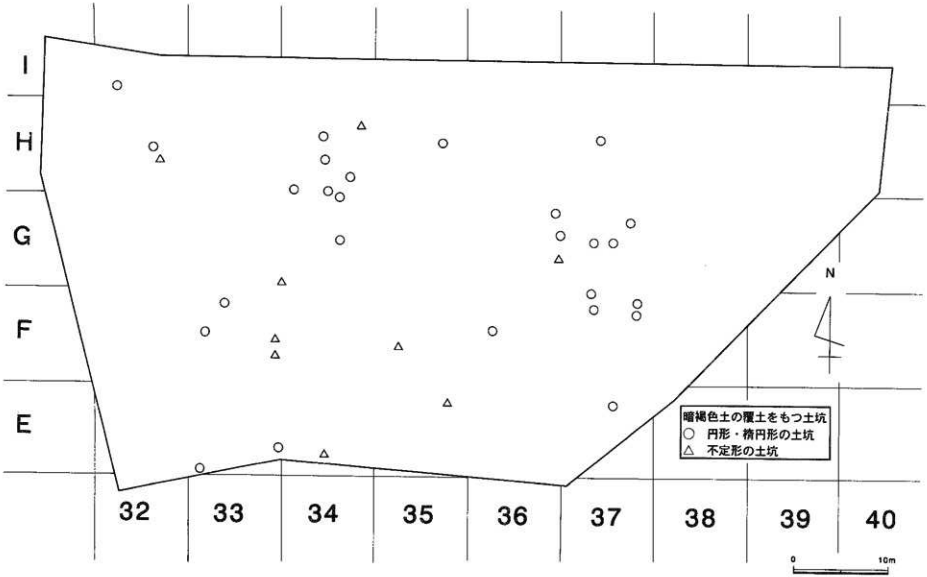
第8図　BB層礫分布図



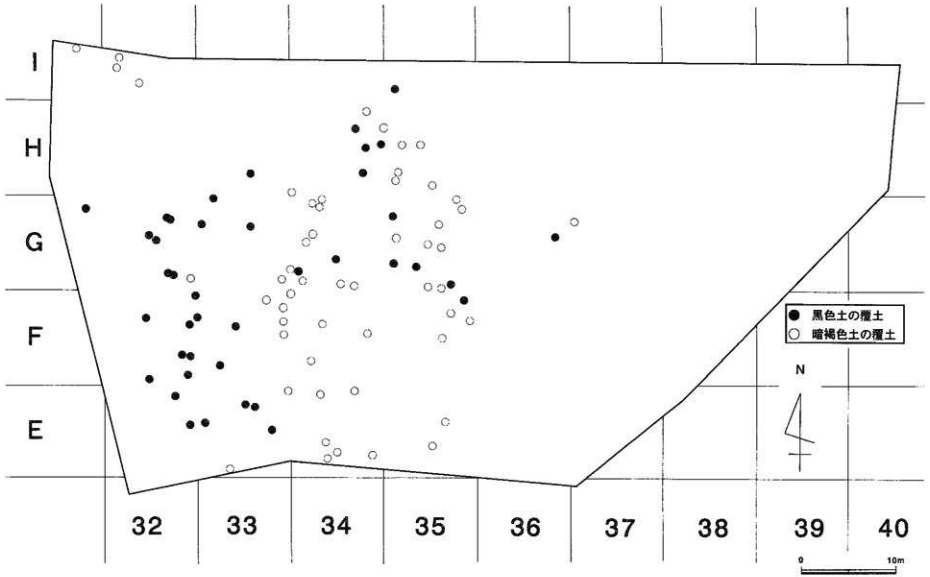
第9図　BB層遺構全体図



第10図　ＢＢ層土坑分布図１



第11図　ＢＢ層土坑分布図２



第12図　ＢＢ層ピット分布図

表4　ＢＢ層土坑計測表

遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	125	120	44	38号土坑	140	67	18
2号土坑	118	114	54	39号土坑	98	96	26
3号土坑	101	94	24	40号土坑	101	97	38
4号土坑	140	132	22	41号土坑	81	73	26
5号土坑	84	65	10	42号土坑	72	51	20
6号土坑	–	–	–	43号土坑	88	88	20
7号土坑	95	86	28	44号土坑	107	106	72
8号土坑	74	65	10	45号土坑	53	44	28
9号土坑	70	60	34	46号土坑	66	66	16
10号土坑	92	85	30	47号土坑	71	44	24
11号土坑	–	–	–	48号土坑	128	80	26
12号土坑	–	–	–	49号土坑	121	103	28
13号土坑	74	68	52	50号土坑	96	93	26
14号土坑	74	64	–	51号土坑	108	103	34
15号土坑	114	97	38	52号土坑	95	88	18
16号土坑	147	136	20	53号土坑	98	96	32
17号土坑	100	97	18	54号土坑	90	90	28
18号土坑	115	108	26	55号土坑	118	110	40
19号土坑	110	95	18	56号土坑	81	72	38
20号土坑	116	95	28	57号土坑	84	75	16
21号土坑	132	87	42	58号土坑	87	65	40
22号土坑	187	115	74	59号土坑	48	42	42
23号土坑	137	90	42	60号土坑	63	40	60
24号土坑	124	77	54	61号土坑	53	51	36
25号土坑	121	63	36	62号土坑	44	38	44
26号土坑	113	60	20	63号土坑	272	110	12
27号土坑	60	42	56	64号土坑	180	133	40
28号土坑	63	62	30	65号土坑	241	65	34
29号土坑	75	25	10	66号土坑	139	60	10
30号土坑	113	113	46	67号土坑	69	57	24
31号土坑	82	40	18	68号土坑	90	41	20
32号土坑	80	67	32	69号土坑	–	–	–
33号土坑	125	60	40	70号土坑	66	24	–
34号土坑	124	108	34	71号土坑	–	–	–
35号土坑	83	76	14	72号土坑	68	43	14
36号土坑	110	104	36	73号土坑	131	20	6
37号土坑	120	98	34	74号土坑	133	100	44

表5　ＢＢ層土坑内覆土一覧表

① 黒色土	7.5YR 1.7/1	パウダー状で粘性は弱い。1cm程の粗い粒子と2～3mmの赤色スコリアを含む
② 黒褐色土	7.5YR 3/1	粘性がなく、栗色のブロック混入
③ 暗褐色土	7.5YR 3/4	パウダー状の細粒で2～5mmの赤色スコリアを含む
④ 褐色土	7.5YR 4/4	褐色のブロックと2～3mmの赤色スコリアを含む
⑤ 明褐色土	7.5YR 5/6	パウダー状で粘性は弱い。赤色スコリアと白色パミスを含む

b 土 坑

土坑は69基検出されている。そのうち覆土が黒色土や黒褐色土のものと暗褐色土や褐色土のものとに、大きく2つに分けられる。覆土の色で時期差があると考えられる。

まず、黒色土や黒褐色土を覆土にもつ土坑34基を第10図に掲載した。形状は円形や方形、または楕円形のものに分けられる。遺物が出土したものはない。この中で直径1m前後の正円形の土坑が21基検出されている。覆土からの遺物の出土はなく、土坑の深さは20cm～50cmほどであった。これらと同形態のものが箱根山西麓や愛鷹山南麓でも検出されている。近世の墓壙と考えられるが、覆土中にキセルや六文銭が出土するわけでもなく、深さも浅い。用途に関しては、同様の墓壙が出土した八田原遺跡で墓であるという見解が出されている。その他に、方形の土坑が7基、格円形の土坑が6基検出されているが性格ははっきりしない。

次に、暗褐色土や褐色土を覆土にもつ土坑35基を第11図に掲載した。形状は、楕円形や不定形を呈し、最大径は40cm～180cm、深さは10cm～60cmくらいといろいろである。用途に関しては、はっきりしない。時期に関しては、上記土坑より古いと思われる。

1号土坑

F32グリットの東側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径125cm、検出面からの深さは44cmを測る。底部は平坦であり、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土と黒褐色土の二層に分かれ、赤色スコリアを少量含む。遺物の出土はみられないが近世の墓壙と考えられる。

2号土坑

G33グリットの南東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径118cmを測る。底部は比較的平坦である。検出面からの深さは54cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土と黒褐色土の二層に分かれ、赤色スコリアを含む。遺物の出土はみられないが近世の墓壙と考えられる。

3号土坑

G33グリットの中央部やや西側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径101cmを測る。検出面からの深さは24cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒褐色がほとんどであり、底部に栗色土層に似た明褐色土が少量堆積している。遺物の出土はみられないが近世の墓壙と考えられる。

4号土坑

H32グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径140cmを測る。検出面からの深さは22cmを測り、底部は比較的平坦である。立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアと白色パミスを含む。

5号土坑

F33グリットの北東に位置し、栗色上層上面で検出された。平面形は円形に近く、規模は最大径84cmを測る。検出面からの深さは10cmと浅く、底部からの立ち上がりがやや外傾したものとなっている。覆土は、2層に分層される。黒褐色で粘性の弱い覆土と明褐色でパウダー状のものである。遺物の出土がないが平面形や覆上から、近世の墓壙と考えている。

7号土坑

F33グリットの西側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形の形状を呈し、規模は最大径95cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、立ち上がりは西側が垂直に近く、東側が緩やかに外傾している。覆上は、褐色土と明褐色上の二層に分層される。

8号土坑

F33グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径74cmを測る。検出面からの深さは10cmと浅く、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾したものとなっている。覆土は、赤色スコリアを少量含んだ褐色である。

9号土坑

H32グリットの中央部やや北に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径70cmを測る。検出面からの深さは34cmを測り、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、暗褐色土と褐色土・明褐色土の三層に分かれている。明褐色土の中には、赤色スコリアや白色パミス・炭化物が多く含まれている。

10号土坑

E33グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径92cmを測る。検出面からの深さは30cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、褐色で柔らかく、やや粘りのあるものである。赤色スコリアが少量含まれる。

13号土坑

I32グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径74cmを測る。検出面からの深さは52cmを測る。覆土は、暗褐色土と褐色土・明褐色土に分層できる。底部からの立ち上がりは垂直に近い。

14号土坑

H34グリットの南側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径74cmを測る。

15号土坑

H35グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径114cmを測る。検出面からの深さは38cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土と黒褐色土の二層に分かれている。黒色土は、パウダー状の細粒で赤色スコリアを少量含む。遺物の出土はみられないが近世の墓壙と考えられる。

16号土坑

H35グリットの東側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径147cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、底部からの立ち上がりは、外傾している。覆土は、黒色土と黒褐色土・暗褐色土・明褐色土に分かれる。ブロック状で混入している明褐色土には赤色スコリアが多量に含まれている。

17号土坑

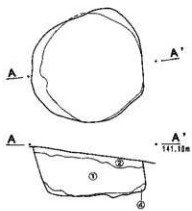
H35グリットの北西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径100cmを測る。検出面からの深さは18cmを測り、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、ほとんどが黒褐色である。

18号土坑

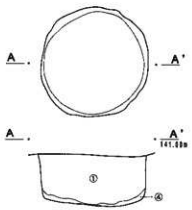
G34グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形の形状を呈し、規模は最大径115cmを測る。検出面からの深さは26cmを測る。底部は比較的平坦で、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土が主体であり、暗褐色土や褐色土・明褐色土が流れ込んでいる。遺物の出土はみられないが近世の墓壙と考えられる。

19号土坑

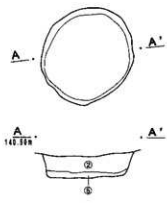
F34グリットの東側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大



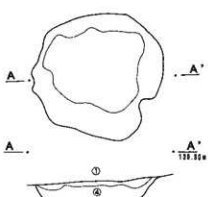
1号土坑



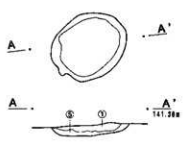
2号土坑



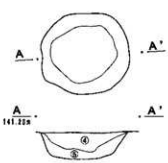
3号土坑



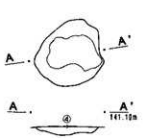
4号土坑



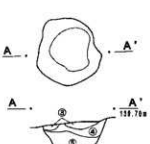
5号土坑



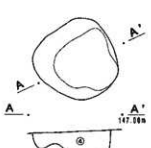
7号土坑



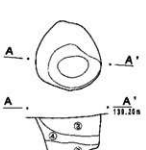
8号土坑



9号土坑



10号土坑



13号土坑

第13図　ＢＢ層土坑実測図１

径110cmを測る。検出面からの深さは18cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、２層に分層される。ほとんどが黒色土で、底部には栗色土層をベースにした明褐色土が流れ込んでいる。

20号土坑

G34グリットの北西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径166cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土と褐色土の２層に分かれている。黒色土の中には赤色スコリアを少量含む。

21号土坑

G34グリットの中央部やや北側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径132cmを測る。検出面からの深さは42cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、粘性が弱く、１cm程の粗い粒子を多く含んだ黒色土である。

22号土坑

H34グリットの中央部やや南側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径187cmを測る。検出面からの深さは74cmを測る。

23号土坑

G31グリットの中央部やや東側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径137cmを測る。検出面からの深さは42cmを測り、立ち上がりは東側が垂直に近い。覆土は、粘性が弱く、１cm程の粗い粒子を多く含んだ黒色土である。

24号土坑

H31グリットの南側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径124cmを測る。検出面からの深さは54cmを測る。底部からの立ち上がりは、ほとんど垂直に近い。覆土は、黒色土と暗褐色土・褐色土の３層に分層される。黒色土の中には、数ミリの赤色スコリアを含む。

25号土坑

G31グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径121cmを測る。検出面からの深さは36cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、粘性が弱く、１cm程の粗い粒子を多く含んだ黒色土である。

26号土坑

F35グリットの西側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径113cmを測る。検出面からの深さは20cmを測る。底部は比較的平坦で広く、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、黒色土と暗褐色土・褐色土に分かれる。

27号土坑

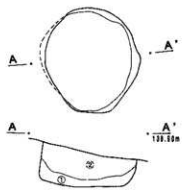
H34のグリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径60cmを測る。検出面からの深さは56cmを測り、底部からの立ち上がりはほとんど垂直に近い。覆土は、暗褐色土と褐色土の２層に分層される。暗褐色土はパウダー状の細粒であり粘性が弱いが、褐色土は粘性が強い。両層とも２～５mm程の赤色スコリアを含む。

28号土坑

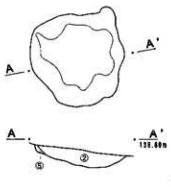
E35グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径63cmを測る。検出面からの深さは30cmを測り、立ち上がりは底部からなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、明褐色土と褐色土の２層に分層される。

29号土坑

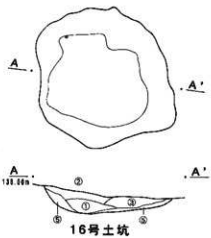
H32グリットの中央部やや南側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径75cmを測る。検出面からの深さは10cmと浅く、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾している。



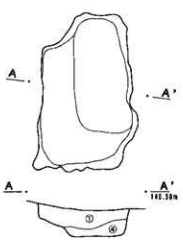
15号土坑



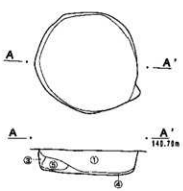
17号土坑



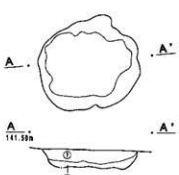
16号土坑



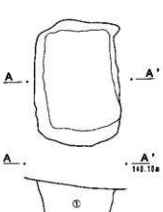
20号土坑



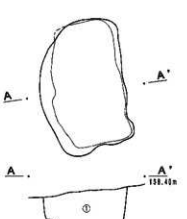
18号土坑



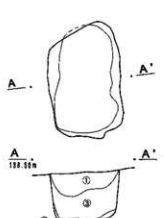
19号土坑



21号土坑



23号土坑



24号土坑

第14図　BB層土坑実測図2

覆土は、暗褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

30号土坑

G33グリットとG34グリットの中央部やや北側に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径113cmを測る。検出面からの深さは46cmを測る。底部は平坦で、立ち上がりは垂直である。覆土は、黒色土と暗褐色土の2層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

31号土坑

G33グリットとG34グリットの南側中央部に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径82cmを測る。検出面からの深さは18cmを測り、西側の立ち上がりは垂直に近く、東側は底部からなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、暗褐色土と褐色土の2層に分層される。

32号土坑

F33グリットの南東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径80cmを測る。検出面からの深さは32cmを測り、底部からの立ち上がりはやや外傾したものとなっている。覆土は、暗褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを含む。

33号土坑

E33グリットの南東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径125cmを測る。検出面からの深さは40cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、暗褐色土と褐色土の2層に分層される。

34号土坑

H37グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径124cmを測る。検出面からの深さは34cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒褐色で粘性が弱い。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

35号土坑

H37グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径83cmを測る。検出面からの深さは14cmを測り、立ち上がりは垂直に近いものとなっている。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

36号土坑

H37グリットの中央部やや北側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径110cmを測る。検出面からの深さは36cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

37号土坑

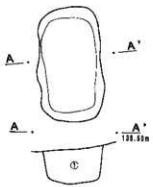
H36グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径120cmを測る。検出面からの深さは34cmを測る。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

38号土坑

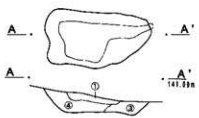
H37グリットの中央部やや北側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径140cmを測る。検出面からの深さは18cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、赤色スコリアを含んだ褐色土である。

39号土坑

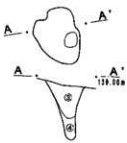
G37グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径98cm



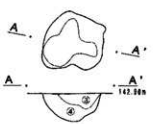
25号土坑



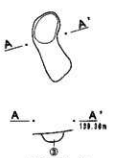
26号土坑



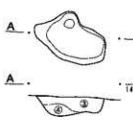
27号土坑



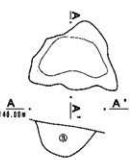
28号土坑



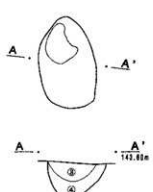
29号土坑



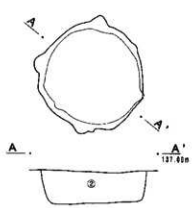
31号土坑



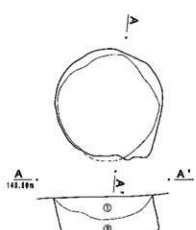
32号土坑



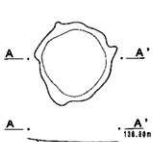
33号土坑



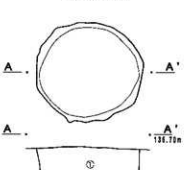
34号土坑



30号土坑

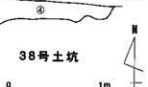


35号土坑



36号土坑

38号土坑



第15図　BB層土坑実測図3

を測る。検出面からの深さは26cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

40号土坑

G37グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径101cmを測る。検出面からの深さは38cmを測り、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

41号土坑

G37グリットの中央部やや西側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径81cmを測る。検出面からの深さは26cmを測る。底部からの立ち上がりは、緩やかに外傾している。覆土は、栗色土層をベースにした褐色土であり、柔らかく、やや粘りもある。赤色スコリアが少量含まれる。

42号土坑

G37グリットの中央部やや東側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径72cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、底部からの立ち上がりは、東側は垂直に近く、西側はやや外傾している。覆土は、褐色土と明褐色土の2層に分層される。

43号土坑

G36グリットの中央部やや東側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径88cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

44号土坑

G37グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径107cmを測る。検出面からの深さは72cmを測り、立ち上がりはやや外傾している。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

45号土坑

G37グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径53cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、立ち上がりはが垂直に近い。覆土は、赤色スコリアを含んだ褐色土である。

46号土坑

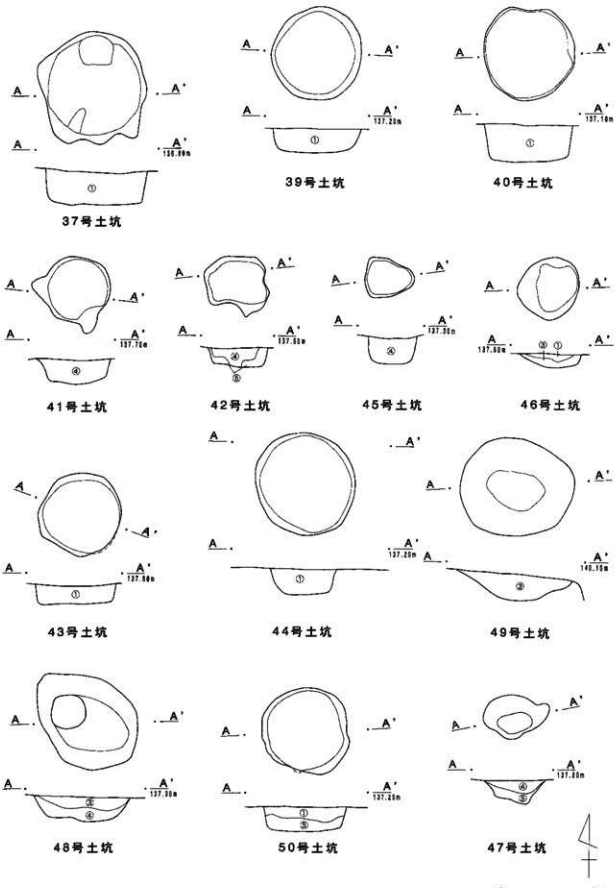
G36グリットの東側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径66cmを測る。検出面からの深さは16cmを測る。立ち上がりは、東側が垂直に近く、西側は緩やかに外傾している。覆土は黒色土と暗褐色土の2層に分層される。黒色土はパウダー状で、数ミリの赤色スコリアを含む。

47号土坑

G36グリットとG37グリットの南側中央に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径71cmを測る。検出面からの深さは24cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、褐色土と明褐色土の2層に分層される。明褐色土は、パウダー状で粘性が弱く、赤色スコリアと白色パミスを含んでいる。

48号土坑

G36グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径128cmを測る。検出面からの深さは26cmを測る。立ち上がりはやや外傾したものになっている。覆土は、暗褐色土と褐色土2層に分層される。両層とも赤色スコリアを含む。



第16図　ＢＢ層土坑実測図４

49号土坑

H34グリットとG34グリットの北側中央に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径121cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、暗褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを含む。

50号土坑

G38グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径96cmを測る。検出面からの深さは26cmを測り、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、黒色土と明褐色土の2層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

51号土坑

H38グリットの西側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径108cmを測る。検出面からの深さは34cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、黒色土と暗褐色土の2層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

52号土坑

H38グリットの中央部やや北に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径95cmを測る。検出面からの深さは18cmを測り、立ち上がりはやや外傾している。覆土は、黒色土と褐色土の2層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

53号土坑

I38グリットの南側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径98cmを測る。検出面からの深さは32cmを測る。底部は比較的平坦であり、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土の1層である。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

54号土坑

I39グリットの西側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径90cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、立ち上がりは東側がやや外傾し、西側がやや内傾している。覆土は、黒色土と黒褐色土の2層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

55号土坑

I39グリットとH39グリットの西側に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径118cmを測る。検出面からの深さは40cmを測り、立ち上がりは、ほぼ垂直である。覆土は、黒色土と黒褐色土・暗褐色土の3層に分層される。遺物の出土がないが平面形や覆土から、近世の墓壙と考えている。

56号土坑

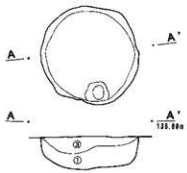
E37グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径81cmを測る。検出面からの深さは38cmを測り、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、暗褐色土と褐色土の2層に分層されている。

57号土坑

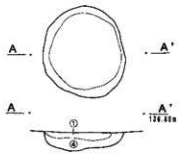
G38グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径84cmを測る。検出面からの深さは16cmを測り、立ち上がりは底部からなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、暗褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを含む。

58号土坑

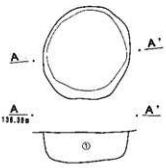
F37グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径87cmを測る。検出面からの深さは40cmを測り、底部からの立ち上がりはやや外傾している。覆土は、黒色土



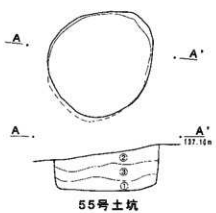
51号土坑



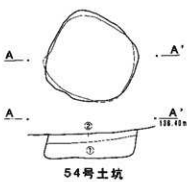
52号土坑



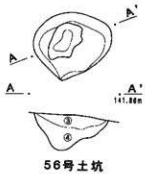
53号土坑



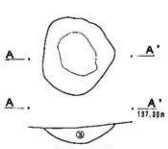
55号土坑



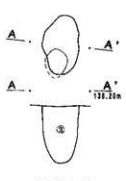
54号土坑



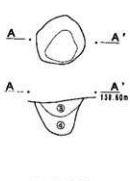
56号土坑



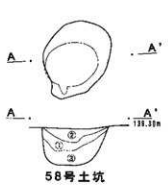
57号土坑



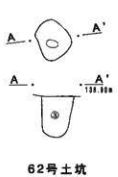
60号土坑



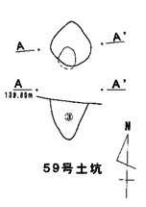
61号土坑



58号土坑



62号土坑



59号土坑

第17図　ＢＢ層土坑実測図5

と黒褐色土・暗褐色の３層に分層される。黒色土は、パウダー状で粘性が弱く、赤色スコリアを含む。

59号土坑

Ｆ36グリットの中央部やや西側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径48cmを測る。検出面からの深さは42cmを測る。立ち上がりは緩やかな外傾している。覆土は、暗褐色で柔らかく、５mm程の赤色スコリアを含んでいる。

60号土坑

Ｆ37グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径63cmを測る。検出面からの深さは60cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、暗褐色で柔らかく、５mm程の赤色スコリアを含んでいる。

61号土坑

Ｆ37グリット北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径53cmを測る。検出面からの深さは36cmを測り、底部からの立ち上がりは、緩やかに外傾したものとなっている。覆土は、２層に分層される。褐色のやや粘りのある覆土の上に暗褐色のパウダー状の細粒が流れ込んでいる。

62号土坑

Ｆ37グリットの北東に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径44cmを測る。検出面からの深さは44cmを測る。立ち上がりは垂直に近い。覆土は、暗褐色で柔らかく、５mm程の赤色スコリアを含んでいる。

63号土坑

Ｆ34グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径272cmを測る。検出面からの深さは12cmを測る。底部はやや西に傾斜していて、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒色土と褐色土の２層に分層される。

64号土坑

Ｈ34グリットの中央部やや北側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径180cmを測る。検出面からの深さは40cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、黒色土と暗褐色土・褐色土・明褐色土の４層に分層される。どの層にも赤色スコリアが含まれている。

65号土坑

Ｈ34グリットの中央部やや西側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径241cmを測る。検出面からの深さは34cmを測る。立ち上がりは、東側が垂直に近く、西側はやや外傾している。覆土は、黒色のパウダー状の細粒で赤色スコリアを少量含む。

66号土坑

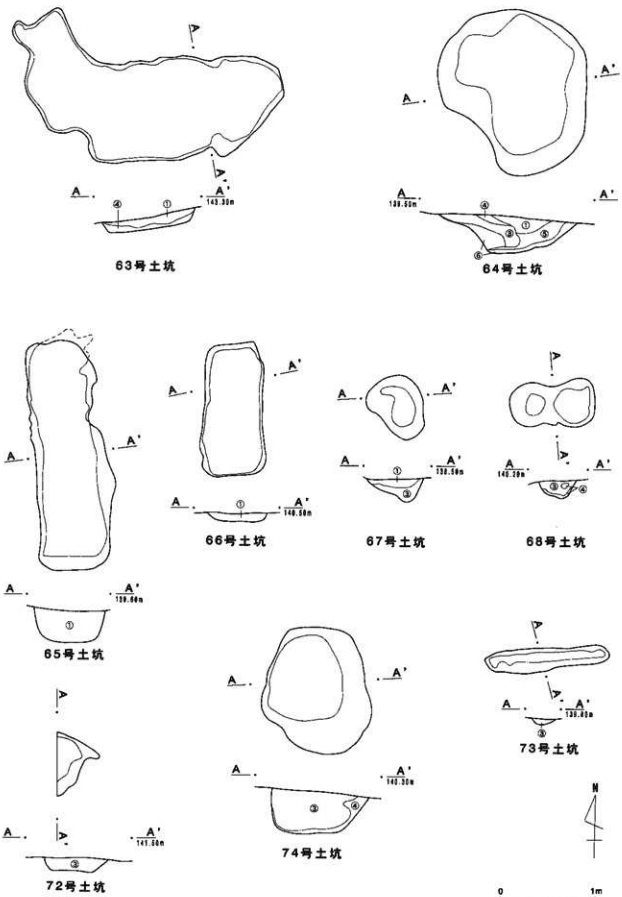
Ｇ34グリットの西側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径139cmを測る。検出面からの深さは10cmと浅く、底部からの立ち上がりは、やや外傾している。覆土は、黒色のパウダー状の細粒で赤色スコリアを少量含む。

67号土坑

Ｈ31グリットの中央部やや南側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径69cmを測る。検出面からの深さは24cmを測る。底部からの立ち上がりは、東側が垂直に近く、西側は緩やかに外傾している。覆土は、黒色土と暗褐色土の２層に分層される。

68号土坑

Ｇ34グリットの中央部やや東側に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径90cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、底部からの立ち上がりは、やや外傾している。覆



第18図　BB層土坑実測図6

土は、暗褐色土と褐色土の2層に分層される。

70号土坑

E34グリットの南側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形のを呈し、規模は最大径66cmを測る。検出面からの深さは32cmを測る。

72号土坑

F33グリットの東側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径68cmを測る。検出面からの深さは14cmを測る。底部からの立ち上がりは、東側が緩やかに外傾し、西側は垂直に近い。覆土は、パウダー状で粘性が弱く、赤色スコリアを含んだ暗褐色土である。

73号土坑

G34グリットの北側中央に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径131cmを測る。検出面からの深さは6cmと浅く、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、パウダー状で粘性が弱く、赤色スコリアを含んだ暗褐色土である。

74号土坑

H34グリットとG34グリットの西側に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は最大径133cmを測る。検出面からの深さは44cmを測る。底部からの立ち上がりは、東側がやや外傾し、西側は垂直に近い。覆土は、暗褐色土と褐色土の2層に分層される。褐色土は、柔らかくやや粘りがある。数ミリの赤色スコリアを含んでいる。暗褐色土は、パウダー状の細粒で、赤色スコリアを含む。

c 炭 窯

炭窯と考えられる遺構が7基検出された。覆土は、黒色土や黒褐色土であり、多量の炭化物を含んでいる。中世の出土例に、地面を掘り込み薪を積んで上に枝などを載せ、土を盛ったものがある。伏焼き式の窯で、現代でも行われている。煙道部もなく竹などを差し込んで煙道とするようである。簡単だが、炭の出来や熱効率もあまり良くない。このような炭窯の例、または覆土に多量の炭化物や焼土を含み、底部に残る炭化した薪等から炭窯と考えたが、なお検討の余地はある。また、出土遺物がなかったので時期もあまりはっきりしない。

1号炭窯

G32グリットとG33グリットの南側に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸2.55m×短軸2.50mを測る。検出面からの深さは50cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒褐色土がほとんどであり、底部には炭化した薪と焼土が残っていた。

2号炭窯

F32グリットの北西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は不定形であるが、方形に近い形状をしている。規模は長軸2.80m×短軸1.24m、検出面からの深さは12cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒褐色土や暗褐色土がほとんどである。

3号炭窯

F35グリットの北西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形に近く、規模は長軸2.92m×短軸2.00mを測る。検出面からの深さは26cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒色土や暗褐色土がほとんどである。

4号炭窯

G31グリットの南東に位置し、調査区の西端にあたる。栗色土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は長軸3.39m×短軸0.48mを測る。検出面からの深さは18cmを測る。覆土は、炭化物を多

量に含んだ暗褐色土がほとんどである。

5号炭窯

G36グリットの南西に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸4.48m×短軸1.58mを測る。検出面からの深さは24cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒褐色土がほとんどである。

6号炭窯

G36グリットとF36グリットの西側に跨って位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は隅丸方形の形状を呈し、規模は長軸1.70m×短軸1.56mを測る。検出面からの深さは16cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒褐色土や暗褐色土がほとんどである。

7号炭窯

F38グリットの中央部に位置し、栗色土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸3.77m×短軸2.30mを測る。検出面からの深さは36cmを測る。覆土は、炭化物を多量に含んだ黒色土と暗褐色土がほとんどである。

d　その他の遺構

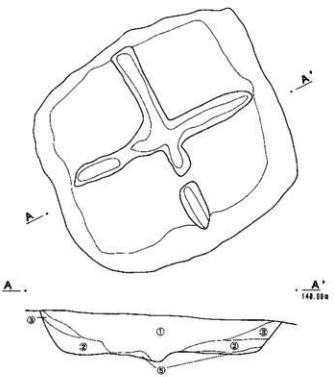
ピットは97基（第12図）検出されている。土坑と同様に、覆土が黒色土や黒褐色土のものと暗褐色土や褐色土のものとに分かれる。その分布には際立った特徴はないが、覆土の違いによって分布の状況が異なり、時期差と考えることができる。

表6　BB層炭窯計測表

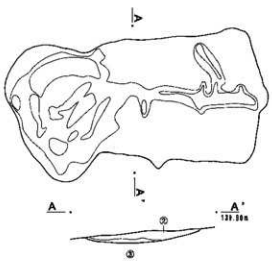
遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状
1号炭窯	255	236	50	隅丸方形
2号炭窯	280	123	12	不定形
3号炭窯	292	208	26	楕円形
4号炭窯	339	90	18	不定形
5号炭窯	448	165	24	隅丸方形
6号炭窯	170	157	16	隅丸方形
7号炭窯	377	223	36	楕円形

表7　BB層炭窯内覆土一覧表

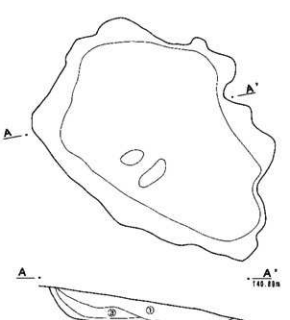
①黒色土	7.5YR 1.7/1	炭化物を多量に含み、粘性がほとんど無い
②黒褐色土	7.5YR 3/1	炭化物を多量に含み、栗色のブロックが混入
③暗褐色土	7.5YR 3/4	炭化物と赤色スコリアを含む
④褐色土	7.5YR 4/4	褐色のブロックと赤色スコリアを含む
⑤明褐色土	7.5YR 5/6	パウダー状で粘性は弱い



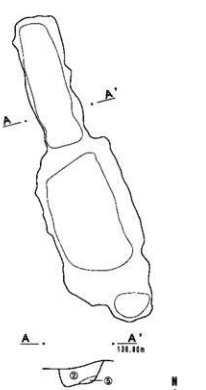
1号炭窯



2号炭窯

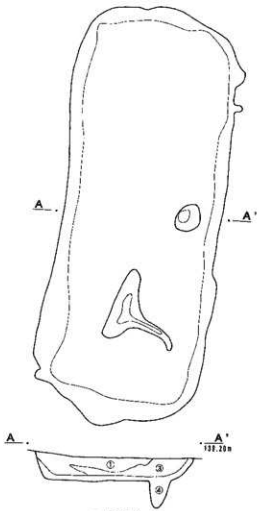


3号炭窯

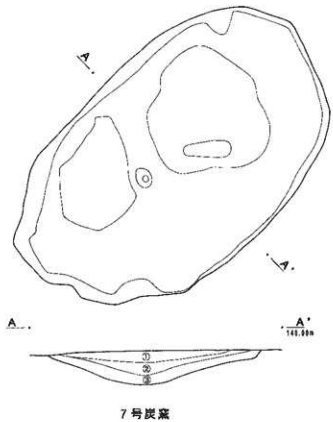


4号炭窯

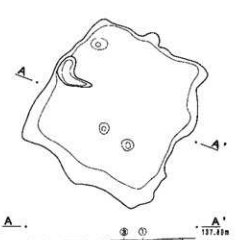
第19図　ＢＢ層炭窯実測図１



5号炭窯



7号炭窯



6号炭窯

第20図　ＢＢ層炭窯実測図２

2　古墳時代の遺物

a　古墳時代の土器

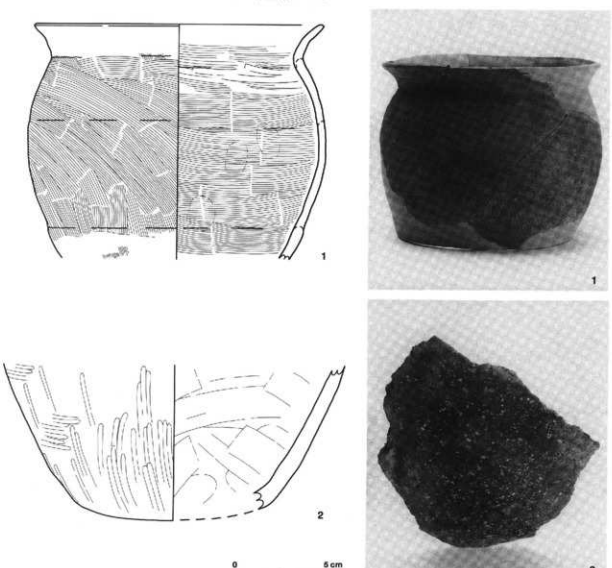
表土除去や桧の抜根作業の中で縄文時代より新しい土器を拾うことができた。調査区北側の谷部に位置するところに散在していた。

1は、一見すると古墳時代前期の刷毛目で仕上げられた土器で、遠江以西の影響を受けた台付甕になると考えられる。しかし、刷毛目がていねいで細かく、口唇部がきれいなのが気になる。前期以降と考えるならば、駿河の土器ではなく遠江以西の丸底か平底の甕と思われる。胎土にも駿河の土器の特徴である火山灰質の軽石を粉砕したものなどが入らず、器厚が薄いところから遠江以西の土器であると考える。

口唇部に刻みはなく、きれいな横撫でが施されている。胴部は、刷毛で斜め上方に器面調整を行っている。頸部は、胴部と同じ原体の刷毛で横方向に器面調整をしている。

2は、古墳時代前期以降の長胴甕の底部である。胎土に火山灰質の軽石を粉砕したものを含み、器厚も厚く、駿河の土器と思われる。

その他に、弥生土器とかわらけの小片を数点拾った。



第21図　古墳時代土器

第2節　縄文時代

1　縄文時代　中期の遺構（Ku）

a　概　観

本遺跡の栗色土層からは縄文時代中期の遺物が出土している。栗色土層の層厚は30～40cmあり、この時期の遺構には土坑やピット、焼土跡、集石がある。焼土跡や集石は栗色土層で確認できたが、土坑やピットは栗色土層中では確認できず、富士黒土層上面まで下げて確認を行った。第22図が栗色土層の遺構全体図である。土坑が22基、ピットが93基、焼土跡が５基、集石が９基検出された。ほとんどの遺構が１・２区に集中している。

b　土　坑

縄文時代中期の遺物は栗色土層中位で主体的に出土している。この時期に伴う遺構は富士黒土層上面まで下げて確認を試みた。したがって土坑の深さは、本来あるべき深さよりも20cm程浅いものとなっている。土坑は22基（第23図）検出されている。１号～７号は１区において検出され、８号～23号は２区において検出されている。規模や形態等についてはそれほど画一性は認められていないが、不定形な形状のものが多い。また、検出面が富士黒土層であり、遺物を伴うものはほとんどないので覆土等から本時代のものと判断している。

1号土坑

G33グリットの中央部よりやや北西に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径86cmを測る。検出面からの深さは14cmを測り、立ち上がりは底部からなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、栗色土層に似た特徴が見られる。

2号土坑

G33グリットの北西に位置し、富士黒土層上面で検出された。南東には１号土坑が隣接している。平面形は不定形を呈し、規模は最大径70cmを測る。底部は比較的平坦であるが、やや西に傾斜している。検出面からの深さは20cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

3号土坑

G32グリットの中央部やや南側に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径76cmを測る。検出面からの深さは12cmと浅く、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、褐色で柔らかく、やや粘りもあるものであり、栗色土層と富士黒土層の混土に近い。

5号土坑

E32グリットの東側中央に位置し、富士黒土層上面で検出された。東には６号土坑が近接している。平面形は楕円形の形状を呈し、規模は最大径126cmを測る。検出面からの深さは50cmを測り、東側の立ち上がりは垂直に近く、西側は底部からなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアが少量含まれる。

6号土坑

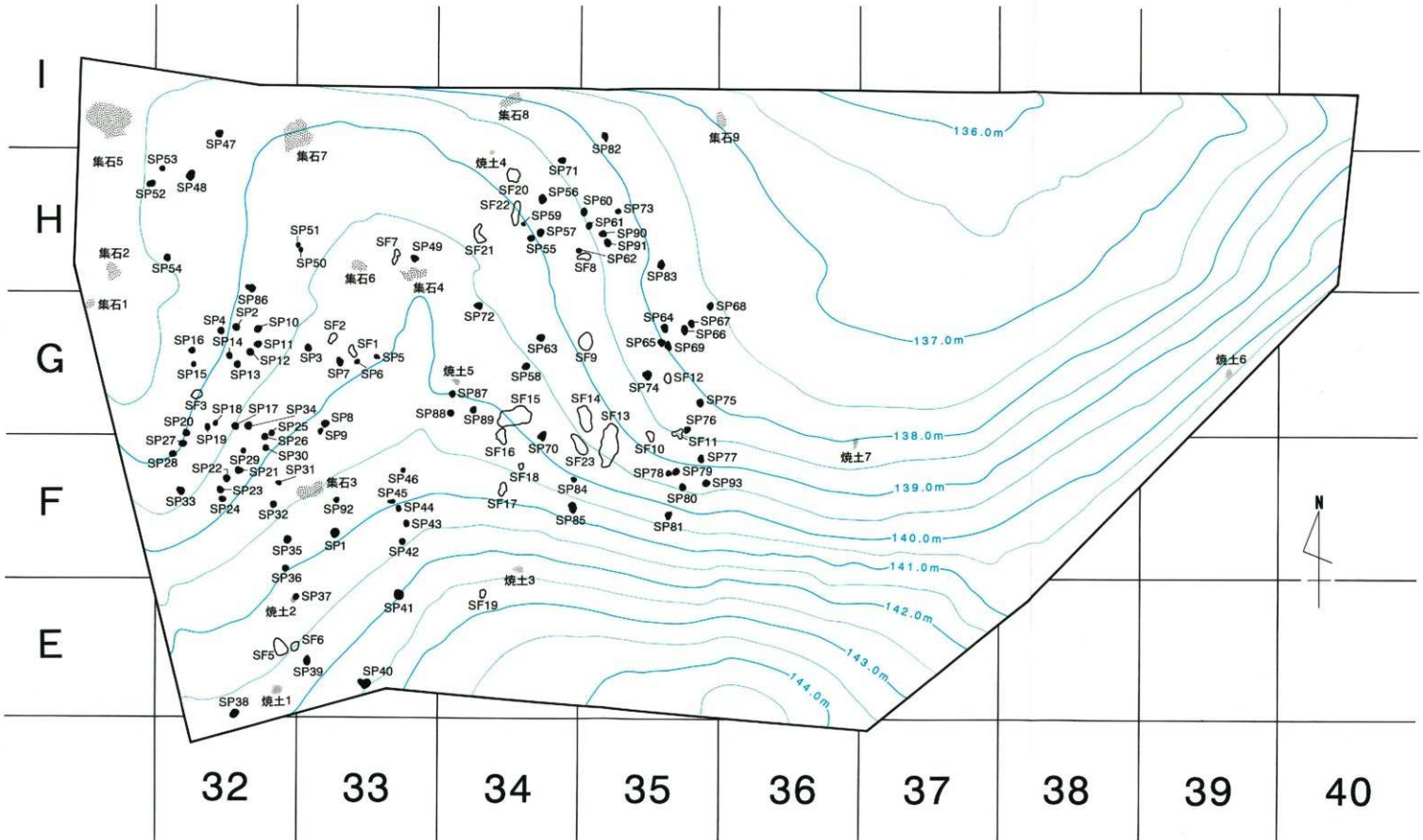
E32グリットとE33グリットの中央に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は方形に近く、規模は最大径80cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、底部からやや外傾したものとなっている。覆土は、２層に分層される。褐色のやや粘りのある覆土の上に明褐色のパウダー状の細粒が流れ込んでいる。

表8　Ku層土坑計測表

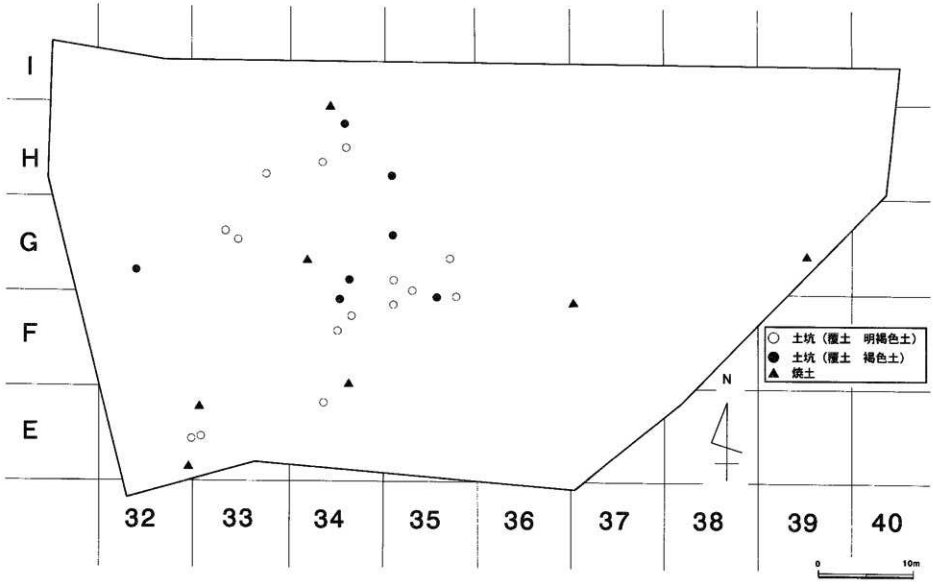
遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状
1号土坑	86	40	14	不定形
2号土坑	70	30	20	不定形
3号土坑	76	60	12	楕円形
4号土坑	-	-	-	-
5号土坑	126	70	50	楕円形
6号土坑	80	56	40	方形
7号土坑	108	26	22	不定形
8号土坑	100	44	54	楕円形
9号土坑	116	94	28	楕円形
10号土坑	72	42	50	楕円形
11号土坑	88	16	38	不定形
12号土坑	62	44	30	楕円形
13号土坑	316	120	54	不定形
14号土坑	184	82	26	楕円形
15号土坑	250	120	30	不定形
16号土坑	98	58	36	不定形
17号土坑	98	42	26	不定形
18号土坑	50	26	12	楕円形
19号土坑	62	38	14	方形
20号土坑	96	82	26	円形
21号土坑	138	40	22	不定形
22号土坑	176	54	38	楕円形
23号土坑	176	70	32	楕円形

表9　Ku層土坑内覆土一覧表

①明褐色土	7.5YR 5/6	パウダー状の細粒で2～3mmの赤色スコリアを少量含む
②褐色土	7.5YR 4/4	2～3mmの赤色スコリアを含む
③暗褐色土	7.5YR3/4	FB相当



第22図　Ｋｕ層遺構全体図



第23図　Ｋｕ層土坑・焼土分布図

7号土坑

H33グリットの中央部やや東側に位置し、富士黒土層上面で検出された。4号集石と6号集石の間にある。平面形は不定形の形状を呈し、規模は最大径108cmを測る。検出面からの深さは12cmと浅く、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

8号土坑

H34グリットとH35グリットの南側に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径100cmを測る。検出面からの深さは54cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、2層に分層される。覆土②褐色で柔らかく、やや粘りもあるものであり、栗色土層と富士黒土層の混土に近い。覆土③はやや暗い褐色土で粘りのある富士黒土層に似たものである。

9号土坑

G34グリットとG35グリットの北側に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径116cmを測る。検出面からの深さは28cmを測り、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、褐色で柔らかく、やや粘りのあるものであり、栗色土層と富士黒土層の混土に近い。

10号土坑

F35グリットとG35グリットの中央に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。東には11号土坑、西には13号土坑が隣接している。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径72cmを測る。検出面からの深さは50cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、褐色で柔らかく、やや粘りもあるものである。赤色スコリアが少量含まれる。

11号土坑

F35グリットとG35グリットの東側に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径88cmを測る。検出面からの深さは38cmを測る。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒である。

12号土坑

G35グリットの中央部やや東側に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径62cmを測る。検出面からの深さは30cmを測り、立ち上がりは垂直に近い。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

13号土坑

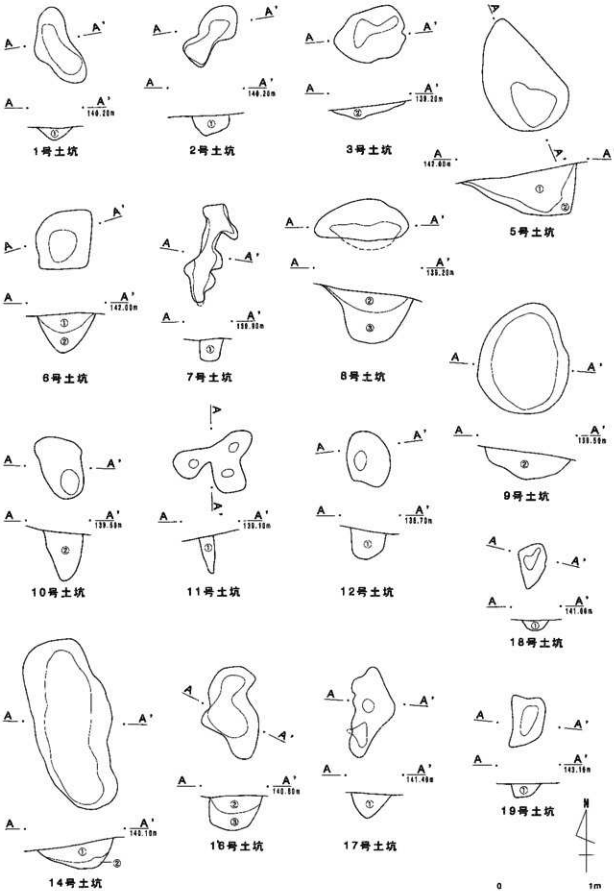
F35グリットとG35グリットの西側に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。周囲に10号土坑、14号土坑、23号土坑が近接している。平面形は不定形を呈し、規模は最大径316cmを測る大きな土坑である。検出面からの深さは54cmを測り、底部からの立ち上がりは西側が垂直に近く、東側はやや外傾している。覆土は、2層に分層される。覆土①は明褐色のパウダー状の細粒であり、数ミリの赤色スコリアを含む。覆土②は褐色で柔らかく、やや粘りもあるものであり、栗色土層と富士黒土層の混土に近い。

14号土坑

G34グリットとG35グリットの南側に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は最大径184cmを測る。検出面からの深さは26cmを測り、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、2層に分層される。覆土①は栗色土層をベースにした明褐色土であり、パウダー状で粘性が弱い。覆土②は栗色土層に富士黒土層が混入したものと思われ、柔らかく、やや粘りのある褐色土である。

15号土坑

G34グリットの中央部やや南側位置し、富士黒土層上面で検出された。南には16号土坑が近接してい



第24図　Ku層土坑実測図

る。平面形は不定形を呈し、規模は最大径250cmを測る。検出面からの深さは30cmを測る。底部は比較的平坦で広く、最大径が200cmを測る。覆土は、栗色土層をベースにした褐色土であり、柔らかく、やや粘りもある。赤色スコリアが少量含まれる。

16号土坑

F34グリットとG34グリットの中央に跨って位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径98cmを測る。検出面からの深さは36cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、2層に分層される。覆土②は栗色土層をベースにした褐色土であり、柔らかくやや粘りがある。数ミリの赤色スコリアを含んでいる。覆土③は褐色で柔らかく、やや粘りもあるものであり、栗色土層と富士黒土層の混土に近い。

17号土坑

F34グリットの中央部やや北側に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径98cmを測る。検出面からの深さは26cmを測り、立ち上がりはやや外傾している。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

18号土坑

F34グリットの中央部北側に位置し、富士黒土層上面で検出された。南側に17号土坑が隣接している。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径50cmを測る。検出面からの深さは12cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒である。

19号土坑

E34グリットの北西に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は方形を呈し、規模は最大径62cmを測る。検出面からの深さは14cmを測り、立ち上がりは西側が垂直に近く、東側はやや外傾している。覆土は、明褐色のパウダー状の細粒であり、赤色スコリアを少量含む。

20号土坑

H34グリットの中央部北側に位置し、富士黒土層上面で検出された。南側に22号土坑が隣接している。平面形は円形を呈し、規模は最大径96cmを測る。検出面からの深さは26cmを測る。底部は比較的平坦であり、立ち上がりはやや外傾している。覆土は栗色土層をベースにした褐色土であり、柔らかくやや粘りもある。数ミリの赤色スコリアを含む。

21号土坑

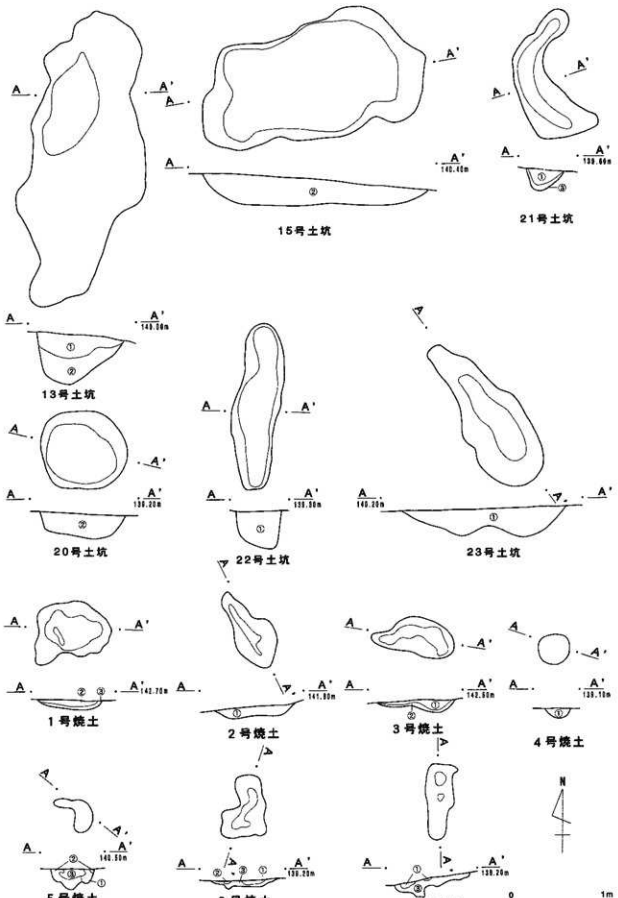
H34グリットの中央部やや西側に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径138cmを測る。検出面からの深さは22cmを測り、立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、2層に分層される。覆土①は栗色土層をベースにした明褐色土であり、パウダー状で粘性が弱い。覆土③は栗色土層に富士黒土層が混入したものと思われ、柔らかく、やや粘りもある褐色土である。

22号土坑

H34グリットの中央部やや北側に位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は最大径176cmを測る。検出面からの深さは38cmを測る。底部は比較的平坦で広く、最大径が168cmを測る。底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、栗色土層をベースにした明褐色土であり、パウダー状の細粒である。赤色スコリアが少量含まれる。

23号土坑

G35のグリット杭を囲むように位置し、富士黒土層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は最大径176cmを測る。検出面からの深さは32cmを測り、底部からの立ち上がりは外傾している。覆土は、栗色土層をベースにした明褐色土であり、パウダー状で粘性が弱い。5～10mm程の赤色スコリアを多く含む。



第25図　Ｋｕ層土坑・焼土実測図

c 焼 土

焼土は5基検出されているが、その分布（第23図）には際立った特徴はなく調査区全体に広がっている。いずれも、栗色土層中で検出されたものである。

1号焼土

E32グリットの南西に位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径82cm、焼土の深さは12cmを測る。

2号焼土

E32グリットとE33グリットの北側に跨って位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径92cm、焼土の深さは10cmを測る。

3号焼土

F34グリットの南側中央に位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径88cm、焼土の深さは14cmを測る。

4号焼土

I34グリットの南側中央に位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は最大径34cm、焼土の深さは10cmを測る。

5号焼土

G34グリットの西側中央に位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径34cm、焼土の深さは22cmを測る。

6号焼土

G39グリットの中央部やや東側に位置し、調査区の東端にあたる。栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径72cm、焼土の深さは10cmを測る。

7号焼土

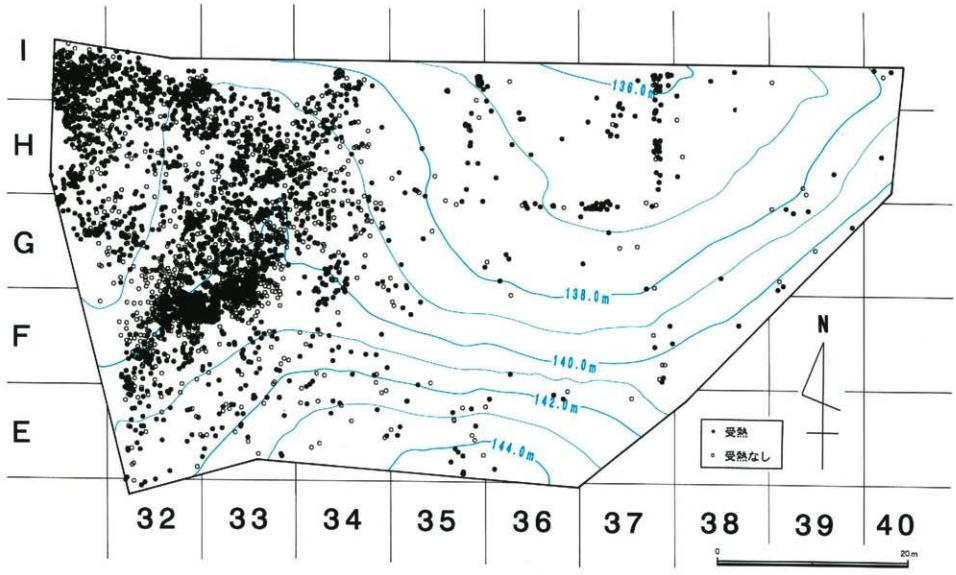
F36グリットの北東に位置し、栗色土層の掘り下げ中に検出された。平面形は不定形を呈し、規模は最大径80cm、焼土の深さは18cmを測る。

表10 Ku層焼土計測表

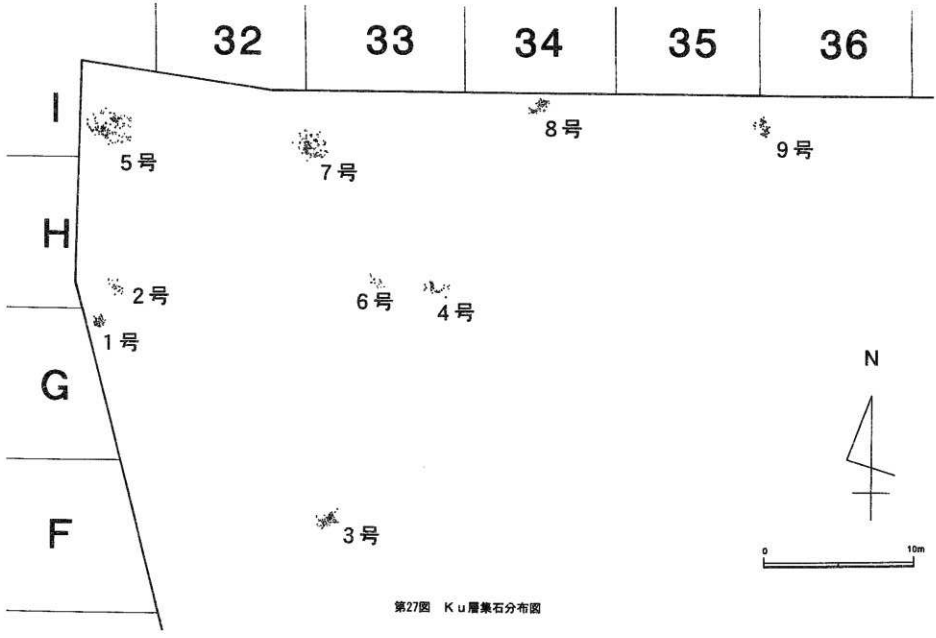
遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状
1号焼土	82	52	12	不定形
2号焼土	92	40	10	楕円形
3号焼土	88	38	12	楕円形
4号焼土	34	32	10	円形
5号焼土	36	16	22	不定形
6号焼土	64	28	6	不定形
7号焼土	78	28	20	不定形

表11 Ku層焼土内覆土一覧表

① 赤色土	10R 5/8	焼土のブロック内に炭化物を少量含む
② 赤褐色土	10R 4/4	3～5mm焼土のブロックと炭化物を多く含む
③ 暗赤褐色土	10R 3/3	焼土の粒が覆土に混入



第26図　Ｋｕ層礫分布図



第27図　Ｋｕ層集石分布図

d 集 石

礫の分布状況（第26図）は、1・2区に集中しており、礫の多くに赤変が認められ、破損礫もたくさんある。このような礫の分布状況の中で、特に礫が集中していたものを集石遺構として9基認定した。

1号集石

1号集石はG31グリットの北東において確認された。調査区の西の端にあり、北側に2号集石が近接して確認されている。1号の礫の集中が確認されたのは、栗色土層の下位であった。礫は長径1mほどの楕円形の範囲に密集しており、大きさは拳大からそれよりやや大きい。また礫の多くに赤変が認められ、ほとんどが破損礫であった。

2号集石

2号集石はH31グリットの南東において確認された。礫の集中が確認されたのは栗色土層の中位であり、南側に近接している1号集石よりやや上位に分布している。礫の集中の程度は弱いが、全部が赤変していた。礫の大きさは拳大からそれよりやや大きく、破損礫も多い。

3号集石

3号集石はF33グリットの北西において確認された。礫の集中が確認されたのは栗色土層の下位であり、比較的小さめの礫が広範囲に広がっている。他の集石と比べると、赤変している礫が少ない。

4号集石

4号集石はH33グリットの南東において確認された。礫の集中が確認されたのは栗色土層の中位である。礫の大きさは拳大からそれよりやや大きく、ほとんどが赤変している。また完形の礫は少ない。

5号集石

5号集石はI31グリットの南東において確認された。拳大の礫が広範囲に分布している。ほとんどの礫が赤変し、破損している。

6号集石

6号集石はH33グリットの南側において確認された。隣接する4号集石に比べて、礫の大きさは小さく、集中の程度も弱い。ほとんどの礫が赤変し、破損している。

7号集石

7号集石はI32グリットとI33グリットの南側に跨った位置において確認された。礫の大きさは拳大からそれより大きく、広範囲に広がっている。他の集石と同様に赤変している礫が多い。

8号集石

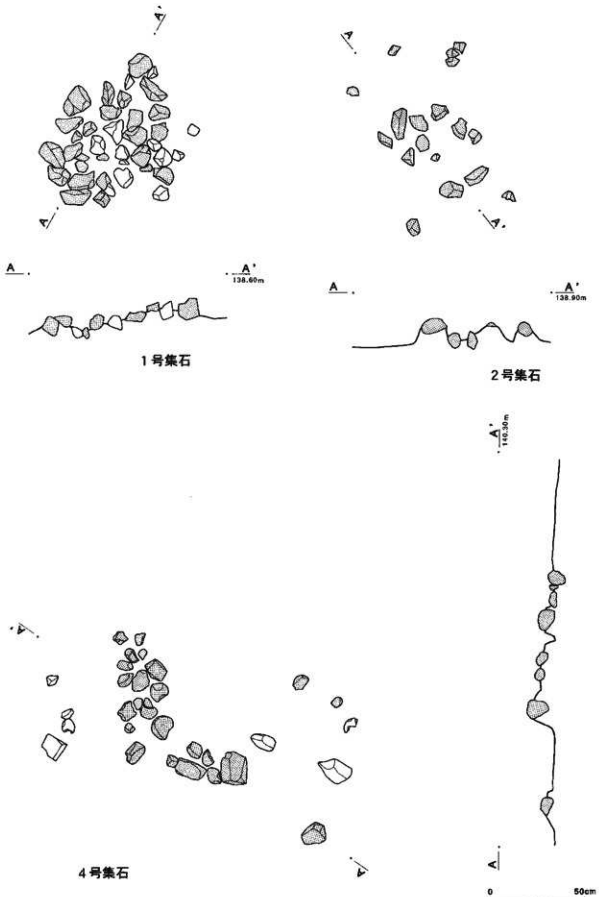
8号集石はI34グリットの南側において確認された。調査区の北のはずれの谷頭に位置し、栗色土層中位より検出された。礫の集中する範囲は、長軸1.4m×短軸0.6mの広がりをもち、北東側に拳大より大きい礫が集中している。ほとんどの礫が赤変し、破損している。

9号集石

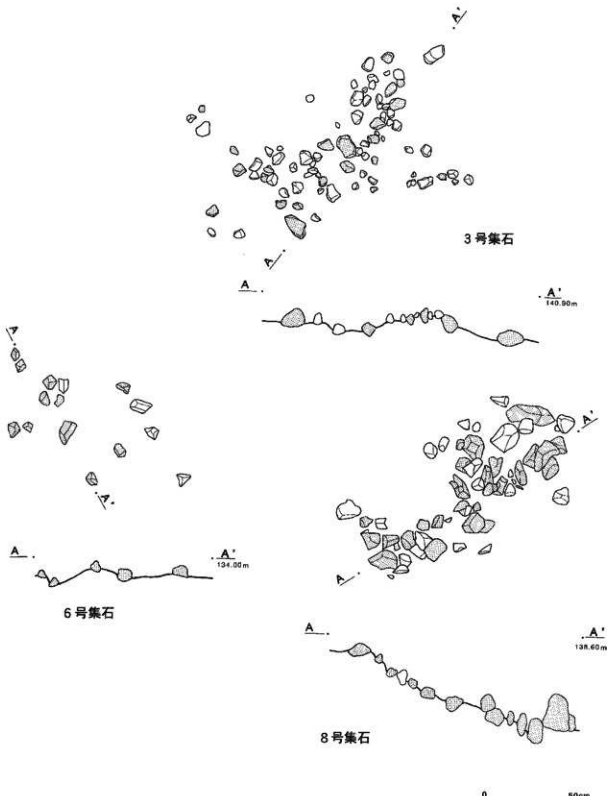
9号集石はI35グリットとI36グリットの南側に跨った位置において確認された。人頭大の大きな礫を南側に配し、拳大の礫が長楕円形に広がっている。礫の範囲は、長軸1.1m×短軸0.4mを測る。ほとんどの礫が赤変している。

e その他の遺構

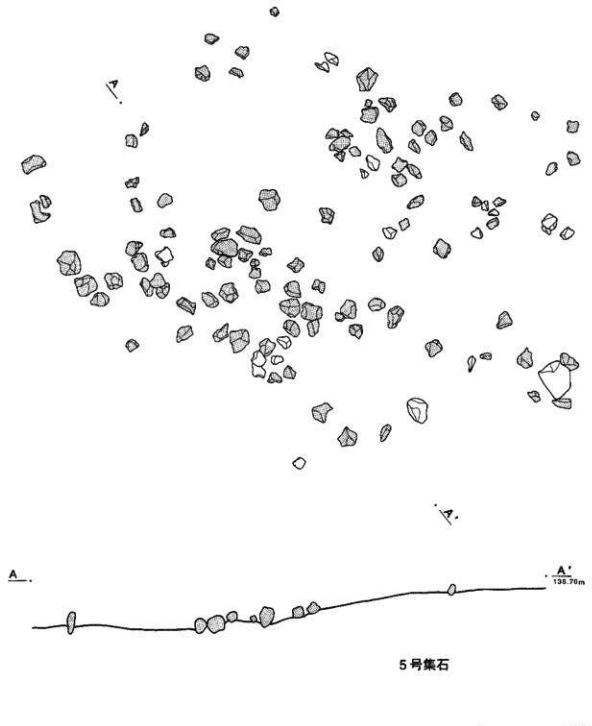
ピットは、1・2区から全部で93基（第32図）検出されている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は最大径が40cm以下である。検出面からの深さは、10cm程度のものから60cmを越えるものもある。覆土は、ほとんどが明褐色のパウダー状の細粒であり、残りの6基は褐色のやや粘性のある覆土をもつ。



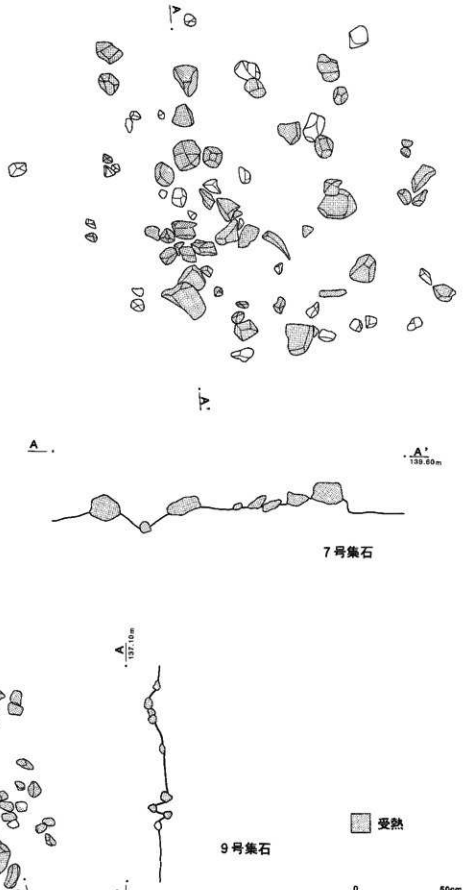
第28図　Ｋｕ層集石実測図１（1/20）



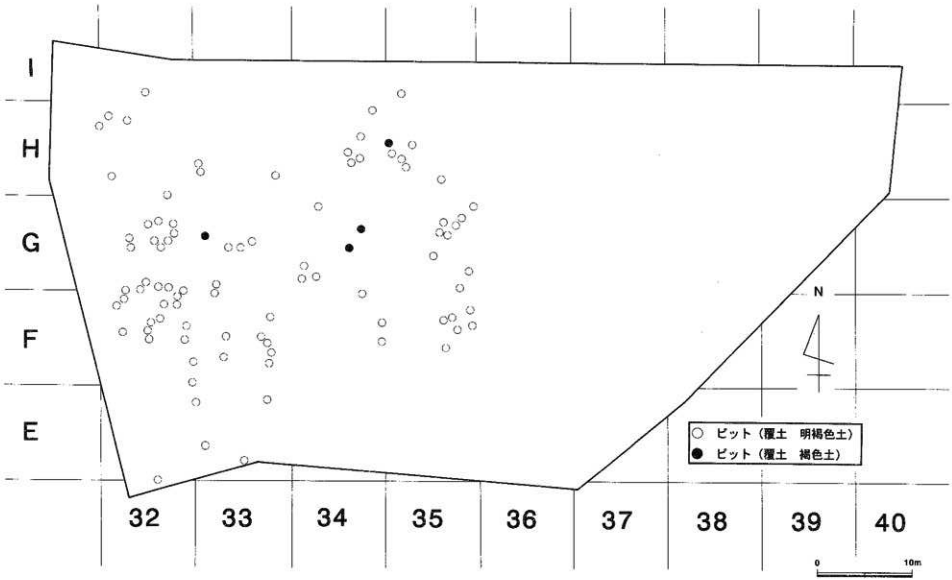
第29図　Ｋｕ層集石実測図２（1/20）



第30図　Ｋｕ層集石実測図３（1/20）



第31図　Ｋｕ層集石実測図４（1/20）

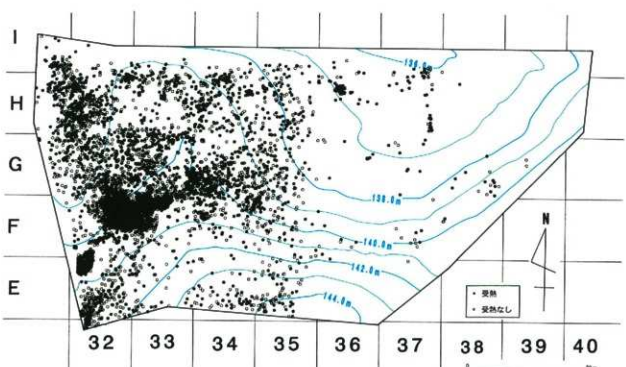


第32図　Ｋｕ層ピット分布図

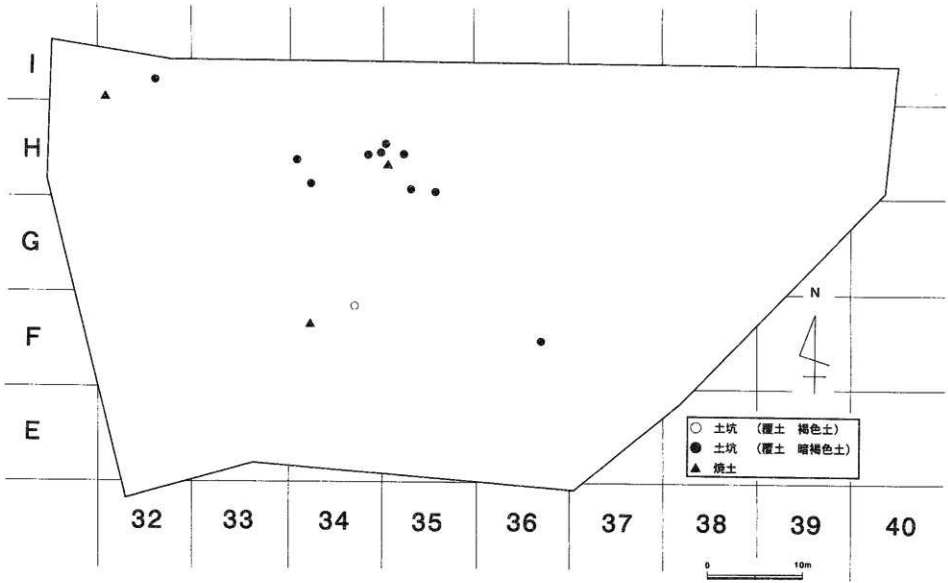
2　縄文時代　早・前期の遺構（ＦＢ）

a　概　観

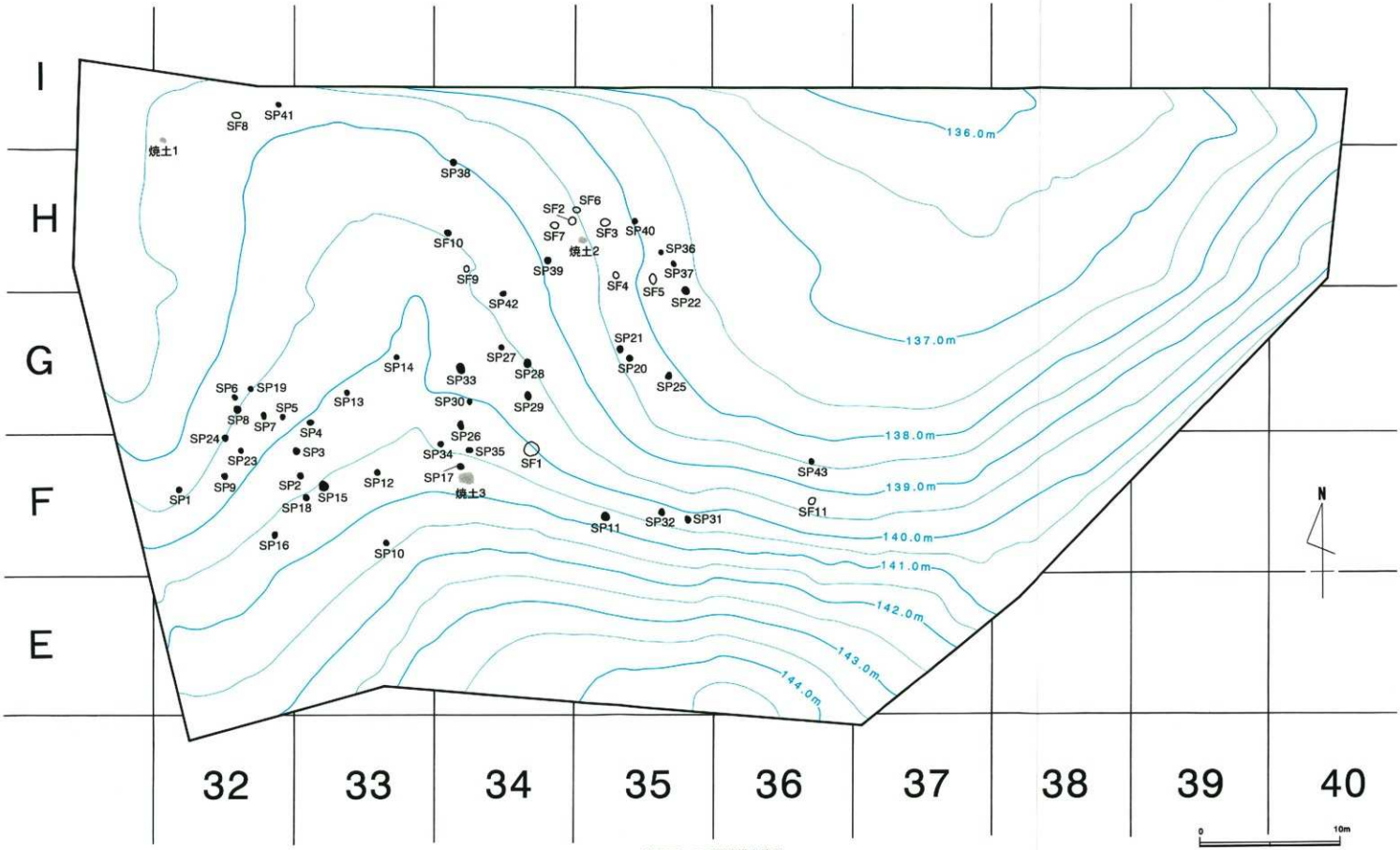
本遺跡の富士黒土層からは縄文時代早・前期の遺物が出土している。しかし、富士黒土層の堆積状況が悪いため、休場層以下第Ⅲスコリア層までの混土や中部ローム層及びその下部の軽石層が所々に露出している。調査時点で、この軽石層の礫まで富士黒土層の礫として多量に取り上げてしまった。そこで、富士黒土層の礫については、参考までに第33図を掲載するに留めたい。この時期の遺構には、土坑やピット・焼土がある。焼土は富士黒土層中で確認できたが、土坑やピットは富士黒土層中では確認できずその下面の中部ローム上面まで下げて確認を行った。第35図が富士黒土層の遺構全体図である。土坑が11基、ピットが43基、焼土が３基検出されたが、ほとんどが１・２区に分布している。



第33図　ＦＢ層礫分布図



第34図 ＦＢ層土坑・焼土分布図



第35図　ＦＢ層遺構全体図

b　土　坑

縄文時代早・前期の遺物は富士黒土層中位で主体的に出土している。この時期に伴う遺構は中部ローム層上面まで下げて確認を試みた。土坑は11基（第34図）検出されているが、ほとんどが2区の北側に集中している。規模は最大径が50cm前後のものが多く、形態は円形か楕円形である。

1号土坑

F34グリットの北東に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は最大径106cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、底部は皿状でなだらかに外傾したものとなっている。覆土は、暗褐色土であり、数センチの黄褐色土のブロックが混ざり、粘性がある。

2号土坑

H34グリットとH35グリットの中央に跨って位置し、周囲には3号・6号・7号土坑が隣接している。平面形はほぼ円形を呈し、規模は最大径52cmを測る。検出面からの深さは52cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

3号土坑

H35グリットの中央部西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径56cmを測る。検出面からの深さは66cmを測り、立ち上がりは底部からほぼ垂直に近い。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

4号土坑

H35グリットの南東に位置し、東には5号土坑が隣接している。平面形は円形を呈し、規模は最大径50cmを測る。検出面からの深さは42cmを測り、底部からの立ち上がりは垂直に近い。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

5号土坑

H35グリットの中央部南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径68cmを測る。底部からの立ち上がりは、ほぼ垂直である。覆土は褐色のパウダー状の細粒である。

6号土坑

H34グリットとH35グリットの中央に跨って位置する。平面形は楕円形に近く、規模は最大径54cmを測る。検出面からの深さは32cmを測り、底部からの立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

7号土坑

H34グリットの中央部東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径44cmを測る。検出面からの深さは26cmと浅く、立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

8号土坑

I32グリットの中央部南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は最大径44cmを測る。検出面からの深さは38cmを測り、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は褐色のパウダー状の細粒である。

9号土坑

H34グリットの南西に位置する。平面形は円形を呈し、規模は最大径36cmを測る。検出面からの深さは12cmと浅く、立ち上がりは西側が緩やかに外傾し、東側は垂直に近い。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

10号土坑

H34グリットの中央部西側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は最大径38cmを測る。検出面から

表12　ＦＢ層土坑計測表

遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状
1号土坑	106	96	20	円形
2号土坑	52	50	52	円形
3号土坑	56	40	66	楕円形
4号土坑	50	48	42	円形
5号土坑	68	40	28	楕円形
6号土坑	54	28	32	楕円形
7号土坑	44	33	26	楕円形
8号土坑	44	30	38	楕円形
9号土坑	36	34	12	円形
10号土坑	38	30	14	円形
11号土坑	54	43	20	円形

表13　ＦＢ層土坑内覆土一覧表

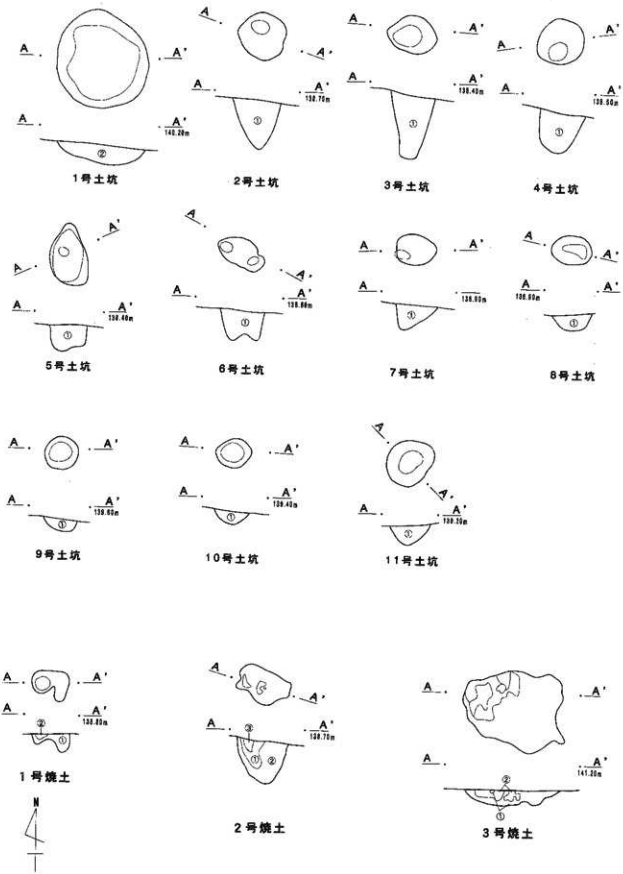
① 褐色土	7.5YR 4/4	パウダー状の細粒
② 暗褐色土	7.5YR 3/4	黄褐色のブロックが少量混入し粘性がある

表14　ＦＢ層焼土計測表

遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形状
1号焼土	40	19	20	不定形
2号焼土	60	40	44	不定形
3号焼土	104	76	18	不定形

表15　ＦＢ層焼土内覆土一覧表

① 赤色土	10R 5/8	焼土のブロック
② 赤褐色土	10R 4/4	数ｃｍの焼土のブロックを多量に含み、炭酸物が混入
③ 暗赤褐色土	10R 3/3	焼土の粒が少量含まれる



第36図　ＦＢ層土坑・焼土実測図

の深さは14cmと浅く、底部からの立ち上がりは緩やかに外傾している。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

11号土坑

F36グリットの中央部やや東側に位置する。平面形はほぼ円形の形状を呈し、規模は最大径54cmを測る。検出面からの深さは20cmを測り、立ち上がりは底部から緩やかに外傾している。覆土は、褐色のパウダー状の細粒である。

c 焼 土

焼土は3基検出されている。1区と2区に分布しているが特に特徴はない。いずれも富士黒土層中で検出されたものである。

1号焼土

I32グリットの南西に位置する。平面形は不定形を呈し、規模は最大径40cmを測る。焼土の深さは、20cmを測る。

2号焼土

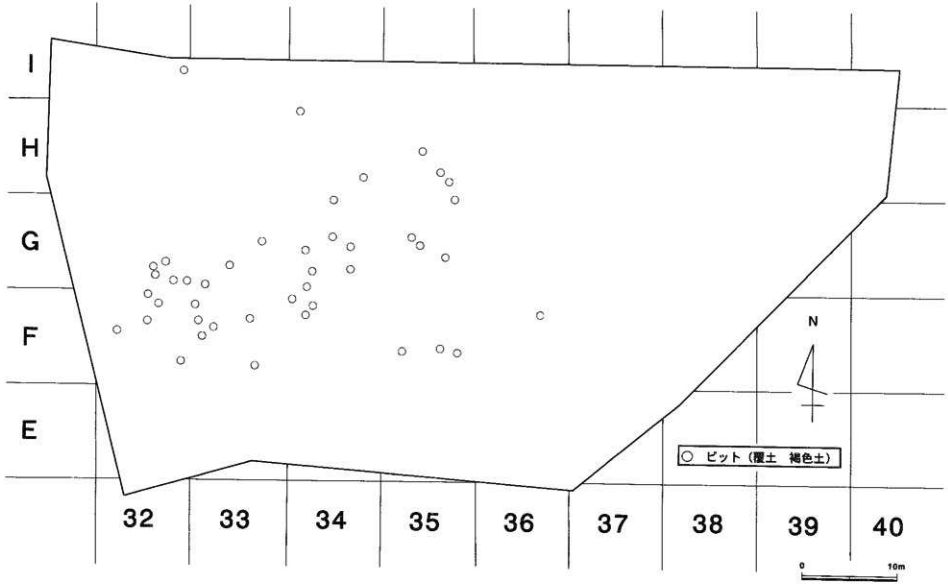
H35グリットの南西に位置する。平面形は不定形を呈し、規模は最大径60cmを測る。焼土の深さは、44cmを測る。

3号焼土

F34グリットの北西に位置する。平面形は不定形を呈し、規模は最大径104cmを測る。焼土の深さは、18cmを測る。

d その他の遺構

ピットは1・2区を中心に43基（第37図）検出されている。その分布には際立った特徴はない。規模は最大径30cm以下であり、検出面からの深さは10cm程度のものから60cmを越えるものもある。覆土は、すべて褐色のパウダー状の細粒である。



第37図　ＦＢ層ピット分布図

3　縄文時代　早・前期の土器

a　概　観

本遺跡から出土した縄文時代早・前期の土器は、早期の撚糸文の施される土器群（第１群）、押型文土器群（第２群）、早期後半の条痕文土器群（第３群）、早期後半の東海系の条痕文土器群（第４群）、早期末の土器群（第５群）、早期全体に伴う無文土器ないしは条痕文土器群（６群）、前期後半の竹管文土器群（第７群）前期後半の関西系土器群（第８群）に大別される。

これらの土器群の遺跡内における出土状況について第38図に掲載した。撚糸文土器（第１群）は３点全てが富士黒土層から出土している。押型文土器（第２群）は、41点出土した中で76%が富士黒土層、残りの24%が栗色土層から出土している。層位的に、両者の前後関係についてはそれほど明確な差を認めることができなかった。しかし平面的な分布を見ると、撚糸文土器は広範囲に分布しているのに対して、押型文土器は２区の中央部と１区の北側に集中した分布を見せている。土器の出土状況だけから判断すると、１群と２群には時期差があると考えられる。条痕文土器（第３群）と東海系条痕文土器（第４群）は、両者とも70%程度が富士黒土層から出土し、残りが栗色土層からである。平面的分布状況も１区を中心に２区の北側まで広範囲に広がっている。この両者は、層位的にも平面的にもその分布状況から明確な時期差を読み取ることはできない。

１群から４群までの土器群及び早期末と考えられる土器群（第５群）、条痕文系の無文土器群（第６群）を含めた早期と考えられる土器全体の出土状況について触れてみたい。早期の土器は1609点出土しており、そのうちの1416点が富士黒土層からである。このように、早期の土器群はほとんどが富士黒土層から出土しており、平面的には１区全体と２区の北側に分布していることが分かる。

前期後半の竹管文土器（第７群）は235点出土し、そのうちの62%に当たる145点が富士黒土層から出土している。前期後半の北白川下層式と考えられる関西系の土器（第８群）は、ほとんどが富士黒土層からの出土である。層位的にみると、前期後半の土器群から栗色土層出土の土器の割合が少しずつ増えてくる。また、平面的には早期の土器群に比べて前期の土器群は、２区・３区の南側にまで広がった分布を見せている。

このように、各群ごとの土器群、早期と前期の土器群を層位的に、また平面的にみていくことによって、それぞれの前後関係がある程度見えてくる。

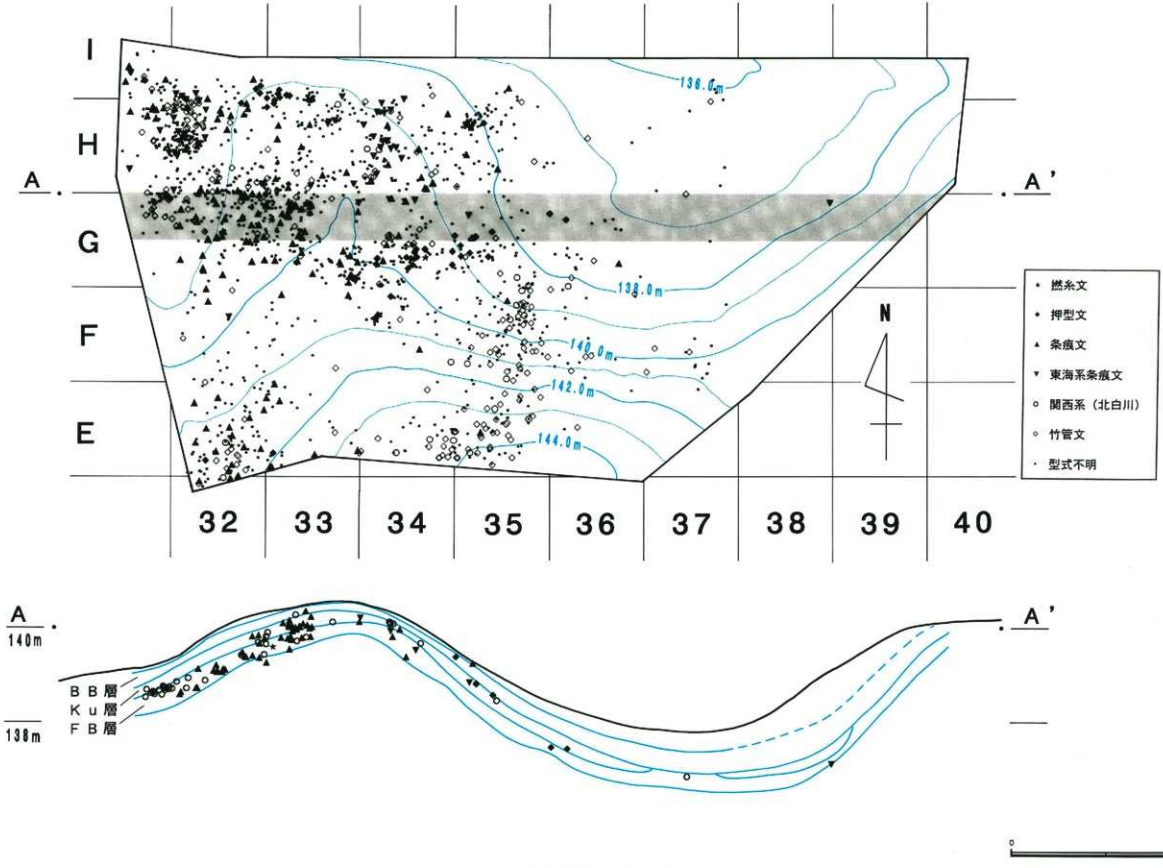
b　第１群（撚糸文）１～３

早期前半の撚糸文系の土器を１群とした。富士黒土層より３点出土し、すべて１段の撚糸文が施されている。３点とも繊維を含んでおり、撚糸文系土器としては比較的後出のものと考えられる

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
1	ＦＢ	1505	撚糸文	橙	黒色岩、白色岩、繊維含む	口端部表裏に1段のRの撚糸文
2	ＦＢ	1056	撚糸文	明赤褐	黒雲母、繊維含む	1段のＬの撚糸文
3	ＦＢ	1278	撚糸文	明褐	黒色岩、繊維含む	1段のＬの撚糸文

c　第２群（押型文）

早期の押型文土器を２群とした。押型文土器は合計で41点出土しており、掲載したもの以外に楕円文は15点を数える。いずれも密接に施文されている。掲載した山形文２点、楕円文20点のうち４～15は繊維を含んでいる。また、繊維を含んでいる11点の土器はほとんどが富士黒土層からの出土であり、繊維を含んでいない残りの土器との間に、層位的に時期差が存在すると考えられる。



第38図　早・前期土器分布図

第２群ａ類（山形文）４・５

山形文を横位に密接施文した土器を２群ａ類とした。富士黒土層より２点出土しており、両方とも胎土に繊維が含まれている。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
4	ＦＢ	1711	押型文	橙	金雲母、石英、長石、白色岩 繊維含む	山形文を横位に密接施文
5	ＦＢ	1264	押型文	橙	黒雲母、繊維含む	山形文を横位に密接施文

第２群ｂ類（楕円文）６～29

楕円文を横位に密接施文した土器を２群ｂ類とした。出土した土器の80%以上が富士黒土層から出土しており、胎土に繊維を含んだものと含まないものがある。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
6	ＦＢ	1371	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩 繊維含む	口縁部直下より楕円文を密接施文
7	ＦＢ	1541	押型文	明赤褐	黒色岩、石英、繊維含む	楕円文を密接施文
8	ＦＢ	1345	押型文	明褐	金雲母、石英、白色岩 繊維含む	楕円文を密接施文
9	Ｋｕ	1104	押型文	明赤褐	黒色岩、石英、繊維含む	楕円文を密接施文
10	ＦＢ	1472	押型文	赤褐	金雲母、石英、白色岩 繊維含む	楕円文を密接施文
11	ＦＢ	1522	押型文	明赤褐	輝石、繊維含む	楕円文を密接施文
12	ＦＢ	702	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英 繊維含む	楕円文を密接施文
13	ＦＢ	1366	押型文	明赤褐	黒色岩、石英、繊維含む	楕円文を密接施文
14	ＦＢ	1372	押型文	明赤褐	石英、繊維含む	楕円文を密接施文
15	ＦＢ	254	押型文	明褐	金雲母、石英、白色岩 繊維含む	楕円文を密接施文
16	ＦＢ	167	押型文	明赤褐	輝石、金雲母、石英、長石 白色岩	口縁部直下より楕円文を密接施文
17	ＦＢ	1475	押型文	暗赤褐	白色岩	口縁部直下より楕円文を密接施文
18	ＦＢ	387	押型文	にぶい赤褐	金雲母、石英、白色岩	口縁部直下より楕円文を密接施文
19	Ｋｕ	151	押型文	明赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
20	ＦＢ	705	押型文	にぶい橙	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
21	Ｋｕ	557	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英、長石 白色岩	楕円文を密接施文
22	ＦＢ	1261	押型文	赤褐	輝石、石英	楕円文を密接施文
23	ＦＢ	1608	押型文	明赤褐	輝石、金雲母、石英	楕円文を密接施文
24	ＦＢ	1435	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
25	Ｋｕ	34	押型文	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
26	ＦＢ	880	押型文	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
27	Ｋｕ	313	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英、長石 白色岩	楕円文を密接施文

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
28	Ku	684	押型文	赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	楕円文を密接施文
29	Ku	152	押型文	赤褐	輝石、石英、長石、白色岩	楕円文を密接施文

d　第3群土器

早期後半の条痕文系の土器群の中で、関東系の条痕文土器の型式に比定されるものを3群とした。子母口式・清水柳E類・野島式・鵜ヶ島台式・茅山上層式等がある。出土数170点のうち114点が富士黒土層から出土している。施文により分類がはっきりできるものを優先的に掲載した。ほとんどの土器が繊維を含んでいる。これらの土器群の中で清水柳E類（第3群b類）と野島式（第3群c類）の出土数が多かったので、この両者の出土状況を第39図に掲載した。しかし、平面的にも層位的にも分布状況に明確な差を認めることができなかった。

第3群a類（子母口式）30・31

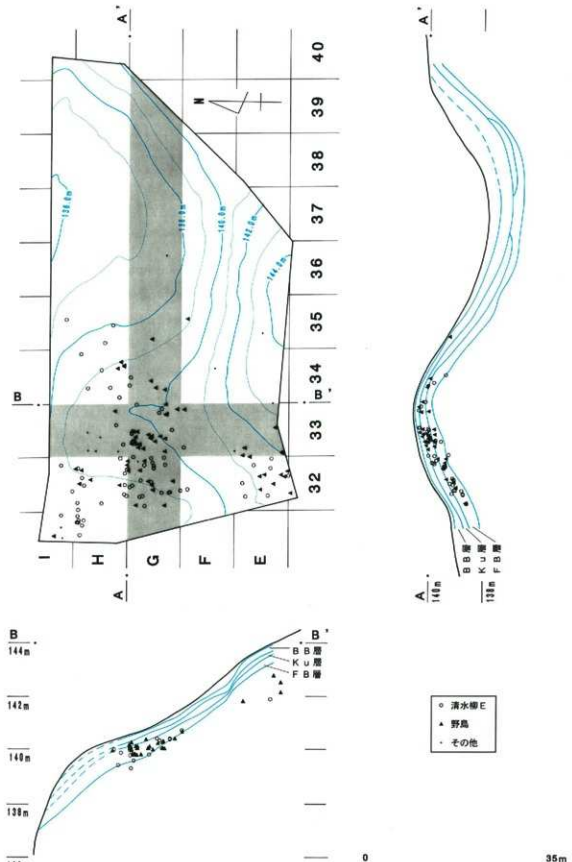
関東地方を中心とした早期後半の条痕文系土器群の初頭の型式である子母口式と考えられる土器を3群a類とした。出土した土器は2点と少なく、全て富士黒土層からの出土である。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
30	FB	1774	子母口	明赤褐	黒色岩、石英、白色岩	口縁部直下の微隆起線上に爪状体圧痕文か？
31	FB	704	子母口	明赤褐	黒色岩、石英、繊維含む	口縁部直下横位に連続刺突文

第3群b類（清水柳E類）32～63

早期後半の清水柳E類と考えられる土器を3群b類とした。子母口式に併行する静岡県東部の土器であり、隆帯と独特な格状体圧痕文を施したものがある。出土した土器は80点を数え、富士黒土層から56点、栗色上層から24点出土している。復原できた土器41の出土状況を第40図に掲載した。土器片21点が、遺跡全体に広範囲に分布していることが分かる。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
32	Ku	413	清水柳E	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部表裏にはしご状の隆帯と爪状体圧痕文
33	FB	497	清水柳E	暗褐	輝石、石英、白色岩 繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
34	FB	693	清水柳E	にぶい赤褐	輝石、黒雲母、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
35	FB	951	清水柳E	にぶい赤褐	輝石、黒雲母、石英 繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
36	Ku	833	清水柳E	赤褐	輝石、石英、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
37	Ku	1053	清水柳E	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
38	Ku	801	清水柳E	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
39	FB	329	清水柳E	暗赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
40	FB	207	清水柳E	橙	輝石、石英、繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
41	FB	1011	清水柳E	赤褐	輝石、石英、長石 繊維含む	口縁部直下に隆帯と爪状体圧痕文
42	FB	1273	清水柳E	橙	輝石、石英、繊維含む	胴部に隆帯と爪状体圧痕文
43	FB	1065	清水柳E	にぶい褐	輝石、石英、繊維含む	胴部に隆帯と爪状体圧痕文
44	FB	232	清水柳E	橙	石英、繊維含む	胴部に隆帯と爪状体圧痕文
45	Ku	985	清水柳E	橙	輝石、石英、白色岩 繊維含む	胴部に隆帯と爪状体圧痕文



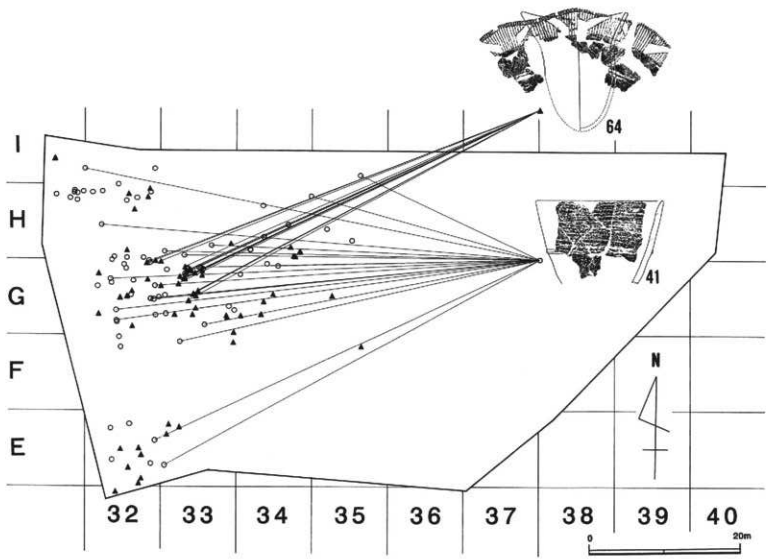
第39図　早期第３群土器分布図（条痕文）

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
46	ＦＢ	233	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、繊維含む	胴部に縄帯と絡状体圧痕文
47	ＦＢ	513	清水柳Ｅ	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に絡状体圧痕文
48	Ｋｕ	831	清水柳Ｅ	暗赤褐	黒色岩、白色岩、繊維含む	口縁部直下に絡状体圧痕文
49	ＦＢ	1285	清水柳Ｅ	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に絡状体圧痕文
50	ＦＢ	1109	清水柳Ｅ	明赤褐	石英、繊維含む	口縁部直下に絡状体圧痕文
51	ＦＢ	332	清水柳Ｅ	明赤褐	輝石、石英、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
52	ＦＢ	49	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、白色岩繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
53	ＦＢ	339	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、白色岩繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
54	ＦＢ	32	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、白色岩繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
55	Ｋｕ	983	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
56	ＦＢ	1666	清水柳Ｅ	橙	石英、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
57	Ｋｕ	380	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
58	ＦＢ	77	清水柳Ｅ	橙	輝石、白色岩、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
59	ＦＢ	265	清水柳Ｅ	にぶい赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	胴部に絡状体圧痕文
60	ＦＢ	1525	清水柳Ｅ	明赤褐	輝石、石英、繊維含む	胴部無文
61	Ｋｕ	977	清水柳Ｅ	橙	輝石、石英、繊維含む	胴部無文
62	ＦＢ	46	清水柳Ｅ	橙	石英、繊維含む	胴部無文
63	ＦＢ	1294	清水柳Ｅ	橙	石英、繊維含む	胴部無文

第３群ｃ類（野島式）64～93

関東地方を中心とした早期後半の野島式と考えられる土器を３群ｃ類とした。隆線で区画してあるものや隆線と沈線、大・中・細沈線の組み合わせなどによる集合沈線や幾何学文を施すものが多い。出土した土器は74点あり、富士黒土層から53点、栗色土層から21点出土している。復原できた土器64の出土状況を第40図に掲載した。土器片19点が、１区中央部の比較的平坦な場所に、長径10m程の範囲に集中して分布していることが分る。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
64	ＦＢ	45	野島	明赤褐	黒色岩、石英、白色岩繊維含む	山形の波状口縁に刻み、口縁部文様帯には縦隆線によって幾何学文、胴上半部文様帯には細い沈線による集合沈線文
65	ＦＢ	813	野島	橙	輝石、黒色岩、石英繊維含む	口縁部文様帯を縦隆線で区画し、その内を沈線で充填。ゆるやかな波状口縁にも細隆線を施文
66	ＦＢ	894	野島	にぶい褐	輝石、石英、白色岩繊維含む	縦隆線で区画した内を沈線で充填。縦隆線上に刺突文
67	ＦＢ	1164	野島	にぶい黄褐	輝石、黒雲母、石英、長石繊維含む	縦隆線で区画した内を沈線で充填。
68	ＦＢ	1117	野島	褐	輝石、石英、長石繊維含む	口唇部からに縁部にかけて隆線でハシゴ状の幾何学文
69	ＦＢ	166	野島	にぶい黄褐	輝石、石英、繊維含む	口縁部文様帯に隆線で幾何学文
70	ＦＢ	1442	野島	赤褐	黒色岩、白色岩繊維含む	口縁部文様帯に太、中の沈線で幾何学文



第40図　個体別土器分布図（清水柳E・野島）

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
71	K u	479	野島	にぶい赤褐	長石、白色岩、繊維含む	口縁部文様帯に太、中の沈線で幾何学文
72	K u	481	野島	赤褐	輝石、白色岩、繊維含む	口縁部文様帯に太、中の沈線で幾何学文
73	F B	1411	野島	暗赤褐	石英、白色岩、繊維含む	口縁部文様帯に太、中の沈線で幾何学文
74	K u	1033	野島	赤褐	石英、白色岩、繊維含む	口縁部文様帯に太、中の沈線で幾何学文
75	F B	1218	野島	明赤褐	黒雲母、黒色岩、長石 繊維含む	口縁部直下に太、中の沈線で幾何学文 口端部に刻み
76	F B	1232	野島	にぶい橙	石英、白色岩、繊維含む	口縁部直下に太、中の沈線で幾何学文 口端部に刻み
77	F B	1084	野島	にぶい褐	輝石、石英、繊維含む	太、細の沈線で幾何学文
78	F B	1271	野島	灰褐	輝石、繊維含む	太、細の沈線で幾何学文
79	F B	1069	野島	明褐	輝石、石英、白色岩 繊維含む	太、細の沈線で幾何学文
80	F B	1212	野島	明赤褐	輝石、白色岩、繊維含む	太、細の沈線で幾何学文
81	F B	1111	野島	にぶい褐	輝石、石英、長石 繊維含む	太、細の沈線で幾何学文
82	F B	238	野島	明赤褐	石英、黒雲母、白色岩 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
83	F B	476	野島	橙	黒色岩、石英、長石、白色岩 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
84	F B	477	野島	にぶい褐	輝石、黒色岩、石英 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
85	F B	1268	野島	明褐	輝石、石英、白色岩 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 その下に結状体圧痕文 口端部に刻み
86	F B	1102	野島	にぶい褐	輝石、石英、長石 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
87	F B	1458	野島	褐	輝石、長石、繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
88	K u	154	野島	明赤褐	輝石、石英、白色岩 繊維含む	口縁部直下に細い沈線で幾何学文 口端部に刻み
89	F B	568	野島	にぶい橙	輝石、黒色岩、石英 繊維含む	細い沈線で幾何学文
90	F B	1757	野島	にぶい橙	輝石、石英、長石 繊維含む	細い沈線で幾何学文
91	F B	234	野島	褐	黒雲母、黒色岩、繊維含む	口縁直下に刺突または押し引き文 口端部に刻み
92	F B	1095	野島	褐	輝石、石英、白色岩 繊維含む	刺突または押し引き文
93	F B	1160	野島	明褐	輝石、金雲母、繊維含む	刺突または押し引き文

第3群d類（鵜ヶ島台式）94

関東地方を中心とした早期後半の鵜ヶ島台式と考えられる土器を3群d類とした。細隆起線で懸掛け状や弧状などの幾何学的な区画を描き、その中を沈線で充填している。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
94	K u	309	鵜ヶ島台	黄褐	黒色岩、白色岩、長石 繊維含む	口縁部と一段目の段間に細隆起線と斜めで区画し、その内を沈線で充填

第3群e類（茅山上層式）95

関東地方を中心とした早期後半の茅山上層式と考えられる土器を3群e類とした。同一個体と思われる土器が11点出土したが、波状口縁でラッパ状の把手と接合したものを掲載した。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
95	Ku	150	茅山上層	赤褐	安山岩、黒雲母、赤色岩 繊維含む	波状口縁でラッパ状の把手を持ち 口端部に刻み 器面全体は条痕文のみ

e　第4群土器（東海系条痕文）

東海系の早期後半の条痕文系の土器を4群とした。入海Ⅰ式・入海Ⅱ式・石山式等がある。出土数95点のうち、45点が富士黒土層から出土している。全ての土器に繊維が含まれている。

第4群a類（入海Ⅰ式）96～102

東海地方早期後半の入海Ⅰ式と考えられる土器を4群a類とした。数条、あるいは螺旋状にやや太めの隆帯を口縁部近くに巡らし、その上に棒状工具による細かい連続交互押圧文や斜め押圧を行っている。口縁にも同じ押圧を施している。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
96	FB	359	入海Ⅰ	明黄褐	金雲母、石英 繊維わずかに含む	口縁部近くの隆帯上にへら状工具による 斜位の刻み 口端部に同じ工具による刻み
97	Ku	285	入海Ⅰ	にぶい黄橙	石英、長石、白色岩 繊維わずかに含む	口縁部近くの隆帯上にへら状工具による 斜位の刻み 口端部に同じ工具による刻み
98	FB	203	入海Ⅰ	にぶい黄橙	石英、長石、白色岩 繊維わずかに含む	口縁部近くの隆帯上にへら状工具による 斜位の刻み 口端部に同じ工具による刻み
99	Ku	636	入海Ⅰ	明黄褐	黒雲母、石英 繊維わずかに含む	口縁部近くの隆帯上に棒状工具による 交互の押圧 口端部に同じ工具による刻み
100	FB	563	入海Ⅰ	にぶい黄橙	金雲母、石英、白色岩 繊維わずかに含む	隆帯上にへら状工具による斜位の刻み
101	Ku	349	入海Ⅰ	にぶい黄褐	石英、白色岩 繊維わずかに含む	隆帯上にへら状工具による斜位の刻み
102	FB	929	入海Ⅰ	にぶい黄橙	黒色岩、石英、長石 繊維含む	隆帯上にへら状工具による斜位の刻み

第4群b類（入海Ⅱ式）103～105

東海地方早期後半の入海Ⅱ式と考えられる土器を4群b類とした。口縁部近くの数条の隆帯が低くなり、隆帯上に施された刻みが器面に食い込む程になっている。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
103	FB	532	入海Ⅱ	褐	黒雲母、黒色岩、繊維含む	口縁部近くの隆帯上にへら状工具による刻み
104	FB	1654	入海Ⅱ	褐	黒色岩、繊維含む	隆帯上に刻み
105	FB	622	入海Ⅱ	赤褐	黒雲母、繊維含む	隆帯上に刻み

第4群c類（石山式）106～114

近畿地方早期後半の石山式と考えられる土器を4群c類とした。口縁部近くに爪形文を連続させて、平行沈線や波状文を描いている。口縁は平縁のものや波状のものがある。

図版番号	層位	登録番号	形式	色調	胎土	文様
106	K u	751	石山	橙	石英、長石、繊維含む	口縁部直下にへら状工具による連続爪形文
107	K u	772	石山	橙	黒雲母、黒色岩、繊維含む	口縁部直下にへら状工具による連続爪形文
108	F B	1577	石山	赤褐	黒雲母、白色岩、繊維含む	口縁部直下にへら状工具による連続爪形文
109	F B	1580	石山	赤褐	黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	へら状工具による連続爪形文
110	K u	711	石山	橙	黒雲母、石英、長石、白色岩 繊維含む	へら状工具による波状の連続爪形文
111	F B	797	石山	橙	黒雲母、石英、長石、白色岩 繊維含む	へら状工具による波状の連続爪形文
112	K u	308	石山	明赤褐	黒色岩、石英、長石、白色岩 繊維含む	へら状工具による波状の連続爪形文
113	F B	186	石山	明赤褐	黒雲母、石英、長石、白色岩 繊維含む	へら状工具による波状の連続爪形文
114	F B	654	石山	橙	黒雲母、黒色岩、石英、長石 繊維含む	へら状工具による波状の連続爪形文

f　第５群土器（早期末）115～134

早期末と考えられる土器を一括した。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
115	F B	719	条痕	暗褐	黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	口縁部から隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文 波状口縁の口唇部に刻み。裏面に貝殻条痕文
116	F B	1842	条痕	橙	安山岩、黒雲母、石英 繊維含む	口縁部から隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文 波状口縁の口唇部に刻み。裏面に貝殻条痕文
117	F B	241	条痕	にぶい黄褐	安山岩、黒雲母、繊維含む	口縁部から隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文 波状口縁の口唇部に刻み。裏面に貝殻条痕文
118	K u	1129	条痕	橙	黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	口縁部から隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文 波状口縁の口唇部に刻み。裏面に貝殻条痕文
119	K u	842	条痕	明褐	安山岩、黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	口縁部から隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文 波状口縁の口唇部に刻み。裏面に貝殻条痕文
120	F B	718	条痕	褐	安山岩、黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	隆帯にかけて貝殻腹縁の圧痕文
121	F B	245	条痕	黒褐	黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	貝殻条痕文
122	F B	1394	条痕	明赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	太い隆帯上に貝殻腹縁の圧痕文
123	F B	1471	条痕	明赤褐	黒雲母、繊維含む	太い隆帯上に貝殻腹縁の圧痕文
124	F B	1086	条痕	明赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	太い隆帯上に貝殻腹縁の圧痕文
125	F B	543	条痕	明赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	太い隆帯上に貝殻腹縁の圧痕文
126	F B	1574	条痕	羽褐	輝石、黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	連続刺突文
127	F B	91	条痕	橙	黒色岩、石英、長石、白色岩 繊維含む	連続刺突文
128	F B	1476	条痕	明褐	黒雲母、石英、繊維含む	連続刺突文
129	F B	1147	条痕	明赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	口端部にへら状工具による刻み
130	F B	1077	条痕	明黄褐	黒雲母、黒色岩、石英 繊維含む	口端部にへら状工具による刻み
131	K u	199	繊維土器	明赤褐	黒雲母、繊維含む	繊維土器の底部。無文

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
132	FB	912	繊維土器	明赤褐	黒雲母、黒色岩、石英、繊維含む	繊維土器の底部。無文
133	FB	494	繊維土器	にぶい褐	黒雲母、黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	繊維土器の底部。無文
134	FB	146	繊維土器	にぶい橙	黒色岩、長石、繊維含む	繊維土器の底部。無文

g　第6群土器（無文土器ないしは条痕文土器）135～146

早期の無文土器ないしは条痕文系の無文土器を一括した。ほとんどが富士黒土層からの出土であり、約900点になる。口縁と胴部の一部を掲載した。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
135	FB	1537	条痕	褐	黒雲母、繊維含む	条痕文系無文の口縁部
136	FB	1101	条痕	明赤褐	黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	条痕文系統文の口縁部
137	FB	1378	条痕	にぶい褐	黒雲母、石英、繊維含む	条痕文系無文の口縁部
138	FB	1257	条痕	明赤褐	輝石、黒雲母、繊維含む	条痕文系無文の口縁部　穿孔有り
139	FB	915	条痕	橙	輝石、黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	条痕文系無文の口縁部
140	FB	1784	条痕	明赤褐	輝石、黒色岩、石英、白色岩 繊維含む	条痕文系無文の口縁部
141	Ku	512	条痕	赤褐	黒色岩、繊維含む	条痕文系無文の口縁部
142	FB	161	条痕	赤褐	黒雲母、白色岩、繊維含む	条痕文系無文の胴部
143	FB	293	条痕	明赤褐	黒色岩、白色岩、繊維含む	条痕文系無文の胴部
144	FB	666	条痕	褐	黒雲母、白色岩、繊維含む	条痕文系無文の胴部　穿孔有り
145	FB	911	条痕	褐	黒雲母、黒色岩、白色岩 繊維含む	条痕文系無文の胴部
146	FB	737	条痕	にぶい橙	黒雲母、黒色岩、石英、長石 繊維含む	条痕文系無文の胴部

h　第7群土器（竹管文）

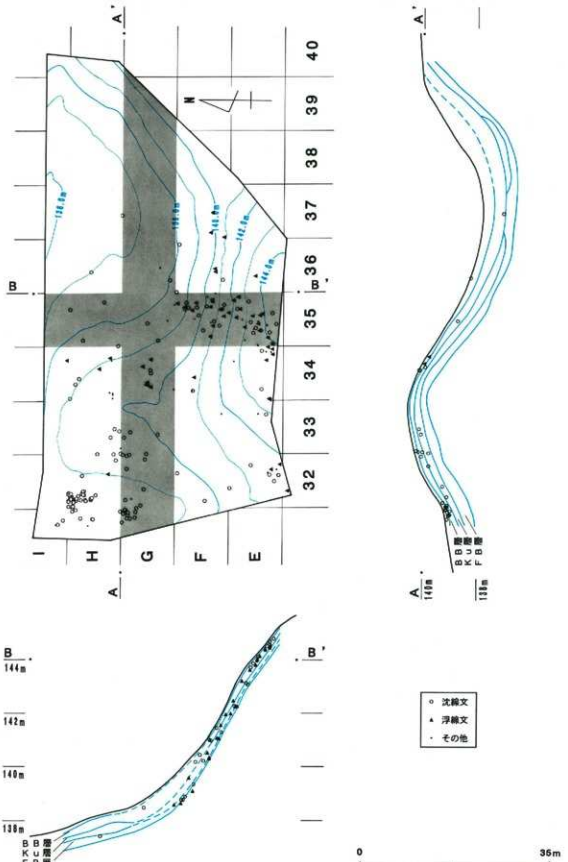
前期後半の竹管文系土器を7群とした。諸磯b式を中心に諸磯c式、十三菩提式等がある。

第7群a類（諸磯b式）147～226

関東・中部地方を中心とする諸磯b式と考えられる土器を7群a類とした。爪形文や浮線文、平行沈線文を施している。土器は224点出土しており、富士黒土層から140点、栗色土層から82点出土している。1・2区を中心に遺跡全体に広範囲に分布していることがわかる。諸磯b式土器群の中で平行沈線文と浮線文の出土数が多かったので、この両者の本遺跡での出土状況を第41図に掲載した。平面的な分布状況は、平行沈線文が遺跡全体に広範囲に広がっているのに対して、浮線文は2区の南側を中心にまとまって分布している。層位的にも平行沈線文は富士黒土層と栗色土層からの出土割合が半々なのに対して、浮線文はほとんどが富士黒土層からの出土であった。このことから諸磯b式の中の平行沈線文と浮線文の先後関係が本遺跡の中では明確に存在するものと考えられる。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
147	Ku	1016	諸磯b（爪形文）	褐色	輝石、石英、白色岩	幅広の爪形文を平行沈線内に施文
148	FB	11	諸磯b（爪形文）	褐色	輝石、石英、白色岩	幅広の爪形文を平行沈線内に施文

写真番号	層位	登録番号	形式	色調	胎土	文様
149	F B	767	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文ＲＬを地文に横に浮線文 口縁部に刻み
150	K u	930	諸磯ｂ（浮線文）	にぶい褐色	金雲母、長石	縄文ＲＬを地文に横に浮線文 口縁部に刻み
151	F B	1484	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	石英、白色岩	縄文ＲＬを地文に横に浮線文 波状口縁部に浮線文と刻み
152	F B	1751	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文ＲＬを地文に横に浮線文。 波状口縁部に貼り付け
153	F B	1413	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	黒雲母、石英	縄文ＲＬを地文に横に浮線文 波状口縁部に貼り付け
154	K u	597	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文ＲＬを地文に横に浮線文
155	F B	1807	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文ＲＬを地文に横に浮線文
156	K u	1125	諸磯ｂ（浮線文）	にぶい黄褐色	輝石、金雲母、石英 白色岩	縄文ＬＲを地文に浮線文
157	F B	458	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文ＬＲを地文に浮線文
158	F B	790	諸磯ｂ（浮線文）	にぶい褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文ＬＲを地文に浮線文
159	F B	867	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、長石	縄文ＬＲを地文に浮線文
160	F B	933	諸磯ｂ（浮線文）	暗褐色	輝石、金雲母	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
161	F B	785	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
162	K u	1031	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
163	F B	467	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、金雲母、石英	縄文を地文に浮線文と沈線
164	F B	1634	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文を地文に浮線文。口縁部に貼り付け
165	F B	1258	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
166	F B	1750	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
167	F B	792	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
168	F B	1201	諸磯ｂ（浮線文）	灰褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文を地文に浮線文。口縁部に刻み
169	F B	1337	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文を地文に浮線文
170	F B	1762	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	金雲母、石英	縄文を地文に浮線文
171	F B	1738	諸磯ｂ（浮線文）	にぶい黄褐色	輝石、金雲母	撚糸Ｒを地文に浮線文 口縁部と浮線文上に刻み
172	F B	753	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英	撚糸Ｌを地文に浮線文。浮線文上に 刻み
173	F B	758	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、長石	撚糸Ｌを地文に浮線文。浮線文上に 刻み
174	F B	173	諸磯ｂ（浮線文）	暗	黒雲母、黒色岩	口縁部と浮線文上に刻み
175	F B	348	諸磯ｂ（浮線文）	明赤褐	黒雲母、石英	口縁部と浮線文上に刻み
176	F B	1089	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	石英、白色岩	口縁部と浮線文上に刻み
177	F B	1761	諸磯ｂ（浮線文）	褐色	輝石、石英、白色岩	浮線文上に刻み



第41図　前期第７群土器分布図（諸磯ｂ）

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
178	F B	1129	諸磯 b（浮線文）	褐色	輝石、金雲母	浮線文上に刻み
179	F B	793	諸磯 b（浮線文）	にぶい赤褐色	輝石、金雲母、石英	浮線文上に刻み
180	K u	692	諸磯 b（平行沈線）	黄褐色	輝石、金雲母、石英	縄文をＲＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文
181	F B	1260	諸磯 b（平行沈線）	褐色	輝石、石英、白色岩	縄文ＲＬを地文に半截竹管による平行沈線文
182	K u	714	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	輝石、石英、白色岩	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、口縁部に刻み
183	F B	743	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、口縁部に刻み
184	F B	496	諸磯 b（平行沈線）	褐色	輝石、石英	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、口縁部に刻み
185	F B	441	諸磯 b（平行沈線）	にぶい黄褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、口縁部に刻み
186	K u	1127	諸磯 b（平行沈線）	にぶい黄褐色	黒色岩、石英	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、擬口縁
187	K u	821	諸磯 b（平行沈線）	灰褐色	輝石、石英、白色岩	縄文ＬＲを地文に半截竹管による平行沈線文、口縁部に刻み
188	F B	191	諸磯 b（平行沈線）	明褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文Ｌを地文に半截竹管による平行沈線文
189	F B	480	諸磯 b（平行沈線）	黄褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文Ｌを地文に半截竹管による平行沈線文
190	K u	762	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文Ｌを地文に半截竹管による平行沈線文
191	K u	754	諸磯 b（平行沈線）	褐色	金雲母、黒雲母、石英白色岩	縄文Ｌを地文に半截竹管による平行沈線文
192	K u	570	諸磯 b（平行沈線）	明褐色	金雲母、石英	縄文Ｌを地文に半截竹管による平行沈線文
193	F B	822	諸磯 b（平行沈線）	褐色	輝石、石英、長石	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
194	F B	1106	諸磯 b（平行沈線）	灰黄褐色	輝石、長石	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
195	K u	850	諸磯 b（平行沈線）	褐色	輝石、石英、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
196	F B	444	諸磯 b（平行沈線）	褐色	輝石、金雲母、石英	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
197	K u	193	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	金雲母、石英	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
198	K u	713	諸磯 b（平行沈線）	明褐色	金雲母、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
199	F B	751	諸磯 b（平行沈線）	赤褐色	金雲母、石英、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
200	F B	1203	諸磯 b（平行沈線）	にぶい赤褐色	輝石、石英、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
201	K u	136	諸磯 b（平行沈線）	赤褐	金雲母、石英、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
202	F B	429	諸磯 b（平行沈線）	橙	石英、白色岩	縄文を地文に半截竹管による平行沈線文
203	F B	271	諸磯 b（平行沈線）	明褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文
204	F B	1075	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文
205	F B	1589	諸磯 b（平行沈線）	にぶい褐色	石英、白色岩	半截竹管による平行沈線文 口縁部に刻み

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
206	F B	117	諸磯ｂ（平行沈線）	黄褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文。口縁部に刻み
207	K u	206	諸磯ｂ（平行沈線）	にぶい黄色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文。口縁部に刻み
208	F B	1217	諸磯ｂ（平行沈線）	にぶい黄褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文
209	K u	204	諸磯ｂ（平行沈線）	褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文
210	K u	725	諸磯ｂ（平行沈線）	にぶい褐色	輝石、石英、長石	半截竹管による平行沈線文
211	K u	1128	諸磯ｂ（平行沈線）	赤褐色	輝石、石英、白色岩	半截竹管による平行沈線文
212	F B	436	諸磯ｂ（平行沈線）	褐色	石英、白色岩	半截竹管による平行沈線文
213	F B	469	諸磯ｂ（平行沈線）	褐色	輝石、石英	半截竹管による平行沈線文
214	F B	1289	諸磯ｂ（平行沈線）	赤褐色	黒色岩、石英、白色岩	半截竹管による平行沈線文
215	F B	1198	諸磯ｂ（その他）	赤褐	黒色岩、石英、白色岩	口縁部に小孔と刻みのある有孔浅鉢
216	F B	1410	諸磯ｂ（その他）	明赤褐色	黒色岩、長石、白色岩	波状口縁直下よりＲＬの縄文
217	K u	498	諸磯ｂ（その他）	灰褐	輝石、金雲母	波状口縁直下よりＲＬの縄文
218	K u	339	諸磯ｂ（その他）	褐色	金雲母、石英	口縁に小突起と刻み。ＲＬの縄文
219	K u	110	諸磯ｂ（その他）	明赤褐色	黒雲母、長石	ＲＬの縄文
220	F B	1835	諸磯ｂ（その他）	明褐色	黒色岩、石英	ＲＬの縄文
221	K u	232	諸磯ｂ（その他）	明赤褐色	黒色岩、長石、白色岩	ＲＬの縄文
222	K u	935	諸磯ｂ（その他）	にぶい褐	長石、白色岩	ＲＬの縄文
223	F B	1414	諸磯ｂ（その他）	明赤褐	黒雲母、石英、長石 白色岩	ＬＲの縄文
224	F B	649	諸磯ｂ（その他）	明赤褐	金雲母、黒雲母、黒色岩 石英、長石	底部直上までＲＬの縄文
225	K u	279	諸磯ｂ（その他）	褐色	輝石、金雲母	ＲＬの縄文
226	K u	351	諸磯ｂ（その他）	褐色	金雲母、石英	ＲＬの縄文

第７群ｂ類（諸磯ｃ式）227

諸磯ｃ式と考えられる土器を７群ｂ類とした。集合沈線を地文に、ボタン条の貼付文が施されている。富士黒土層より１点出土している。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
227	F B	574	諸磯ｃ（集合沈線）	褐色	輝石、石英	集合沈線を地文にボタン状の貼付文

第７群ｃ類（十三菩提）228～230

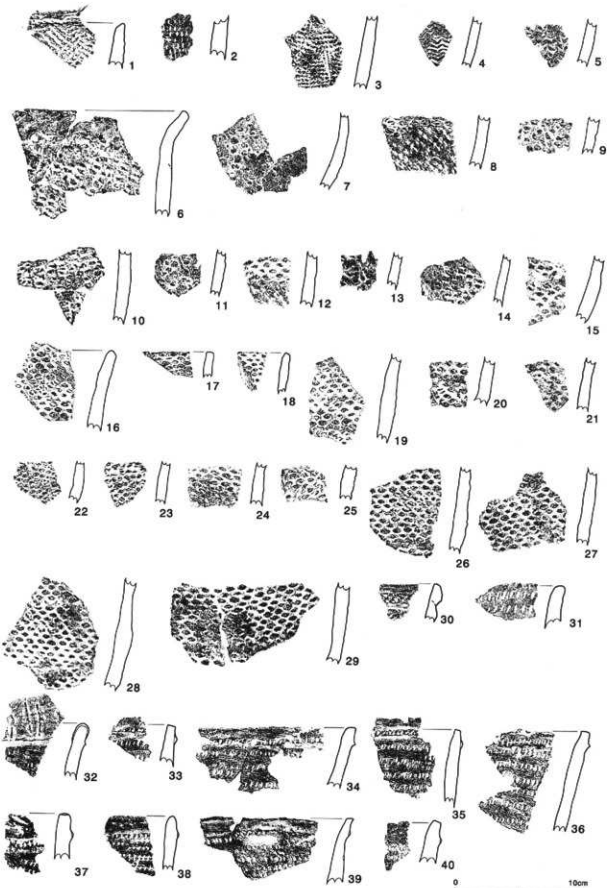
関東地方における前期最終末と考えられる土器型式である十三菩提式土器を７群ｃ類とした。結節浮線文や結節沈線文、あるいは半截竹管による集合沈線文などが施されている。

図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
228	K u	365	十三菩提	褐色	輝石、白色岩	半截竹管による集合沈線文
229	K u	376	十三菩提	にぶい赤褐色	金雲母、黒色岩、石英	貼付した粘土紐の上に結節状浮線文
230	K u	688	十三菩提	明赤褐	黒色岩、石英、長石	三角形の隆起文と結節状沈線文

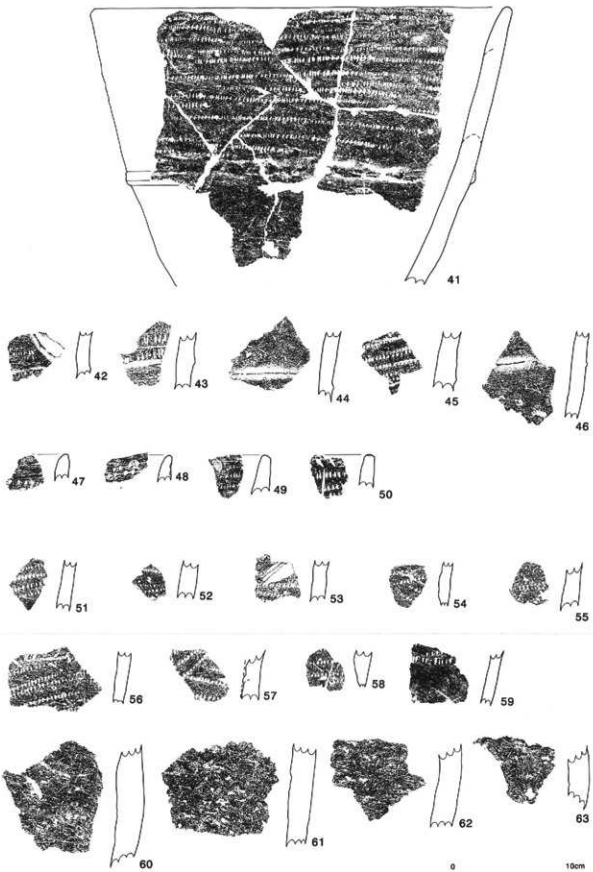
i　**第8群土器**（北白川下層Ⅱ式）231～251

近畿地方を中心とした前期後半の土器を8群とした。全て北白川下層Ⅱ式と考えられる土器である。縄文地に突帯文が施されている。

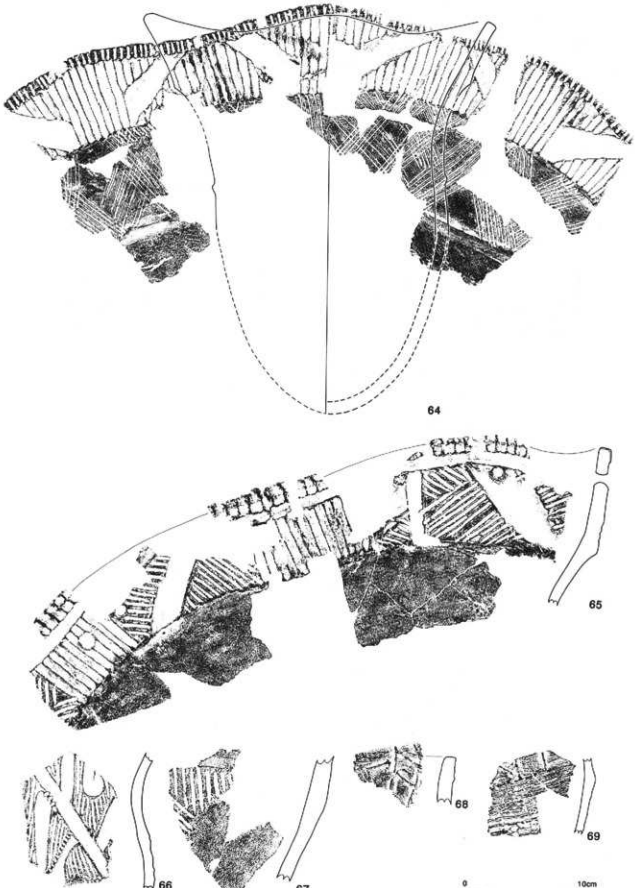
図版番号	層位	登録番号	型式	色調	胎土	文様
231	BB	14	北白川下層	明黄褐色	黒色岩、石英	縄文ＬＲを地文に突帯文。突帯文上と口縁部に刻み
232	FB	230	北白川下層	明黄褐色	黒色岩、石英	突帯文上と口縁部に刻み
233	FB	757	北白川下層	明黄褐色	黒雲母、石英、白色岩	地文にＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文突帯文上に刻み
234	FB	459	北白川下層	明黄褐色	黒色岩、石英、白色岩	地文にＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文突帯文上に刻み
235	FB	465	北白川下層	明黄褐色	黒雲母、石英、白色岩	地文にＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文突帯文上に刻み
236	FB	1144	北白川下層	にぶい黄褐色	石英、白色岩	地文にＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文突帯文上に刻み
237	FB	1814	北白川下層	にぶい黄橙	石英	地文にＲＬの縄文。突帯文上に刻み
238	FB	1193	北白川下層	明黄褐	黒色岩、石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
239	FB	1338	北白川下層	黄褐	輝石、石英	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
240	FB	430	北白川下層	にぶい褐	石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
241	FB	1554	北白川下層	褐灰	石英	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
242	FB	1383	北白川下層	にぶい黄褐	石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
243	FB	1380	北白川下層	にぶい黄褐	石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
244	BB	3	北白川下層	にぶい黄橙	石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
245	FB	1715	北白川下層	にぶい黄橙	石英、白色岩	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
246	FB	1385	北白川下層	にぶい黄褐	石英	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
247	FB	455	北白川下層	にぶい黄橙	石英	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
248	FB	439	北白川下層	にぶい黄褐	石英	ＲＬとＬＲを結節させた羽状縄文
249	FB	464	北白川下層	にぶい黄褐	石英、白色岩	ＬＲの縄文
250	FB	449	北白川下層	にぶい黄褐	石英、白色岩	無文
251	FB	360	北白川下層	にぶい黄褐	石英、白色岩	無文



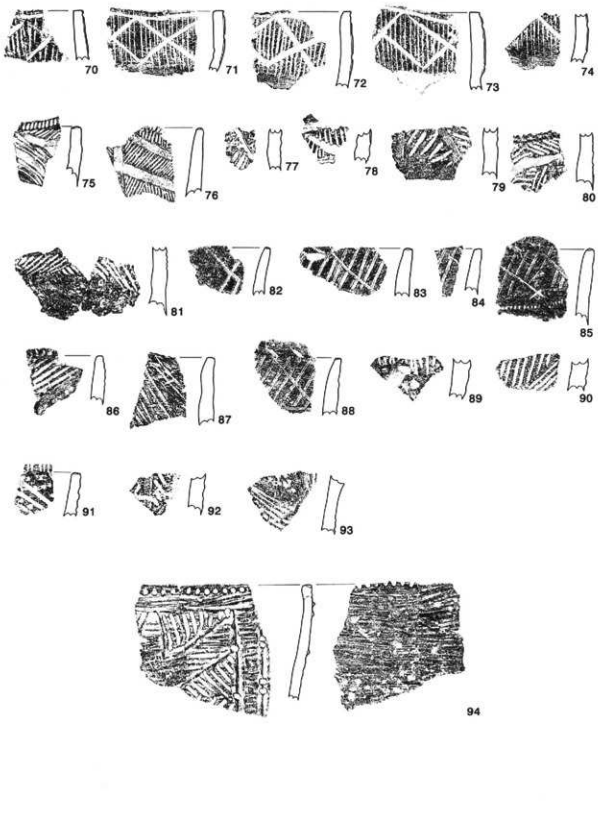
第42図　土器実測図1（第1・2・3群a類b類 1/3）



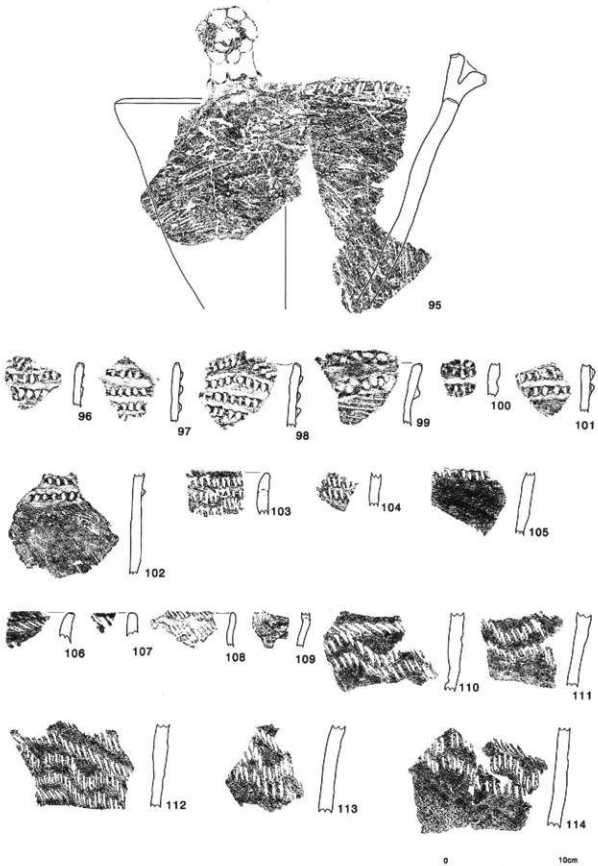
第43図　土器実測図２（第３群ｂ類 1/3）



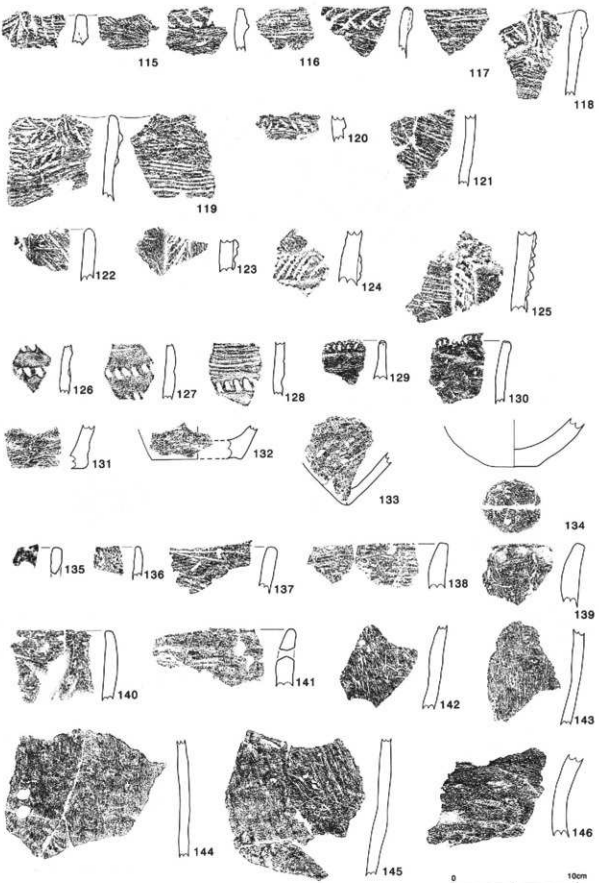
第44図　土器実測図３（第３群ｃ類 1/3）



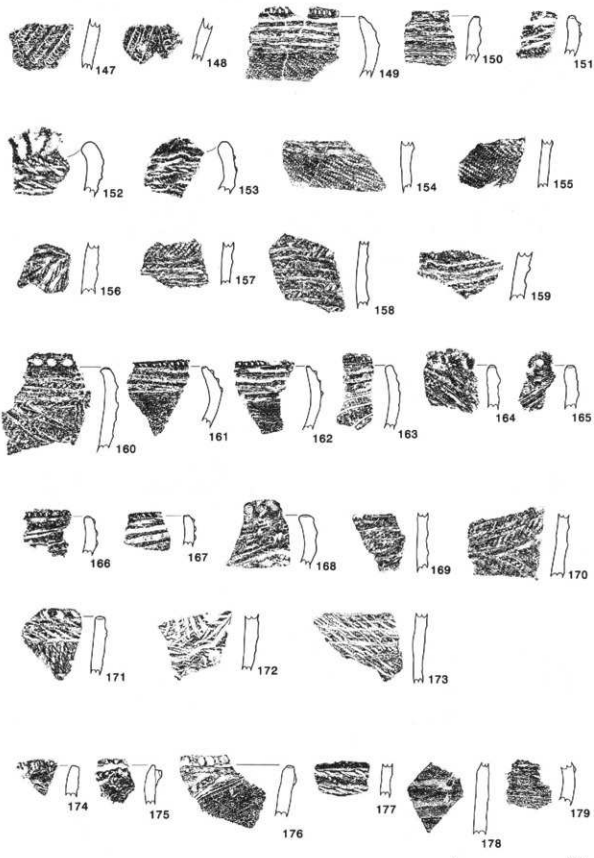
第45図　土器実測図4（第3群c類d類 1/3）



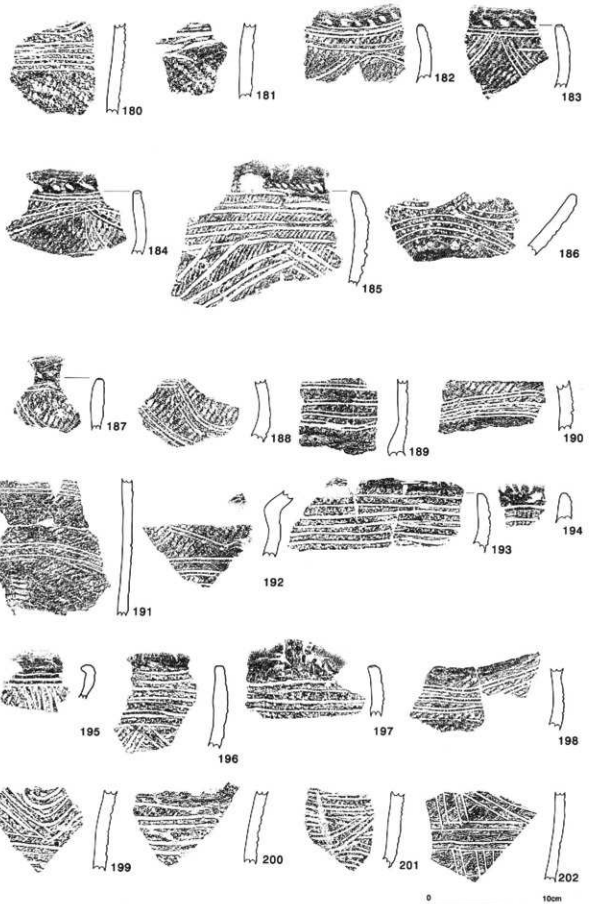
第46図　土器実測図5（第3群e類 第4群a類b類 1/3）



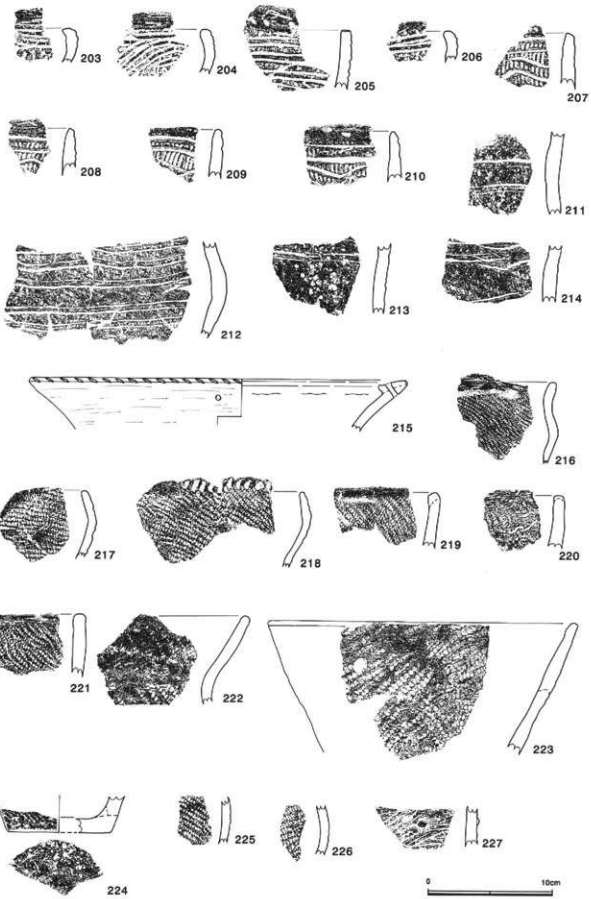
第47図　土器実測図6（第5・6群 1/3）



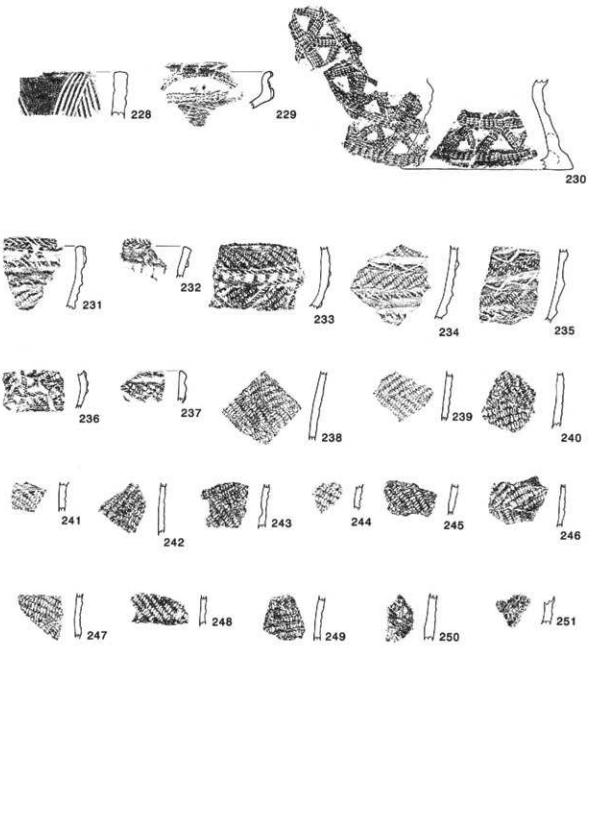
第48図　土器実測図7（第7群a類 1/3）



第49図　土器実測図８（第７群ａ類 1/3）



第50図　土器実測図９（第７群ａ類ｂ類 1/3）



第51図　土器実測図10（第７群ｃ類 第８群 1/3）

4　縄文時代　中・後期の土器

a　概　観

縄文時代中・後期の土器は、新道式と考えられる土器群（第９群）、藤内式と考えられる土器群（第10群）、井戸尻式と考えられる土器群（第11群）、第９・10・11群に伴う浅鉢や有孔鍔付土器群（第12群）、後期と思われる土器群（第13群）に大別される。

これらの土器群の遺跡内における出土状況を第53図に掲載した。特に中期初頭から前半にかけて中部地方に分布の中心を持つ９・10・11群の土器についての平面的な分布状況は、三者とも１・２区の北側を中心に分布していることが分かる。

層位的には、富士黒土層上部から栗色土層中部にかけて主体的に出土している。富士黒土層と栗色土層出土の割合は、９・10・11群ともほぼ半々である。平面的にも層位的にも、三者の時期差等について明確な差を認めることはできなかった。

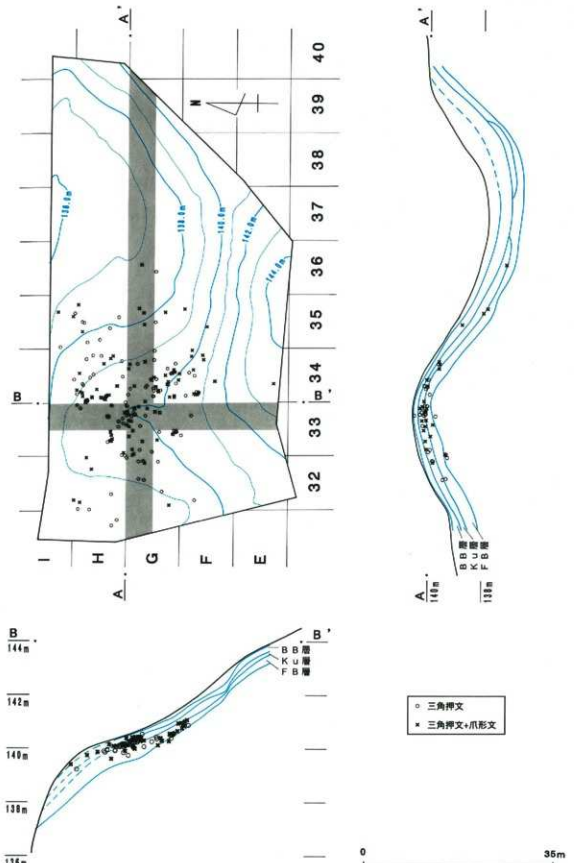
b　第９群土器（新道式）

中期初頭に位置する新道式と考えられる土器を９群とした。隆帯で描く横帯する三角連続区画文と隆帯の両側に三角押文と爪形文を施しているのが特徴である。新道式の中でも、隆帯の脇に三角押文だけのものと三角押文と爪形文を施文してあるものとに分けられる。その分布状況を第52図に掲載した。両者とも１区と２区の中央部に跨って比較的まとまって分布している。土器は210点出土しており、富士黒土層から118点、栗色土層から92点出土している。分布状況からは、この両者のおける明確な先後関係を認めることはできない。しかし、隆帯の脇に三角押文だけを施文したものの方が、やや古い時期のものと思われる。

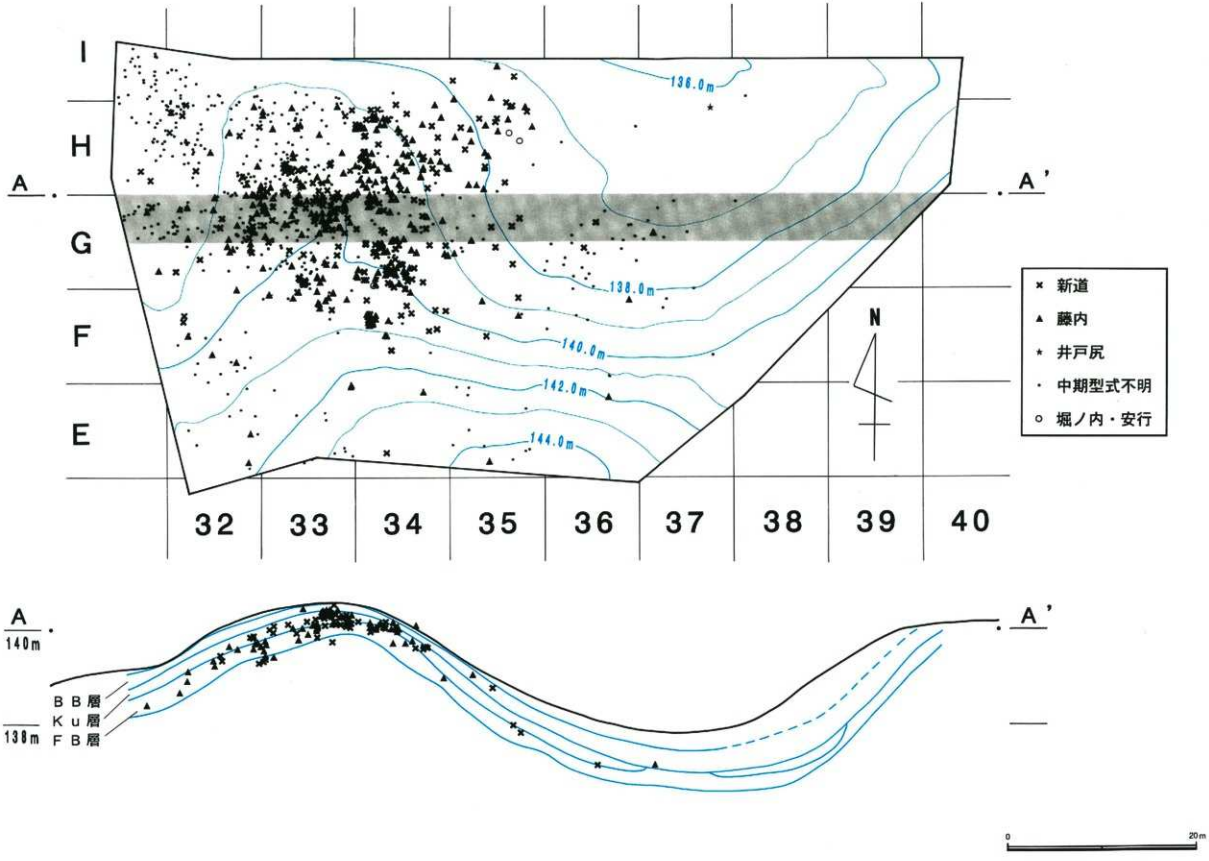
第９群ａ類（三角押文）252～290

新道式と考えられる土器の中でやや古い時期のものを９群ａ類とした。隆帯の脇や楕円形・三角形の区画内を三角押文で充填している。出土数104点のうち、富士黒土層から57点、栗色土層から47点出土している。復原できた土器252と254の出土状況を第54図に掲載した。252は口縁部直下にミミズク把手をもった個体で口縁部だけ復原できた。土器片８点が１区の中央部にまとまって分布していることが分かる。254は三角形や半円形で区画された中を三角押文で充填してある個体である。土器片10点が広範囲に広がって分布している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
252	Ｋｕ	96	新道	にぶい褐	輝石、金雲母、石英、赤色岩流紋岩	口縁部に刻みのある小突起を有し、口縁部下はミミズク把手を持つ 隆帯で三角形や半円形に区画された内を三角押文や玉抱き三叉文を配す
253	ＦＢ	417	新道	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、	隆帯で半円形に区画した内を三角押文で充填
254	Ｋｕ	728	新道	明赤褐	輝石、金雲母、石英 白・赤色岩	口縁部に突起を有す 口縁部文様体は隆帯で三角形や半円形に区画された内を三角押文で充填 底部も隆帯で長形に区画した内を三角押文で充填
255	Ｋｕ	60	新道	にぶい赤褐	輝石、石英、白・赤色岩	口縁部に把手と刻み 口縁部直下に三角押文
256	Ｋｕ	673	新道	にぶい橙	輝石、金雲母、黒色岩石英	口縁部文様帯に把手を持ち、隆帯による三角区画内を三角押文で磨取り
257	Ｋｕ	442	新道	にぶい橙	輝石、金雲母、石英	口縁部に把手と刻み

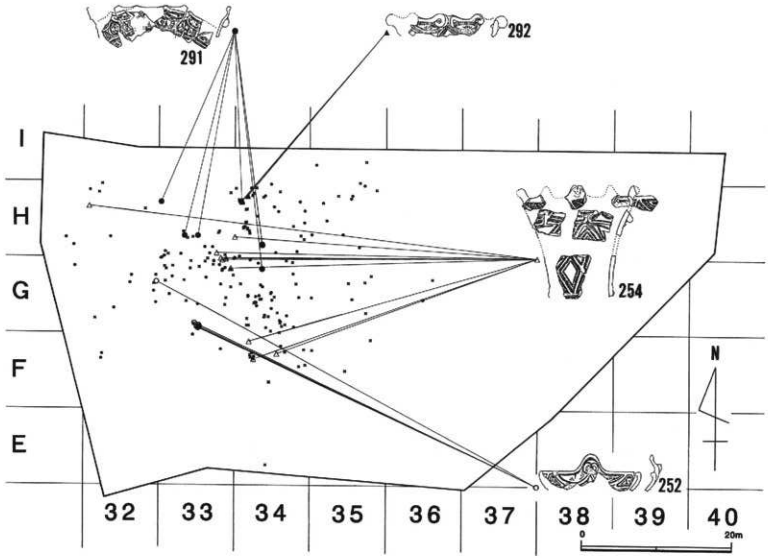


第52図　中期第９群土器分布図（新道）



第53図　中・後期土器分布図

器収番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
258	F B	309	新道	にぶい赤褐	輝石、黒色岩、石英	口縁部に把手と刻み。口縁部直下に三角押文と竹管文。裏面に平行沈線文
259	F B	690	新道	明赤褐	輝石、黒色岩、長石 雲母含む	口縁部に刻み。口縁部直下に波状沈線文と半截竹管による刺突文。裏面に平行沈線文
260	K u	207	新道	にぶい赤褐	輝石、石英、白・赤色岩	隆帯に沿って三角押文を施文
261	K u	54	新道	にぶい赤褐	黒・白・赤色岩 石英、流紋岩	隆帯の脇や隆帯による口縁部三角区画内に三角押文 区画の中央には三叉文
262	F B	415	新道	にぶい赤褐	黒・白・赤色岩 石英、流紋岩	隆帯の脇や隆帯による口縁部三角区画内に三角押文 区画の中央には三叉文
263	F B	542	新道	にぶい赤褐	輝石、黒・白・赤色岩 石英、流紋岩	隆帯の脇や隆帯による口縁部三角区画内に三角押文 区画の中央には三叉文。半截竹管による交互押引文
264	K u	859	新道	にぶい赤褐	黒・白・赤色岩 石英、流紋岩	隆帯の脇や隆帯による口縁部三角区画内に三角押文 区画の中央には三叉文。半截竹管による交互押引文
265	F B	216	新道	明赤褐	金雲母、黒色岩、石英	胴部を隆帯で三角に区画し、脇に三角押文
266	K u	269	新道	明赤褐	金雲母、白色岩	胴部を隆帯で三角に区画し、脇に三角押文
267	K u	476	新道	明赤褐	輝石、金雲母、石英	胴部を隆帯で三角に区画し、脇に三角押文と波状沈線文
268	K u	917	新道	明赤褐	金雲母、石英	口縁部に突起を有す。隆帯で半円形に区画した内を三角押文で充填
269	F B	338	新道	赤褐	金雲母	口縁部直下に突起を有す。隆帯で半円形に区画し隆帯の脇に三角押文
270	F B	398	新道	にぶい褐	輝石、石英	地文に縄文RL。口縁部直下に三角押文
271	K u	807	新道	にぶい赤褐	金雲母、石英	口縁部直下に三角押文と刺突文
272	F B	135	新道	赤褐	金雲母、石英	口縁部直下に三角押文。口縁部に工具による押圧
273	K u	666	新道	橙	輝石、金雲母、石英	口縁部直下に三角押文。口縁部に突起を有す
274	F B	248	新道	明赤褐	輝石、金雲母、石英	口縁部直下に三角押文
275	K u	1035	新道	赤褐	金雲母、石英、白色岩	口縁部直下に三角押文。口縁部に突起を有す
276	F B	276	新道	赤褐	輝石、石英、白色岩	隆帯による口縁部四角区画内に三角押文と沈線文 隆帯上に刻み。裏面に三叉文
277	K u	274	新道	明赤褐	金雲母、石英	隆帯脇に三角押文
278	F B	204	新道	明赤褐	輝石、黒色岩、石英	弧状の幅広隆帯上に沈線。隆帯脇に三角押文 隆帯で区画された内に波状沈線文
279	F B	1281	新道	明黄	石英、白色岩	隆帯上に刻み。隆帯脇に三角押文
280	F B	101	新道	明黄	金雲母、黒色岩	隆帯脇に三角押文と波状沈線文 三角押文を施文した中央に三叉文
281	K u	865	新道	明赤褐	輝石、黒色岩	隆帯で三角に区画した内を三角押文で充填
282	K u	670	新道	明赤褐	石英、白色岩	隆帯で区画した内を三角押文で充填
283	K u	448	新道	明赤褐	金雲母、石英、白色岩	隆帯で区画した内を三角押文で充填
284	F B	1718	新道	明褐色	金雲母、石英	隆帯脇に三角押文 ペン先状工具による波状三角押文



第54図　個体別土器分布図（新道）

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
285	FB	1184	新道	赤褐	金雲母、石英、白色岩	隆帯脇に三角押文
286	FB	364	新道	明赤褐	石英	隆帯脇に三角押文
287	Ku	638	新道	赤褐	金雲母、石英	隆帯脇に三角押文
288	FB	1795	新道	明褐	輝石、石英	隆帯上に刻み、その脇に三角押文
289	Ku	486	新道	赤褐	金雲母、石英、赤色岩	口縁部の近くに突起を有す。三角押文を施文
290	Ku	436	新道	赤褐	金雲母、石英	口縁部の近くに突起を有す。隆帯上に刻み、その脇に三角押文

第９群ｂ類（三角押文と爪形文）291～340

新道式と考えられる土器の中で次の時期に多用される抽象文の前駆状態と思われる七器を９群ｂ類とした。隆帯の脇に三角押文だけでなく爪形文をめぐらせ、隆帯も先端が渦巻状を呈するものが出てきた。

出土数106点のうち，富士黒土層から61点、栗色土層から45点出土している。復原できた土器291と292の出土状況を第54図に掲載した。291は口縁部文様帯に隆帯による区画を行い、その脇に三角押文や爪形文を施文してある斜体で口縁部だけ復原できた。土器片７点が１区・２区の北側に広がって分布している。292は三角形や楕円形で区画された中を爪形文で充填してある個体である。土器片４点が２区の北側に集中して分布している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
291	Ku	107	新道	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、流紋岩	隆帯による不整三角形や楕円状の区画の周囲に爪形文や三角押文を施文し、区画の中央に玉抱き三叉文を配す。区画内に突起を有す
292	Ku	271	新道	にぶい赤褐	石英、流紋岩	隆帯で区画された楕円状の内を爪形文で施文し、中央に玉抱き三叉文を配す。波状口縁部に把手を有す
293	Ku	301	新道	にぶい赤褐	黒色岩、石英、流紋岩	隆帯の周囲に爪形文を施文
294	Ku	270	新道	にぶい赤褐	黒色岩、石英、流紋岩	隆帯の周囲に爪形文を施文。隆帯で区画された内に突起を有す
295	FB	308	新道	にぶい赤褐	輝石、石英、流紋岩	隆帯の周囲に爪形文や、三角押文を施文。刻みのある口縁部直下や隆帯の周囲にヘラ先状工具の押引きによる波状沈線
296	Ku	275	新道	にぶい赤褐	黒色岩、石英、流紋岩	隆帯で三角形や不整三角形に区画された内を三角押文や爪形文で施文し、中央に三叉文を配す
297	Ku	272	新道	にぶい赤褐	黒色岩、石英、流紋岩	隆帯で三角形に区画された内を三角押文で施文
298	Ku	327	新道	にぶい黄褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文を施文
299	FB	208	新道	褐灰	金雲母、黒色岩、石英	口縁部直下に爪形文
300	Ku	332	新道	黄灰	金雲母、石英	口縁部直下に爪形文
301	Ku	1108	新道	灰黄褐	輝石、金雲母、石英	口縁部直下に爪形文と三角押文
302	FB	412	新道	にぶい黄褐	金雲母、石英	口縁部近くに爪形文と三角押文。突起を有す
303	FB	416	新道	褐灰	金雲母、黒色岩、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文を施文
304	Ku	225	新道	にぶい黄褐	輝石、金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文を施文
305	FB	861	新道	褐灰	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文を施文
306	FB	328	新道	灰黄褐	輝石、金雲母	隆帯の周辺に爪形文と三角押文を施文

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
307	FB	1609	新道	にぶい黄褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と波状沈線文
308	Ku	324	新道	にぶい黄褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と波状沈線文
309	FB	1817	新道	にぶい黄褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と波状沈線文
310	Ku	598	新道	にぶい黄褐	輝石、金雲母	隆帯の周辺に爪形文と波状沈線文
311	Ku	331	新道	灰黄	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文
312	Ku	2	新道	明赤褐	金雲母、黒色岩、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
313	Ku	691	新道	明赤褐	輝石、石英、	刻みのある隆帯の周辺に爪形文と三角押文
314	Ku	488	新道	明黄褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
315	Ku	876	新道	明赤褐	輝石、黒色岩、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
316	Ku	425	新道	にぶい褐	輝石、石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
317	FB	403	新道	黄灰	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
318	FB	314	新道	暗褐	輝石、黒色岩、石英	隆帯で区画した内を爪形文や三角押文で施文。 区画の中央に半截竹管による刺突とペン先状工具による押引きの沈線文
319	FB	1777	新道	暗褐	輝石、黒色岩、石英	隆帯で区画した内を爪形文や三角押文で施文。 区画の中央に半截竹管による刺突とペン先状工具による押引きの沈線文
320	Ku	119	新道	明褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文
321	FB	1247	新道	褐	石英、白色岩	刻みのある隆帯の周辺に爪形文と三角押文
322	FB	910	新道	褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
323	FB	427	新道	褐	石英、白色岩	爪形文と三角押文を弧状に施文
324	Ku	478	新道	褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に三角押文
325	Ku	1025	新道	にぶい褐	黒色岩、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
326	Ku	366	新道	褐	白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
327	FB	1800	新道	褐	石英、白色岩	隆帯で楕円状に区画した内を爪形文と三角押文で充填
328	FB	361	新道	褐	金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
329	Ku	454	新道	明赤褐	輝石、金雲母、石英	隆帯の周辺に爪形文
330	FB	217	新道	明赤褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
331	FB	683	新道	明赤褐	石英、繊維含む	隆帯の周辺に三角押文
332	Ku	928	新道	明赤褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と押引きによる波状沈線文
333	Ku	868	新道	明赤褐	金雲母、黒色岩、石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
334	FB	378	新道	明赤褐	石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
335	Ku	261	新道	明赤褐	石英	隆帯の周辺に爪形文と三角押文
336	FB	59	新道	明赤褐	石英、白色岩	隆帯の周辺に爪形文と三角押文。刻みのある突起を有す
337	Ku	368	新道	明赤褐	輝石、石英、白色岩	刻みのある隆帯の周辺に爪形文と三角押文

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
338	Ku	619	新道	明赤褐	石英、白色岩	刻みのある隆帯の先端を鳥養状にして、周囲に爪形文と三角押文を施文
339	FB	876	新道	明赤褐	石英	隆帯の周囲に爪形文と三角押文
340	FB	1158	新道	明赤褐	石英、白色岩	隆帯の周囲に爪形文と三角押文

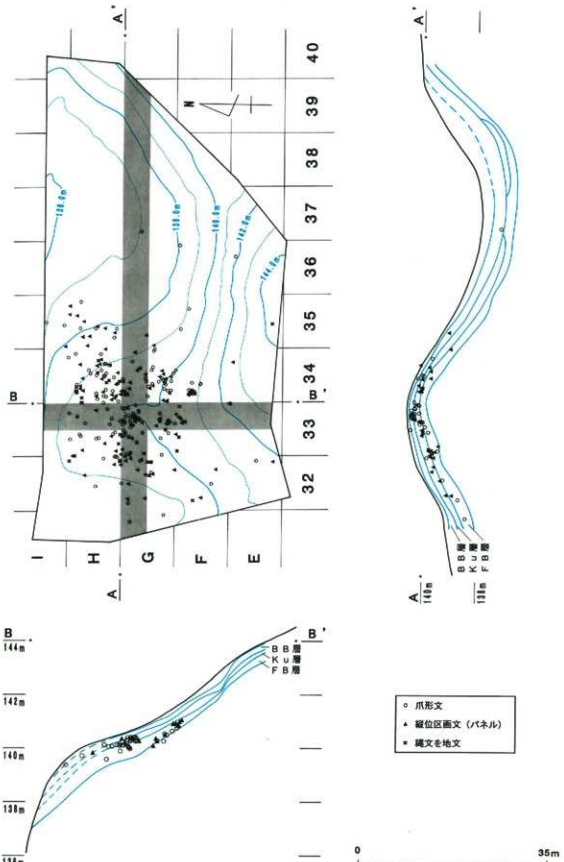
c　第10群土器（藤内式）

中期前半に位置する藤内式と考えられる土器を第10群とした。縦位区画文と抽象文、横帯区画文等があり、隆帯の脇や上に爪形文を施している。また縄文を地文にしたものもある。藤内式の中を隆帯の脇に爪形文を施文したものと縦位区画文のもの、縄文を地文としたものに分類した。その分布状況を第55図に掲載した。縦位区画文と縄文を地文にしたものは、１・２区の中央部に比較的まとまって分布しているが、爪形文は遺跡全体に広範囲に広がっている。土器は286点出土しており、富士黒土層から143点、栗色土層から142点になる。富士黒土層と栗色土層出土の割合は３者ともほぼ半々であり、平面的分布状況や層位からは明確な時期差を認めることはできない。

第10群ａ類（爪形文）341～367

藤内式と考えられる土器の中で横帯文や抽象文の土器を10群ａ類とした。隆帯の周囲に爪形文と波状沈沈線文の組み合わせが多く見られる。出土数133点のうち、富士黒土層から66点、栗色土層から67点出土している。復原できた土器344の出土状況を第56図に掲載した。344は口縁部下の横帯する長方形の区画の内側と外側に爪形文を施文してある個体である。土器片８点が１区の北側に集中している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
341	FB	282	藤内	にぶい黄橙	輝石、金雲母、黒色岩、石英	隆帯上や脇に爪形文を施文。隆帯に沿って波状沈線文
342	FB	289	藤内	明褐	金雲母、石英、白色岩	隆帯上や脇に爪形文を施文。突起を有す
343	FB	1353	藤内	橙	輝石、金雲母、石英、赤色岩 流紋岩	隆帯で抽象文を描き、隆帯上には爪形文を施文 半截竹管による平行沈線で区画した内を沈線で充填
344	FB	606	藤内	にぶい赤褐	黒色岩、石英、流紋岩	横帯する長方形の区画の内と外側を爪形文と押引きの波状沈線文で施文。隆帯の一部には刻みがある
345	Ku	113	藤内	にぶい褐	金雲母、黒色岩、石英、白色岩	ＲＬの縄文を地文に隆帯の脇に爪形文を施文
346	FB	29	藤内	にぶい赤褐	輝石、石英、流紋岩	ＲＬの縄文を地文に山形にヘラ描き文と爪形文を施文
347	FB	214	藤内	にぶい赤褐	輝石、石英、白色岩	底部の上に隆帯で楕円状に区画し、その内に爪形文を施文
348	Ku	369	藤内	明褐	金雲母、黒雲母、石英	丸みのある底部の上に隆帯で楕円状に区画し、その内に爪形文を施文
349	FB	1773	藤内	にぶい橙	輝石、石英、流紋岩	隆帯の脇に爪形文を施文
350	FB	149	藤内	にぶい橙	輝石、金雲母、石英、赤色岩	隆帯の脇や区画した内を爪形文で施文
351	FB	151	藤内	にぶい橙	輝石、金雲母、石英、赤色岩	爪形文と波状沈線文
352	Ku	53	藤内	にぶい赤褐	輝石、石英	隆帯で区画した内を爪形文で充填
353	FB	288	藤内	にぶい褐	輝石、金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文
354	FB	1300	藤内	褐	金雲母、石英	隆帯上や脇に爪形文を施文 区画の内に波状沈線文を配し、中央に三叉文
355	FB	1327	藤内	褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文を施文



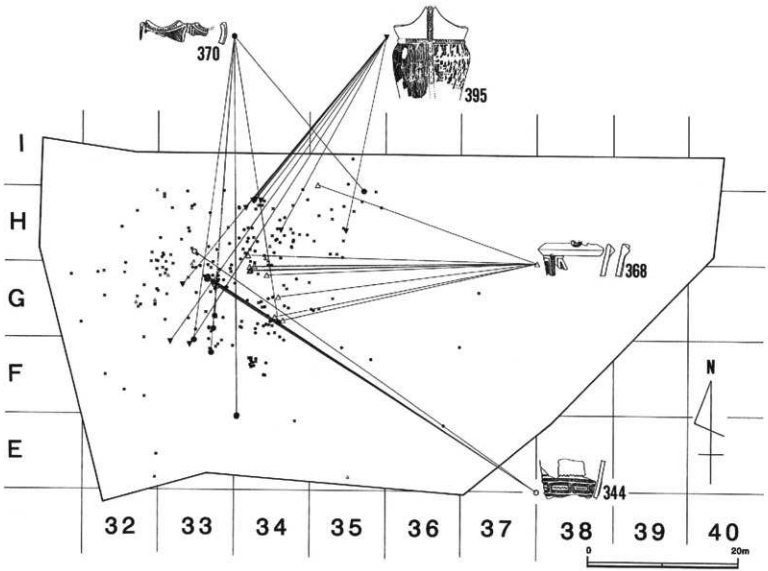
第55図　中期第10群土器分布図（藤内）

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
356	Ｋｕ	58	藤内	褐	金雲母、黒色岩	隆帯で抽象文を描き、その周囲に爪形文と波状沈線文を施文
357	ＦＢ	762	藤内	明褐	輝石、金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文を施文
358	ＦＢ	1340	藤内	にぶい褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文を施文。隆帯に沿って波状沈線文
359	ＦＢ	1344	藤内	褐	石英、白色岩	隆帯の脇に爪形文を施文し、区画の中央に平載竹管による刺突文
360	ＦＢ	896	藤内	にぶい褐	金雲母、石英、白色岩	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文を施文
361	ＦＢ	999	藤内	褐	金雲母、石英	隆帯上と脇に爪形文を施文し爪形文に沿って波状沈線文を施す
362	Ｋｕ	902	藤内	にぶい褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文を施文
363	Ｋｕ	991	藤内	にぶい褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文を施文
364	Ｋｕ	799	藤内	にぶい褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文を施文
365	ＦＢ	1352	藤内	にぶい褐	輝石、金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文を施文
366	Ｋｕ	492	藤内	明褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文を施文
367	ＦＢ	832	藤内	にぶい褐	金雲母、石英	隆帯の脇に爪形文と波状沈線文を施文

第10群ｂ類１（縦位区画文）368～394

藤内式と考えられる土器の中で縦位区画文の土器を10群ｂ類１とした。刻みのある隆帯や平行沈線で区画した中を沈線で充填している。出土数116点のうち、富士黒土層から66点、栗色土層から67点出土している。復原できた土器368と370の出土状況を第56図に掲載した。368は口縁部の無文帯の下から隆帯や平行沈線で縦位に区画をした個体である。口縁部と胴部の上半部まで復原できた。土器片11点が２区の中央部から北側に広がって分布している。370は爪形文を施文した波状口縁部下から平行沈線で縦方向に区画した個体である。土器片９点が１区・２区に広がって分布している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
368	Ｋｕ	497	藤内	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	口縁部の無文帯に刻み目の施された突起を単独に貼付 肩部には刻目のある隆帯や平行沈線によって縦方向に区画し、その内を縦位や斜位の沈線で充填
369	Ｋｕ	470	藤内	にぶい橙	輝石、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
370	Ｋｕ	394	藤内	橙	輝石、金雲母、石英、赤色岩 流紋岩	波状口縁部直下より爪形文の施された隆帯や平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
371	ＦＢ	26	藤内	にぶい赤褐	輝石、石英、流紋岩	平行沈線で縦方向に区画された内をＲＬの縄文で充填
372	ＦＢ	920	藤内	明褐	金雲母、黒色粒、石英	隆帯上に爪形文を施文。平行沈線で区画
373	ＦＢ	1790	藤内	にぶい橙	金雲母、黒色岩、石英	隆帯状に爪形文を施文したミミズク状の双孔把手
374	Ｋｕ	661	藤内	橙	金雲母、石英	無文の口縁部
375	ＦＢ	942	藤内	褐	黒色岩、石英	刻み目のある隆帯で区画された内を爪形文や三叉文で充填
376	ＦＢ	968	藤内	赤褐	石英、白色岩	平行沈線で区画された内を爪形文や三叉文で充填
377	ＦＢ	222	藤内	赤褐	石英	平行沈線で区画された内を爪形文や三叉文で充填
378	Ｋｕ	898	藤内	明褐	金雲母、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填



第56図　個体別土器分布図（勝内）

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
379	Ku	897	藤内	明褐	石英、白色岩	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
380	FB	370	藤内	赤褐	黒雲母、黒色岩、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
381	FB	848	藤内	明赤褐	輝石、金雲母、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
382	Ku	1047	藤内	明赤褐	輝石、金雲母	平行沈線で縦方向に区画された内を半截竹管による連続刺突文で充填
383	Ku	530	藤内	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
384	Ku	289	藤内	褐	石英、白色岩	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
385	Ku	504	藤内	赤褐	黒色岩、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
386	FB	200	藤内	赤褐	石英、白色岩	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
387	FB	556	藤内	赤褐	黒雲母、石英、白色岩	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
388	Ku	292	藤内	明赤褐	輝石、石英	平行沈線で縦方向に区画された内を斜位の平行沈線で充填
389	FB	220	藤内	明赤褐	石英、白色岩	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方向に区画された内を三角形の押し引き文で充填
390	FB	384	藤内	明赤褐	金雲母、黒色岩、石英	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方面に区画されている
391	FB	948	藤内	赤褐	石英、白色岩	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方面に区画されている
392	Ku	280	藤内	赤褐	黒色岩、白色岩	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方面に区画された内を平行沈線で充填
393	Ku	353	藤内	にぶい赤褐	金雲母、石英	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方面に区画されている
394	Ku	919	藤内	赤褐	金雲母、石英	刻み目のある隆帯と平行沈線で縦方面に区画された内を斜位の平行沈線で充填

第10群ｂ類２（縄文を地文）395～405

藤内式と考えられる土器の中で縄文を地文とするものを中心に10群ｂ類２とした。口縁部に爪形文や刻目の施された隆帯がめぐるもの、口縁部に無文帯のあるもの、全面に縄文が施されているものなどがある。出土数37点のうち、富士黒土層から18点、栗色土層から19点出土している。復原できた土器395の出土状況を第56図に掲載した。395は口縁部の突起から縦方向に刻みをもった隆帯が底部まで延び、頸部にも同様の隆帯を横位にめぐらせている。また胴部には全面にＲＬの縄文が施されている個体である。土器片11点が１区・２区に跨って分布している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
395	Ku	606	藤内	暗赤褐	輝石、金雲母、石英 赤色岩、流紋岩	口縁部は無文帯で突起を有す。突起から縦方向に刻みをもった隆帯が底部まで伸び、頸部にも同様の隆帯を横位にめぐらせている。胴部は全面にＲＬの縄文が施されている。胴部に帯縄圧痕による断続的な押圧文をもつ
396	Ku	317	藤内	にぶい橙	輝石、石英、長石 流紋岩	口縁部は無文帯で突起を有す。頸部に爪形文の施された隆帯をめぐらせている
397	Ku	595	藤内	褐	輝石、金雲母、石英	口縁部に爪形文を施文
398	Ku	936	藤内	明赤褐	石英	隆帯上及び器面にＲＬの縄文を施文
399	FB	2	藤内	褐	石英	口縁部に刻みを施す
400	FB	668	藤内	赤褐	石英	口縁部に刻みを施す
401	FB	1832	藤内	明赤褐	黒雲母、石英、繊維含む	口縁部無文帯

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
402	Ku	1124	藤内	橙	金雲母、石英、白色岩 繊維含む	口縁部無文帯
403	FB	301	藤内	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英	RLの縄文を地文に平行沈線で渦巻文を施文
404	Ku	804	藤内	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英	RLの縄文を地文に平行沈線で渦巻文を施文
405	Ku	982	藤内	にぶい赤褐	輝石、石英、白色岩	口縁部に一条の沈線をめぐらせ、胴部全面にRLの縄文を施文

d　第11群土器（井戸尻式）406～410

中期前半の藤内式に次ぐ型式である井戸尻式と考えられる土器を11群とした。隆帯上に斜行のヘラ切り沈線文が施されている。土器は9点出土しており，富士黒土層から5点、栗色土層から4点出土している。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
406	FB	107	井戸尻	にぶい橙	輝石、石英、赤色岩、流紋岩	隆帯上に斜行の刻みを持つ把手
407	Ku	949	井戸尻	明褐	白色岩	隆帯上に斜行の刻み
408	FB	775	井戸尻	明褐褐	白色岩	隆帯上に斜行の刻み
409	Ku	231	井戸尻	にぶい褐	白色岩	隆帯上に斜行の刻み
410	Ku	345	井戸尻	明赤褐	輝石、黒色岩	隆帯上に斜行の刻み

e　第12群土器（9・10・11群に伴う浅鉢、有孔鍔付土器）411～413

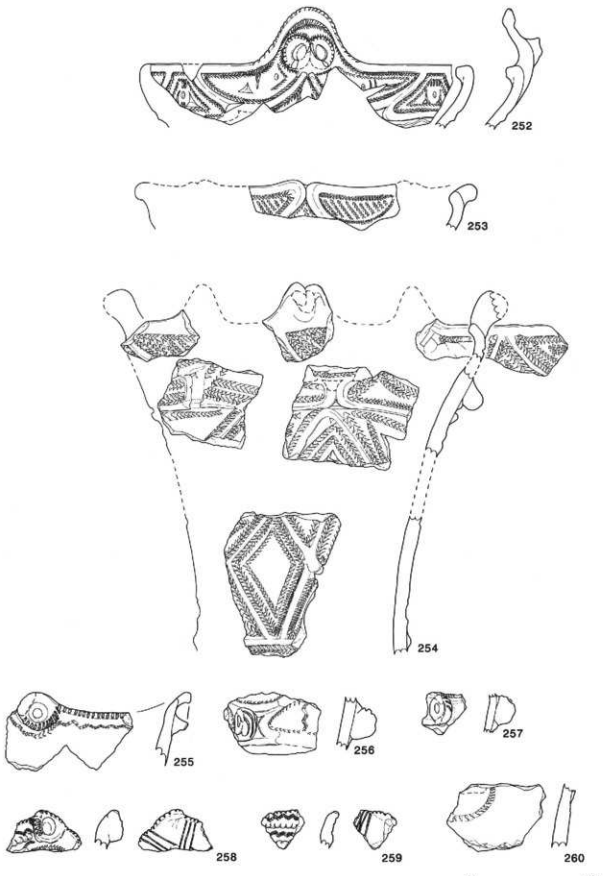
9・10・11群に伴う浅鉢、有孔鍔付土器を12群とした。この時期の文様の特徴である三角押文や爪形文等が施文されている。

図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
411	FB	155	新道	赤褐	輝石、黒色岩、石英、白色岩	有孔鍔付土器。口縁部直下を一周する貫通孔が巡らされる。胴部の中央部に最大径をもつ。上段は三角押文と中央に三叉文を配す。下段はRLの縄文を施文
412	Ku	102	新道	にぶい褐	輝石、石英、白色岩	胴部の中央部に最大径をもつ。上段は三角押文と爪形文で充填し、中央に三叉文を配す。 下段はRLの縄文を施文
413	FB	335	新道	にぶい赤褐	輝石、金雲母、石英、白色岩	浅鉢。 口縁部に爪形文や斑状沈線文を施文。 胴部との境に粘土紐を貼付し、その上にペン先状工具による押し引き文

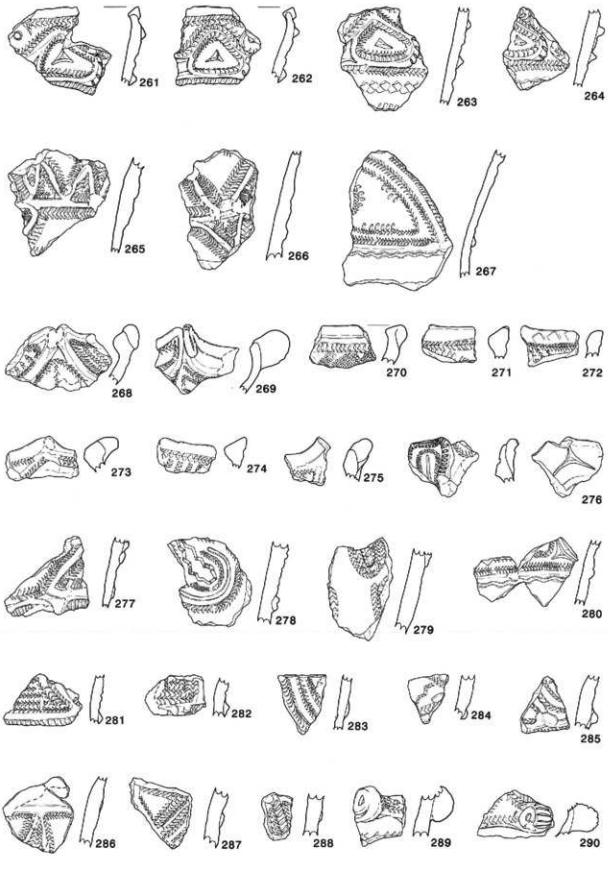
f　第13群土器（堀之内式、安行式）414～416

後期と思われる土器を13群として一括した。堀之内式と考えられる土器が1点、安行式と考えられる土器が2点出土した。

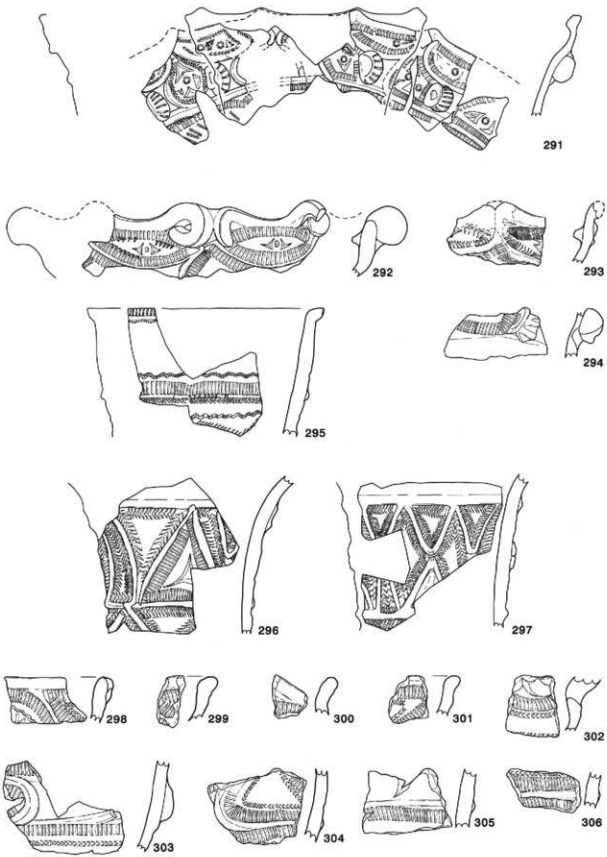
図版番号	層位	遺物番号	型式	色調	胎土	文様
414	FB	1122	堀ノ内	黒褐	輝石、石英、白色岩	口縁部に沈線で爪手文を描き、刻み目のある隆帯で区画
415	FB	905	安行	明赤褐	輝石、石英	地文の桑痕文の上に平行沈線を横位にめぐらし、その内に列点文を施文。
416	FB	1707	安行	橙	石英	地文の桑痕文の上に平行沈線を横位にめぐらす



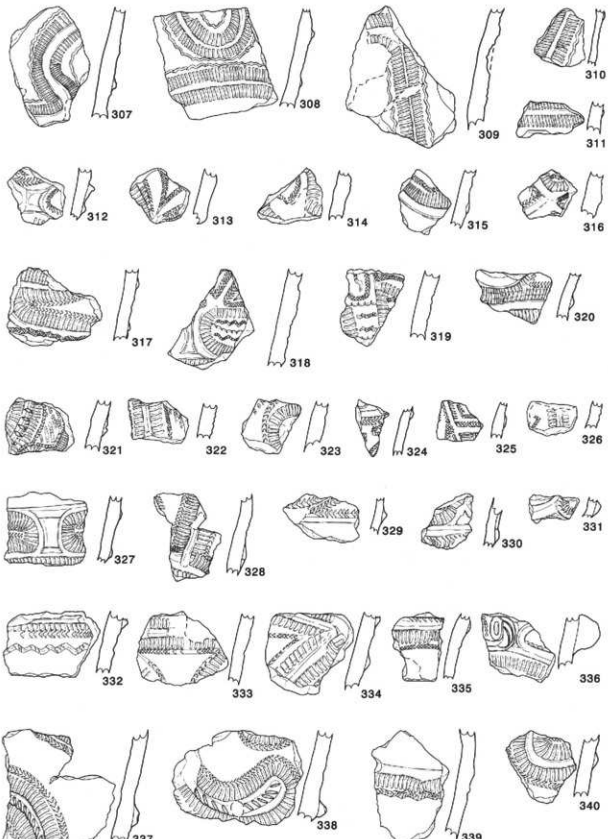
第57図　土器実測図11（第９類ａ類 1/3）



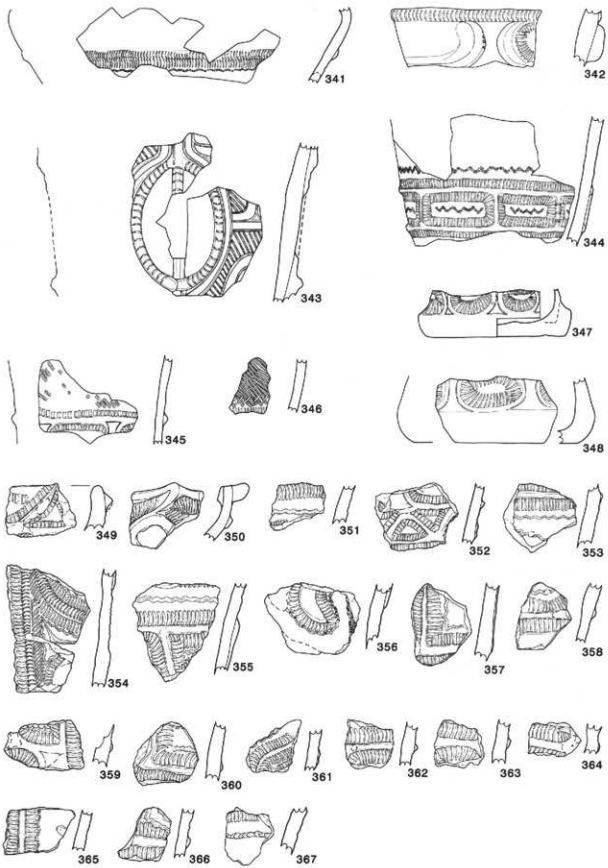
第58図　土器実測図12（第９群ａ類 1/3）



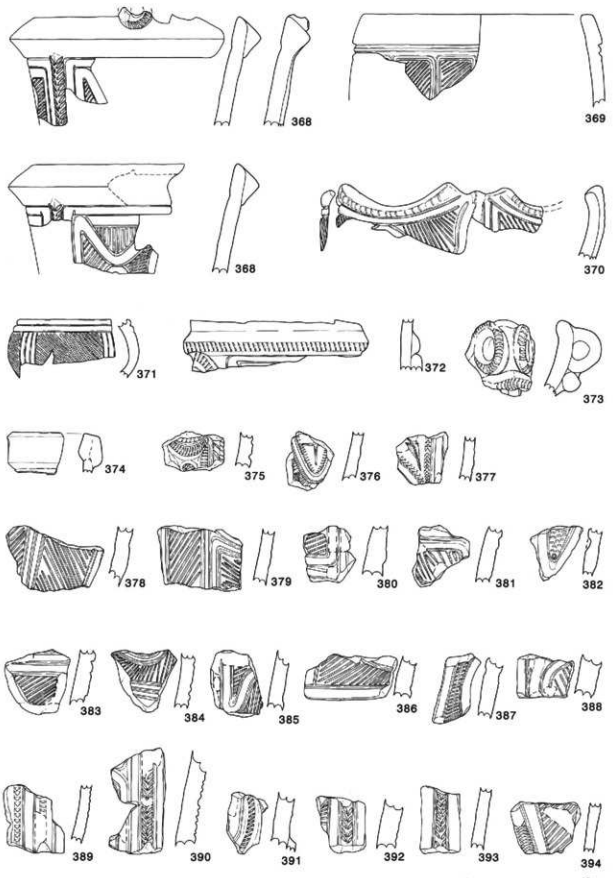
第59図　土器実測図13（第９群ｂ類 1/3）



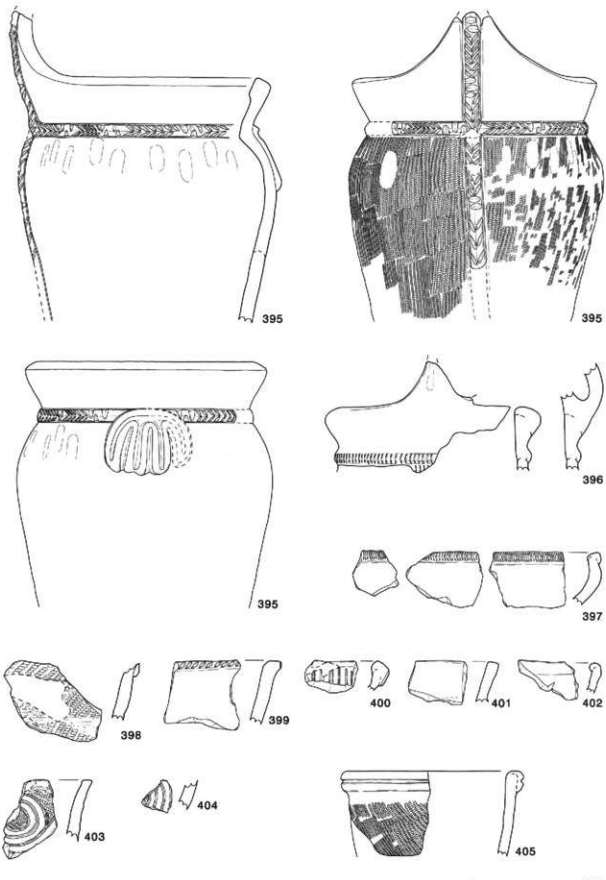
第60図　土器実測図14（第９群ｂ類 1/3）



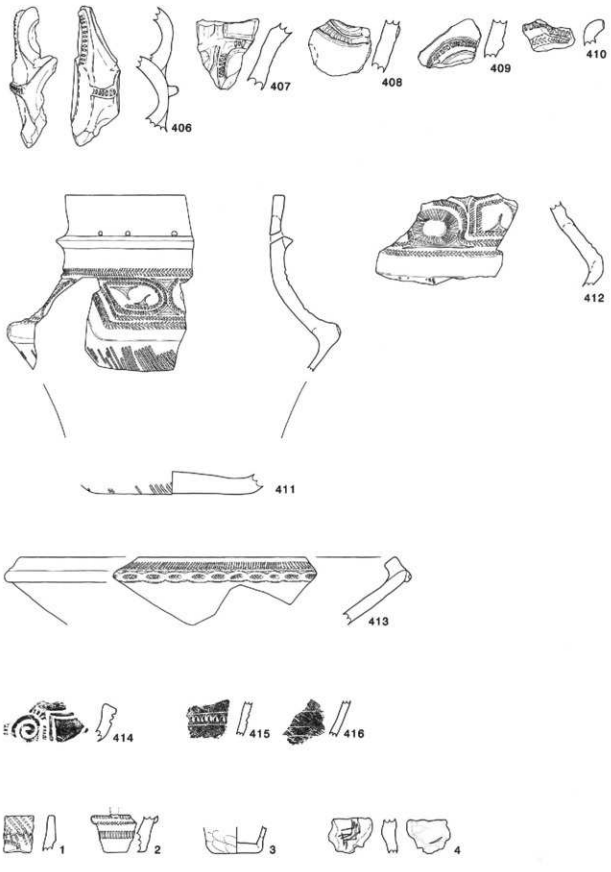
第61図　土器実測図15（第10群ａ類 1/3）



第62図　土器実測図16（第10群ｂ類1　1/3）



第63図　土器実測図17（第10群ｂ類2 1/3）



第64図　土器・土製品実測図18（第11・12・13群、土製品 1/3）

5　縄文時代の土製品　1～4

縄文時代の中期と思われる土製品を一括した。ミニチュア土器が3点，焼成粘土塊が1点出土した。

図版番号	層位	遺物番号	型式　色調	胎土	文様
1	FB	114	ミニチュア土器 明赤褐	黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	口縁部直下より結節沈線文 胴部下部は、S字状結節をもったRLの縄文を施文
2	Ku	644	ミニチュア土器 にぶい褐	黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	底等の脇に爪形文と三角押文を施文。 胴部中央にも爪形文
3	FB	28	ミニチュア土器 橙 の底部	輝石、黒雲母、石英、白色岩 繊維含む	指頭圧痕を残す
4	FB	1320	焼成粘土塊 にぶい黄橙	輝石、黒色岩	

6　縄文時代の石器（Ku・FB）

a　概　観

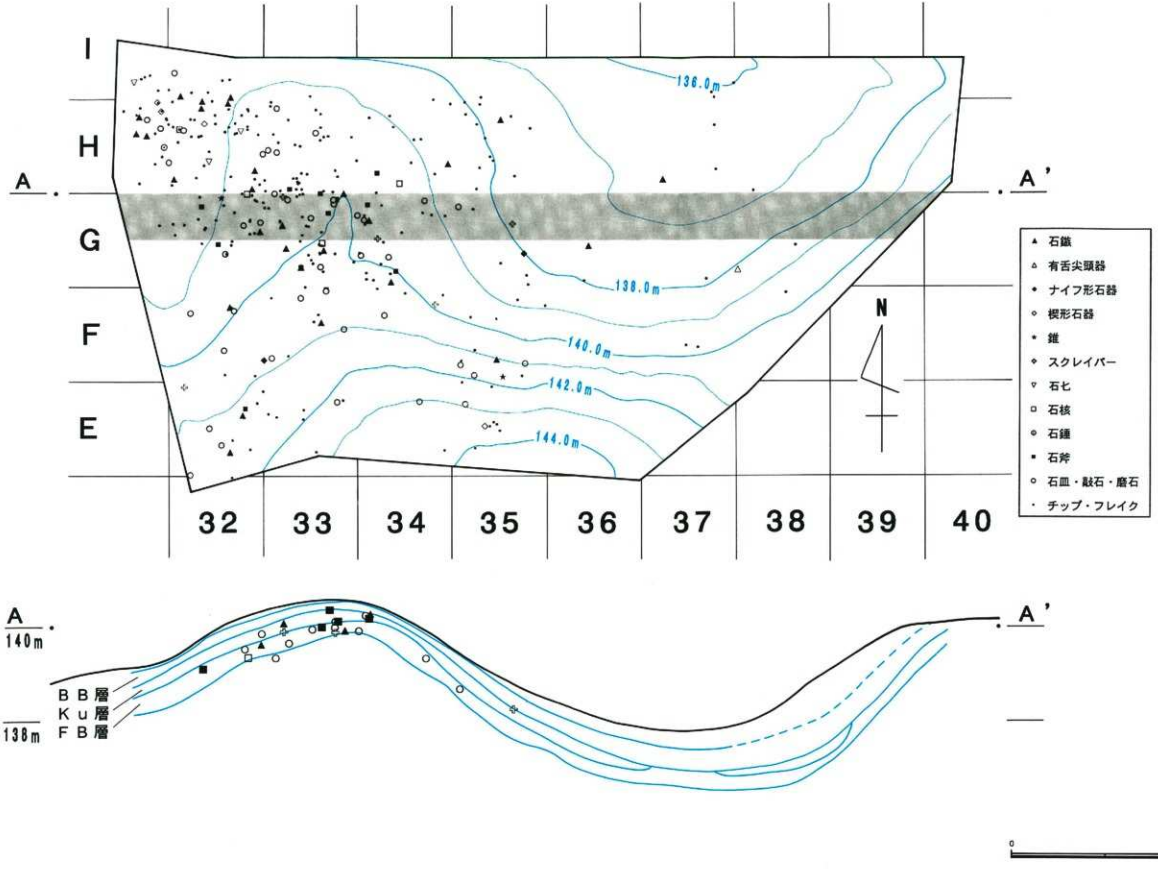
縄文時代の石器は，栗色土層，富士黒土層から出土している。これらの石器群に対応する栗色土層，富士黒土層出土の土器は，縄文時代早期から後期までの幅広い土器群があり，特に早期後半の条痕文系土器群，前期後半の竹管文系土器群，中期中葉に中部地方に分布の中心をもつ新道式・藤内式・井戸尻式土器群が主体を占める。縄文時代石器出土分布図（第65図）と縄文時代早期３群土器分布図（第39図）から石器は早期後半の条痕文系土器群に伴うものが主体を占めると考えられる。しかし，栗色土層と富士黒土層がはっきり分層できず，休場層以下は崩落が激しいので，本来より下層と思われるナイフ形石器・有舌尖頭器等が出土している。

第66・67図は石器の機能面から分布図を作ってみた。しかし，調査区が遺跡の本体と考えられる南側尾根頂上部ではなく，遺跡のはずれの北側斜面ということもあって，機能面からみた分布状況に明確な差を認めることはできなかった。

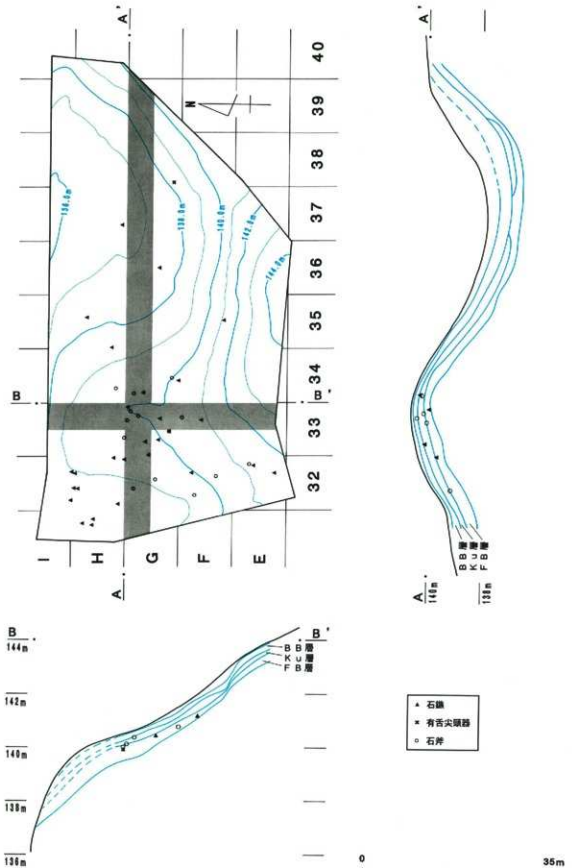
栗色土層と富士黒土層出土石器群の器種別個体数は以下の通りである。石鏃28点、有舌尖頭器１点、ナイフ形石器２点、楔形石器４点、錐２点、スクレイパー７点、石匙３点、石核４点、石錘１点、磨製石斧１点、打製石斧12点、磨石２点、磨・敲石29点、特殊磨石３点、敲石６点、石皿３点。

表16　縄文時代の石器組成表

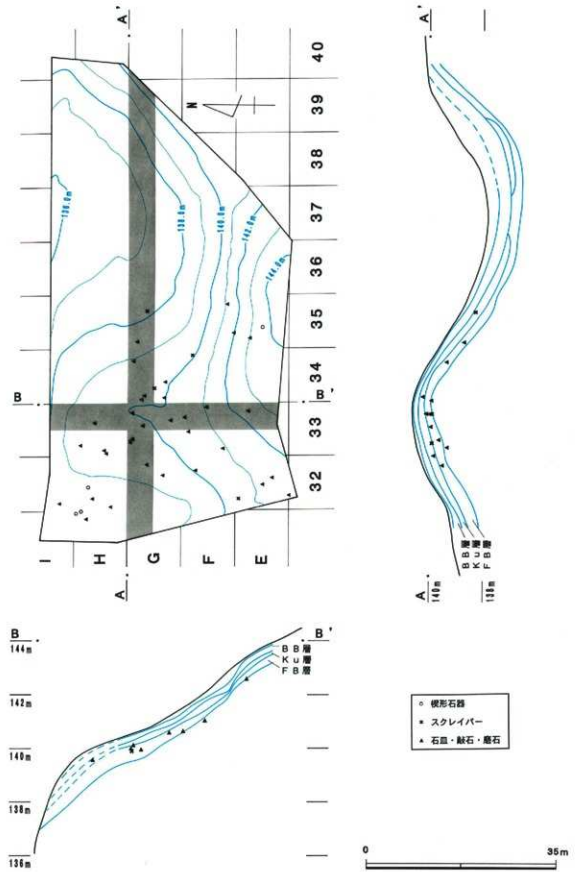
	石鏃	有舌尖頭器	ナイフ形石器	楔形石器	錐	スクレイパー	石匙	石核	石錘	磨製石斧	打製石斧	磨石	磨・敲石	敲石	石皿	特殊磨石	合計
黒曜石	26		2	4	2	4	1	4									43
ガラス質黒色安山岩	1	1				2	2										6
珪質頁岩	1					1											2
輝石安山岩											1					1	2
安山岩									1			2	29	6	3	2	43
硬砂岩											4						4
砂岩											3						3
石英安山岩											3						3
緑色凝灰岩											1						1
緑色変岩										1							1
合計	28	1	2	4	2	7	3	4	1	1	12	2	29	6	3	3	108



第65図　石器出土分布図


A
A'
B
B'
N
I
H
G
F
E
32
33
34
35
36
37
38
39
40
144m
142m
140m
138m
136m
BB層
KU層
FB層
石鏃
有舌尖頭器
石斧
0
35m

第66図　石器分布図1


A'
A
B
B'
40
39
38
37
36
35
34
33
32
I
H
G
F
E
N
BB層
Ku層
FB層
140m
138m
144m
142m
136m
0
35m
楔形石器
スクレイパー
石皿・敲石・磨石

第67図　石器分布図２

b 石 鏃（1～28）

石鏃は28点が出土している。栗色土層中で検出されたものが12点、富士黒土層中からは15点が出土している。他に中近世と思われる黒色土層からも1点が出土している。石材はほとんどが黒耀石で、26点が出土している。他に珪質頁岩1点、ガラス質黒色安山岩1点が含まれる。石鏃の基部形態等により平基無茎鏃、凹基無茎鏃、凸基有茎鏃が認められ、次の1類から4類に分類される。

第1類（1・2） 平基無茎鏃を本領とした。基部の抉りが小さいかほとんど認められないもの。1は三角石鏃、信州産の良質黒耀石を使用。断面は凸レンズ状になる。2も1と同様信州産の良質黒耀石を使用。素材は無打面の小形剥片もしくは両極剥片の可能性がある。加工はあまり進んでいないため、未製品の可能性が高い。

第2類（3～24） 凹基無茎鏃のものを本領とした。抉り部の形態から2類をａ・ｂに分類した。

2類ａは基部の抉りが浅いもの（3～14）を一括した。3のY字石鏃はかなり風化が進んでいる。小形の剥片素材で、表裏に大きく素材の面を残している。石材は安山岩である。4、Y字石鏃。素材は両極剥片である。丁寧な押圧剥離で形態を整えている。5、Y字石鏃。やや厚めの素材にカマボコ状の断面に仕上げている石鏃。通常の石鏃よりもやや大きい。6、Y字石鏃。信州の良質黒耀石を使用。7、Y字石鏃。先端部は衝撃剥離により欠損。8、脚の部分に抉りがあるのでY字石鏃の脚部と思われる。9、Y字石鏃。先端部は衝撃剥離痕が明瞭に残る。石材は黄褐色の良質黒耀石である。10、脚が鋭く脚がゆるやかな石鏃。素材は両極剥片の可能性が高い。11、Y字石鏃。12、先端部が先鋭になる形態の石鏃。13、断面が凸レンズ状で、やや厚い側面を持つ石鏃。14、やや厚い両極剥片の素材の周囲に押圧剥離の二次加工をした石器。

2類ｂは基部の抉りが深いもの（15～24）を一括した。15は局部磨製鏃形鏃。信州産の良質黒耀石を使用。16、鍬形鏃の断片。17、両脚が尖り、脚上が深い。先端部の押圧剥離は側辺から斜めにはいる。加工や形態の要素から鍬形鏃と思われる。18、鍬形鏃の一種。良質の信州産黒耀石を使用。19、やや大きな剥片を利用して大形の石鏃にしようとしたもの。鍬形鏃の未製品の可能性が高い。20、両側辺が鋸歯状の剥離によって形成された鋸歯状石鏃。21、薄い素材の両側辺に鋸歯状の剥離をもつ石鏃。22、厚い素材の両側辺に鋸歯状の剥離をした石鏃。23、脚の部分が破損しているため脚部の形態は不明。厚い素材を使用しているのが特徴。24、良質の信州産黒耀石を使用。石鏃ではあるが、先端部が丸く作られており、二側辺の脚の始まる部分に若干の抉りがあること、また脚が不自然に内脹であることなどから、通常の石鏃とは若干異なる。

第3類（25） 凹基有茎鏃を本領とした。25の1点で信州産の良質黒耀石を使用。押圧剥離によって形成される茎をもつ石鏃。

第4類（26～28） 欠損のため分類が明確にできないものを本領に一括した。26、28は基部が欠損。27、鋸歯状の石鏃であるが脚部が欠損。3点とも信州産の良質黒耀石を使用。

図版No	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
1	ＦＢ	S0138	石鏃	黒耀石	16.0	15.0	2.6	0.5
2	ＦＢ	S0130	石鏃	黒耀石	(19.0)	(16.0)	(3.5)	(0.9)
3	ＦＢ	S0173	石鏃	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	20.0	17.0	3.5	1.1
4	Ｋｕ	S0162	石鏃	黒耀石	16.6	14.5	3.7	0.8
5	Ｋｕ	S0163	石鏃	黒耀石	18.5	16.5	4.5	0.9
6	ＦＢ	S0139	石鏃	黒耀石	(16.0)	(11.5)	(2.0)	(0.1)

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
7	F B	S0298	石鏃	黒曜石	(16.0)	(4.0)	(3.9)	(0.7)
8	F B	S0266	石鏃	黒曜石	(12.5)	(14.0)	(4.2)	(0.6)
9	F B	S0214	石鏃	珪質頁岩	(21.0)	(16.0)	(3.3)	(1.1)
10	K u	S0057	石鏃	黒曜石	(16.0)	(14.0)	(3.0)	(0.5)
11	F B	S0207	石鏃	黒曜石	(18.0)	(14.0)	(4.3)	(0.7)
12	K u	S0189	石鏃	黒曜石	22.5	16.5	5.0	1.2
13	F B	S0106	石鏃	黒曜石	20.0	15.0	4.3	0.9
14	F B	S0151	石鏃	黒曜石	(19.0)	(19.0)	(6.3)	(1.7)
15	F B	S0123	石鏃	黒曜石	27.0	27.5	3.4	1.9
16	K u	S0019	石鏃	黒曜石	(14.0)	(13.5)	(2.5)	(0.4)
17	F B	S0156	石鏃	黒曜石	20.5	19.0	3.5	0.9
18	F B	S0096	石鏃	黒曜石	(16.5)	(14.0)	(3.3)	(0.5)
19	K u	S0135	石鏃	黒曜石	(24.5)	(19.5)	(4.5)	(1.8)
20	K u	S0021	石鏃	黒曜石	21.5	16.5	3.3	0.7
21	K u	S0052	石鏃	黒曜石	(23.5)	(13.0)	(3.5)	(0.6)
22	K u	S0095	石鏃	黒曜石	20.5	15.0	5.0	1.1
23	F B	S0026	石鏃	黒曜石	(23.0)	(12.0)	(4.0)	(0.8)
24	K u	S0041	石鏃	黒曜石	21.5	16.5	5.0	1.4
25	F B	S0115	石鏃	黒曜石	(19.5)	(16.5)	(3.9)	(0.8)
26	B B	S0004	石鏃	黒曜石	(21.0)	(18.0)	(4.0)	(1.2)
27	K u	S0051	石鏃	黒曜石	(21.5)	(13.0)	(2.5)	(0.6)
28	K u	S0032	石鏃	黒曜石	(11.5)	(11.5)	(4.0)	(0.3)

c　有舌尖頭器（29）

有舌尖頭器は１点が出土している。両側辺を鋸歯状の剥離で形成し、全体を平坦な押圧剥離で仕上げている。ガラス質黒色安山岩を使用。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
29	F B	S0293	有舌尖頭器	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	(52.5)	(16.0)	(3.0)	(4.0)

d　ナイフ形石器（30・31）

本来は休場層に包含されるナイフ形石器が富士黒土層から２点出土している。30、両側辺に刃潰し加工が施されている。また素材の打面部をナイフ形石器の基部にしていること、基部形態が先鋭なことなどから砂川期のナイフ形石器であると思われる。31、石刃素材。素材剥片の末端部分を基部にして、両

側辺に刃潰し加工をしている。基部は刃潰し加工によりやや尖るように形成されている。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
30	F B	S0275	ナイフ形石器	黒耀石	37.0	17.0	9.0	3.37
31	F B	S0166	ナイフ形石器	黒耀石	(33.0)	(23.0)	(7.4)	(5.5)

e　楔形石器（32～35）

楔形石器は富士黒土層より４点出土している。32、箱根産の黒耀石を使用。33・34は、典型的なもので上下に階段状剥離を持っている。箱根産の黒耀石を使用。35、信州産の黒耀石を使用。両極石核の可能性があると思われる。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
32	F B	S0219	楔形石器	黒耀石	31.0	14.0	11.0	3.7
33	F B	S0059	楔形石器	黒耀石	22.5	10.5	9.5	1.33
34	F B	S0279	楔形石器	黒耀石	24.5	18.0	7.5	2.7
35	F B	S0118	楔形石器	黒耀石	40.0	18.0	11.0	8.5

f　錐（36・37）

石錐は２点が出土している。36は富士黒土層より出土、黒耀石を石材にしており、両面に片縁調整が行われている。37、横長剥片の側辺に急角度剥離で先端部を作り出している。石材はガラス質黒色安山岩を使用。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
36	F B	S0228	錐	黒耀石	(39.5)	(18.0)	(12.0)	(4.55)
37	K u	S0177	錐	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	34.0	17.5	9.0	4.3

g　スクレイパー（38～41）

スクレイパーは７点が出土しており、そのうち４点を図化している。石材は黒耀石４点、ガラス質黒色安山岩2点、珪質頁岩１点である。38、横長剥片の末端に押圧剥離で刃部をつけた石器。珪質頁岩を使用。39、黒耀石の縦長剥片を素材とし、その右側縁に調整が施されている。40、両極剥片の側辺に、表裏に押圧剥離で刃をつけたもの。刃の縁辺は潰れている。素材は無打面の剥片。主要剥離面にバルブが発達していないので両極剥離か、ハンマーを石核に押しつけるようにして剥離した剥片。通常の剥片とは異なる。石材は信州産の良質黒耀石を使用。41、縦長剥片を素材にしており、石材はガラス質黒色安山岩を使用。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
38	F B	S0239	スクレイパー	珪質頁岩	42.0	68.0	11.0	26.8
39	F B	S0134	スクレイパー	黒耀石	28.0	26.5	6.0	3.0
40	K u	S0121	スクレイパー	黒耀石	(27.0)	(15.0)	(3.5)	(1.3)
41	K u	S0175	スクレイパー	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	62.0	44.0	12.0	35.4

h 石 匕（42～44）

石匕は3点が出土、全て図化している。42、横形石匕でつまみ部分が欠損している。石材は黒曜石を使用。43、横形石匕。横長剥片の基辺を刃部にして、剥離によってつまみをつけている。ガラス質黒色安山岩を使用。44、横形石匕。つまみ部分が大きく、また潰しによってつまみを作っている。ガラス質黒色安山岩を使用。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
42	K u	S0131	石匕	黒曜石	(21.5)	(34.0)	(13.0)	(6.3)
43	K u	S0125	石匕	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	38.5	48.5	9.0	11.9
44	F B	S0140	石匕	ｶﾞﾗｽ質黒色安山岩	55.0	51.0	10.9	29.2

i 石 核（45・46）

45、小形の剥片を剥離している。ここからとれる剥片は、小形の貝殻状でバルブが発達せず、無打面もしくは線上打面である。ハンマーストーンをこすりつけるようにして剥片を剥離している。剥離される剥片の特徴から、小形の石鏃の素材剥片のための石核と思われる。46、図の正面は上下から剥離が細かく入る。しかしこの面の中央には原礫面が残されているために、剥離された剥片の大きさ、厚さからいって石器素材となる剥片とは言えない。一方裏面はバルブの発達するきれいな貝殻状剥片が剥離されている。ここから剥離された剥片は石器の素材となるであろう。この裏面を作業面とするならば、その打面は正面図と上見通し図である。正面図の面からは石器素材となる剥片がとれないが、上見通し図の面も同様に原礫面が広がり、その縁辺にのみ浅い剥離が行われている。しかもこの浅い剥離は石核作業面とした裏面図の打面として対応する。従ってこの石核の真の作業面は図の裏面でありその打面は図の正面と上見通しである。よってこの石器は粗い打面調整を持つ石核であり、剥離される剥片は切子打面をもつバルブのやや発達した小形でフェザーエッジをもつ剥片といえる。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
45	K u	S0055	石核	黒曜石	32.0	21.5	17.0	12.1
46	F B	S0060	石核	黒曜石	29.0	66.2	28.0	52.3

j 石 錘（47）

栗色土層から出土している。楕円形状の礫の上下端を打ち欠いて刻目を作り出している。石材は安山岩を用いている。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
47	K u	S0071	石錘	安山岩	54.5	42.5	17.0	55.5

k 磨製石斧（48）

栗色土層から1点出土している。刃部が折れた後、楔として再利用された石器。刃部折れ面には再生のための剥離痕と楔使用のおりについた潰れ痕が残る。緑色変岩を使用。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
48	K u	S0056	磨製石斧	緑色変岩	(124.5)	(51.5)	(36.0)	(387.9)

l　打製石斧（49～60）

打製石斧は欠損品も含めて12点が出土している。輝石安山岩１点、硬砂岩４点、砂岩３点、石英安山岩３点、緑色凝灰岩１点である。基部を欠損しているものが６点を数える。そのうち57～59は刃部欠損。50～52・56の刃部は片面加工より作出されており、片平刃をとるものが多い。また50の片面は階段状の剥離痕が残る。49・53・55・60は両面加工により刃部が作り出されている。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
49	K u	S0009	打製石斧	砂岩	132.5	50.5	18.0	172.7
50	K u	S0174	打製石斧	石英安山岩	(82.6)	(54.9)	(17.5)	(67.8)
51	K u	S0093	打製石斧	硬砂岩	74.5	52.5	11.5	58.3
52	K u	S0170	打製石斧	硬砂岩	76.5	46.5	14.5	62.6
53	F B	S0013	打製石斧	砂岩	(90.0)	(52.0)	(15.0)	(86.0)
54	F B	S0147	打製石斧	緑色凝灰岩	(48.0)	(40.0)	(20.0)	(37.5)
55	F B	S0011	打製石斧	石英安山岩	162.0	54.0	23.0	248.0
56	F B	S0039	打製石斧	硬砂岩	114.0	52.0	17.0	124.7
57	K u	S 0120	打製石斧	輝石安山岩	73.0	51.5	16.5	91.7
58	K u	S0103	打製石斧	砂岩	(82.5)	(57.5)	(18.5)	(97.8)
59	K u	S0181	打製石斧	硬砂岩	(44.5)	(38.5)	(17.0)	(30.5)
60	表採	S 0006	打製石斧	石英安山岩	127.5	50.5	19.0	149.7

m　磨　石（61・62）

磨石は、２点が出土。61は表裏二面に磨耗痕が認められるのに対し、62は上下部とも欠損しているが、複数面に渡り磨耗痕が認められる。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
61	K u	S 0026	磨石	安山岩	130.6	103.5	48.0	785.4
62	F B	S 0310	磨石	安山岩	(61.5)	(62.0)	(46.0)	(283.5)

n　磨・敲石（63～91）

磨ってある部分に敲打された痕がみられることから敲石・磨石と組み合わせて使用したと思われる。従って磨りと敲打痕が認められる29点に関しては磨石・敲石の複合石器とした。また平面形態にやや違いが見られたため次のように分類した。

磨・敲石の使用痕を表記するにあたり実測図に以下のような記号を加えた。

a　敲打によって生じたと考えられる凹凸。

b　帯状に形成された面的な荒れ。側面に認められる。

I類a　平面形が円形をとるものを本領とした。欠損品を含め13点が出土。68・75は中央部に敲打によって生じたと考えられる凹凸が明瞭に認められる。74は多孔質な安山岩を使用、複数面に渡り磨り敲打痕が見られる。

Ⅰ類b　平面形が楕円形をとるものを本類とした。欠損品を含めて16点が出土。77・86・89は中央部に、また76は正面上部に剥離な敲打痕が認められる。88は表裏中央部に、91は表面にそれぞれ磨り面が見られる。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
63	Ku	S0166	磨・敲石	安山岩	(55.5)	(88.5)	(46.5)	(323.1)
64	Ku	S0099	磨・敲石	安山岩	72.0	70.5	45.0	311.1
65	Ku	S0167	磨・敲石	安山岩	93.5	85.8	46.5	547.8
66	FB	S0304	磨・敲石	安山岩	59.0	60.5	43.5	180.6
67	FB	S0263	磨・敲石	安山岩	(51.0)	(75.0)	(40.0)	(166.6)
68	FB	S0155	磨・敲石	安山岩	74.0	78.0	34.5	284.2
69	FB	S0174	磨・敲石	安山岩	(69.5)	(62.5)	(42.1)	(226.2)
70	FB	S0212	磨・敲石	安山岩	81.0	75.0	52.0	431.2
71	FB	S0015	磨・敲石	安山岩	(84.0)	(45.0)	(35.9)	(190.7)
72	FB	S0201	磨・敲石	安山岩	(66.5)	(66.0)	(53.0)	(251.8)
73	FB	S0019	磨・敲石	安山岩	93.0	93.5	34.5	448.9
74	FB	S0159	磨・敲石	安山岩	78.5	91.0	46.3	352.5
75	FB	S0177	磨・敲石	安山岩	105.0	121.0	77.0	160.0
76	Ku	S0159	磨・敲石	安山岩	115.5	78.5	58.5	732.4
77	Ku	S0020	磨・敲石	安山岩	105.5	79.5	50.5	589.8
78	Ku	S0172	磨・敲石	安山岩	(74.5)	(77.0)	(67.5)	(592.2)
79	Ku	S0145	磨・敲石	安山岩	(93.0)	(61.5)	(57.0)	(405.4)
80	Ku	S0068	磨・敲石	安山岩	123.5	102.0	57.5	766.4
81	Ku	S0064	磨・敲石	安山岩	126.0	74.5	52.5	766.0
82	Ku	S0161	磨・敲石	安山岩	(73.5)	(88.5)	(57.0)	(450.6)
83	Ku	S0024	磨・敲石	安山岩	137.5	70.0	54.0	760.0
84	FB	S0098	磨・敲石	安山岩	105.0	70.0	45.3	510.8
85	FB	S0306	磨・敲石	安山岩	(37.0)	(48.5)	(32.5)	(64.9)
86	FB	S0014	磨・敲石	安山岩	79.0	107.0	45.9	520.6
87	FB	S0305	磨・敲石	安山岩	94.5	74.5	52.5	463.8
88	FB	S0178	磨・敲石	安山岩	99.0	84.0	42.3	572.5
89	FB	S0238	磨・敲石	安山岩	112.0	83.0	42.0	583.4
90	FB	S0258	磨・敲石	安山岩	135.0	69.0	60.0	790.9

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
91	F B	S 0116	磨・敲石	安山岩	98.5	77.0	52.6	542.9

o 特殊磨石 (92～94)

稜を主たる機能面とする特殊磨石が3点出土。93・94においては、下部に敲打痕が認められる。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
92	K u	S 0044	特殊磨石	安山岩	142.5	42.5	64.0	670.7
93	F B	S 0268	特殊磨石	安山岩	174.0	68.5	61.0	1009.0
94	B B	S 0003	特殊磨石	安山岩	132.5	65.5	54.0	706.7

P 敲 石 (95～98)

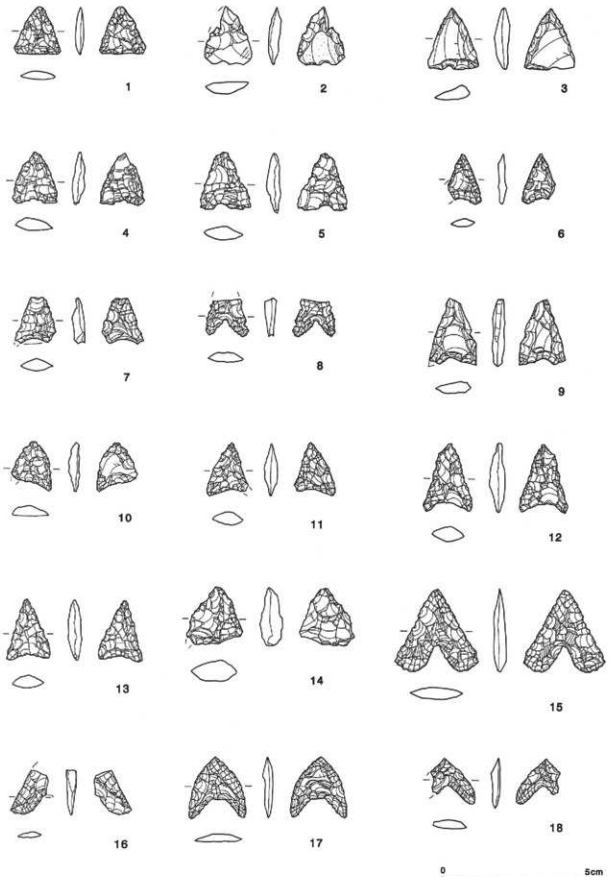
上下部ないし下部に明瞭な敲打痕が認められるものを敲石とした。本遺跡から6点の敲石が出土しているが、2点は欠損品である。96・97は上下部に敲打痕が見られるが、特に下部に強い凹凸が見られる。表記するにあたって敲打によって生じたと考えられる凹凸をaとして実測図に示している。

図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
95	K u	S 0061	敲石	安山岩	97.0	30.5	25.5	122.4
96	F B	S 0300	敲石	安山岩	83.0	33.0	20.0	73.4
97	F B	S 0307	敲石	安山岩	66.5	43.5	28.5	123.6
98	F B	S 0072	敲石	安山岩	98.0	51.0	29.0	204.3

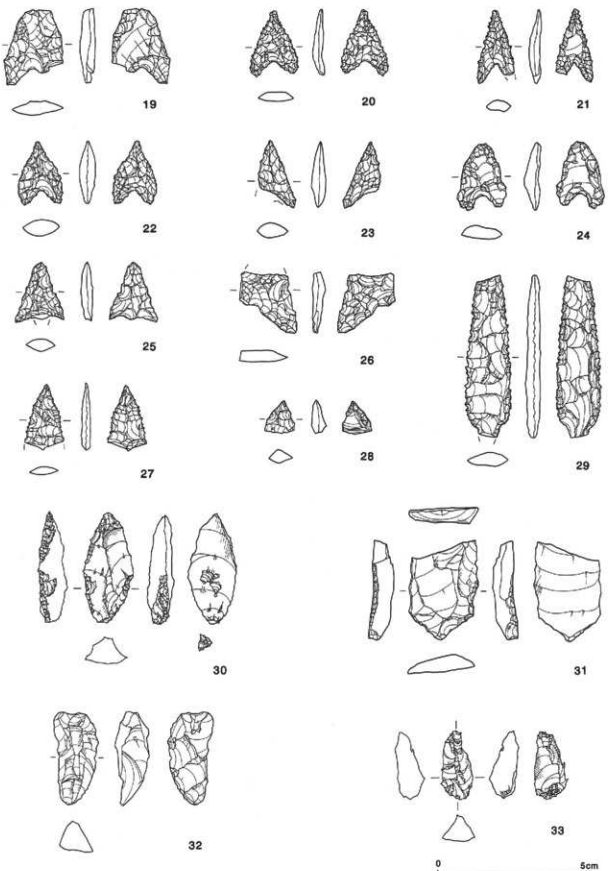
q 石 皿 (99～101)

3点出土しているが、全て欠損品である。100は表裏が磨面として利用され比較的はっきりとした凹が見られるのに対し、99・101は裏面が使用されておらず表面も僅かに凹が見られる程度である。石材はいずれも安山岩が使用されている。

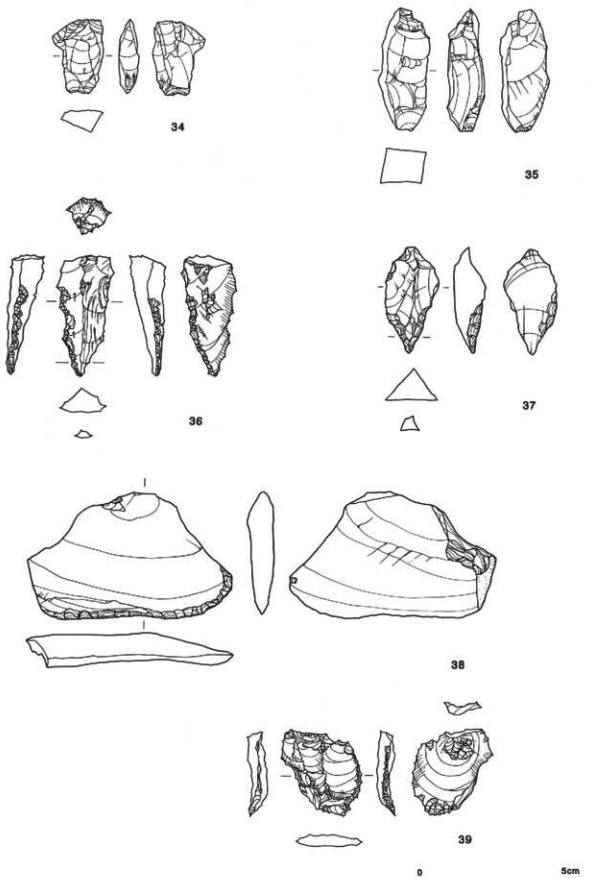
図版No.	層位	登録番号	器種	石材	縦長mm	横長mm	厚mm	重量g
99	F B	S 0236	石皿	安山岩	(154.0)	(73.0)	(63.5)	(874.4)
100	F B	S 0034	石皿	安山岩	(214.0)	(168.0)	(63.0)	(2500.0)
101	K u	S 0165	石皿	安山岩	(191.5)	(145.0)	(71.5)	(2600.0)



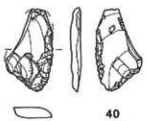
第68図　石器実測図1（石鏃 4/5）

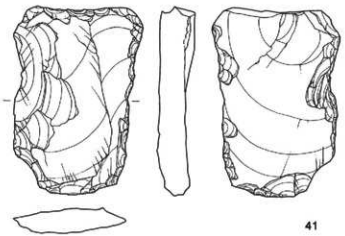


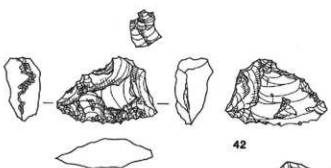
第69図　石器実測図２（石鏃・有舌・ナイフ・楔 4/5）

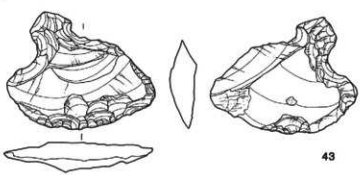


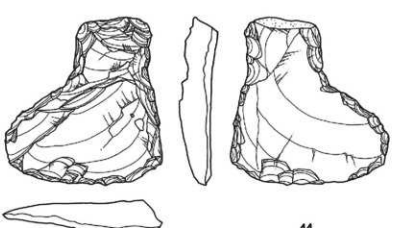
第70図　石器実測図３（楔・鉇・スクレイパー 4/5）



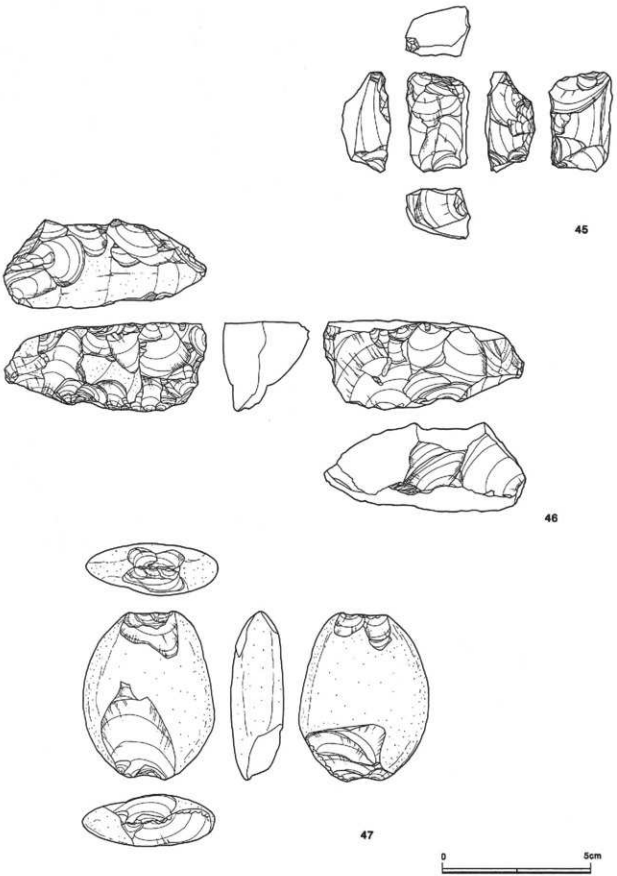




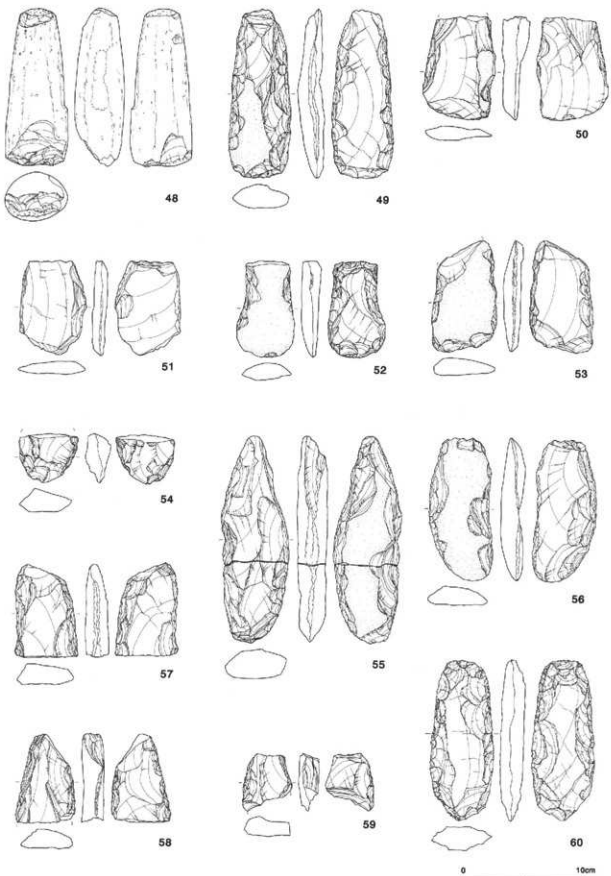




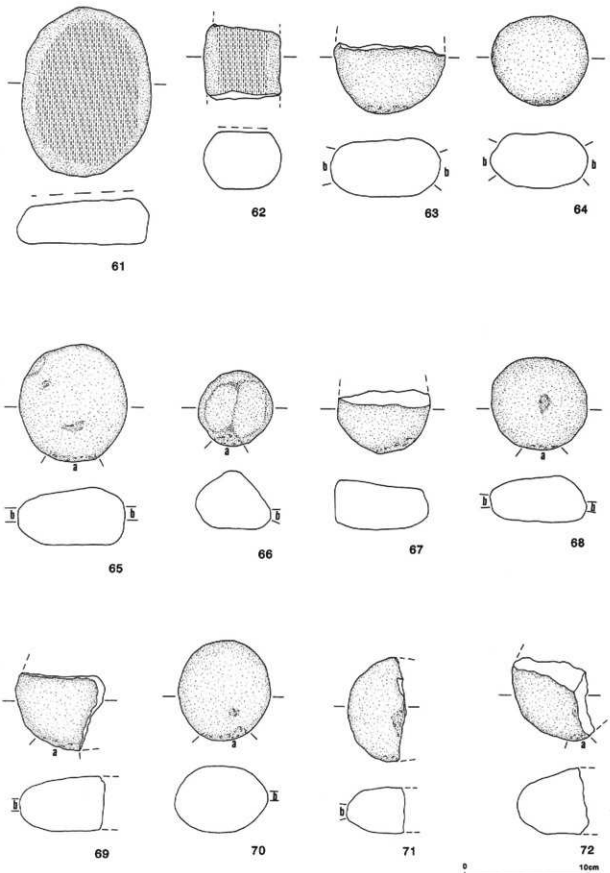
第71図　石器実測図4（スクレイパー・石匙 4/5）



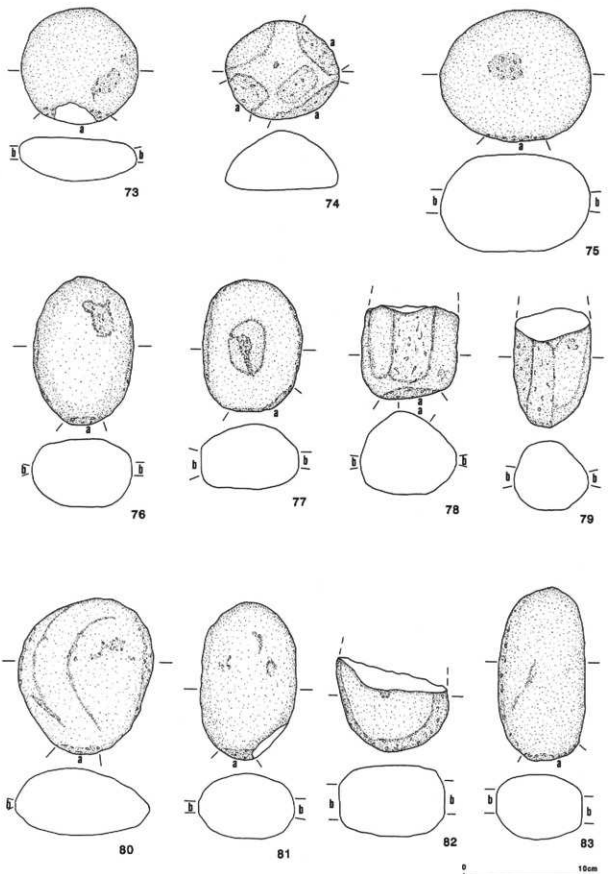
第72図　石器実測図５（石核・石錘 4/5）



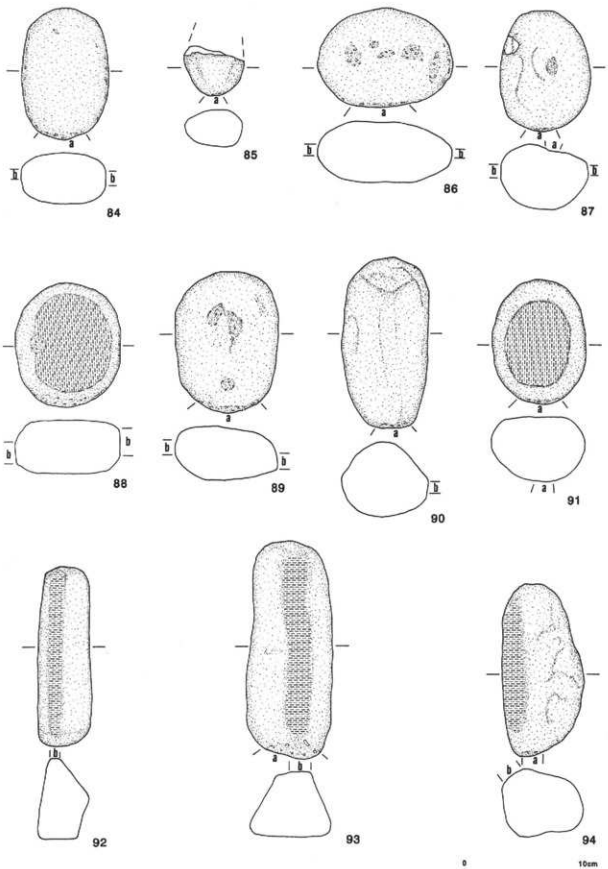
第73図　石器実測図6（磨製・打製石斧 1/3）



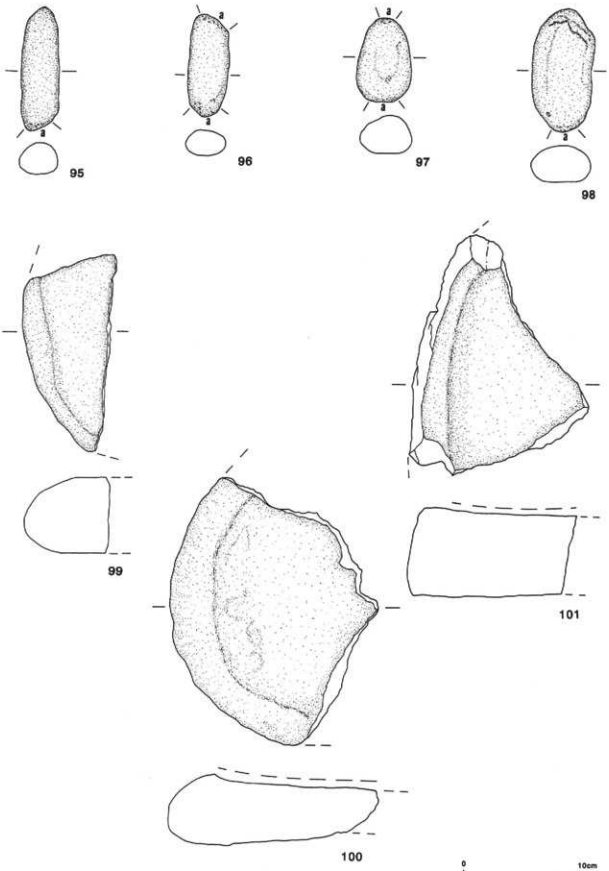
第74図　石器実測図７（磨石・敲磨石 1/3）



第75図　石器実測図８（敲磨石 1/3）



第76図　石器実測図９（敲磨石・特殊磨石 1/3）



第77図　石器実測図10（敲石・石皿 1/3）

第V章 ま と め

徳倉B遺跡は、確認調査の段階で、縄文時代の包含層が2層（栗色土層・富士黒土層）と考えていた。しかし、全体的に土層の堆積が薄く、松の抜根作業や表土除去を人力で行っていたところ、表土及び黒色土中より礫や土器（弥生土器・土師器・かわらけ等）が少量採集された。このことから縄文時代以降の遺物や遺構が黒色土中に存在することが分かり、調査を進めた。また、調査区が遺跡の主体部と思われる南側尾根頂上部からはずれた北斜面ということもあって、住居跡等の遺構は検出されず、近世から縄文時代までの包含層の調査となった。調査の主体となったのは、栗色土層や富士黒土層から出土した縄文時代早期から後期にかけての土器群と、それに伴う石器群である。徳倉B遺跡の中近世及び縄文時代の遺構・遺物について、以下にまとめてみたい。

第1節 中 近 世

この時期に伴う遺物は、表土及び黒色土中から出土し、遺構は栗色土層に掘り込むかたちで検出された。遺構としては、土坑やピットが多い。この中で、近世の墓壙と中世以降の炭窯と考えられる遺構について若干触れてみたい。

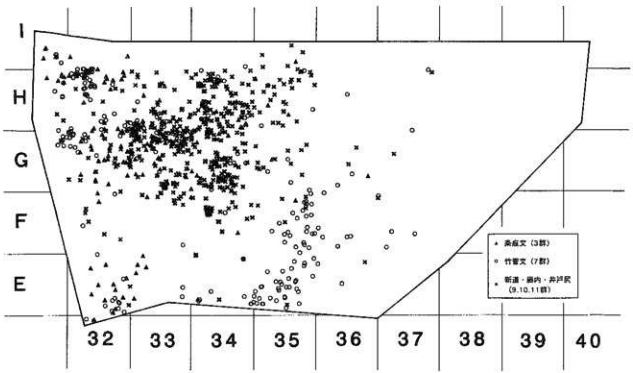
土坑63基の中で、直径1m前後の正円形の土坑が21基検出された。覆土は、黒色土や黒褐色土で遺物の出土はない。検出面からの深さは、20cm～50cmほどである。これらと同形態のものが愛鷹南麓、箱根西麓で検出されているが同様に遺物の出土がみられない。これと類似したもので、近世の墓壙と考えられている円形の土坑は、覆土中よりキセルや六文銭が出土する。深さは1m以上あり、当遺跡の墓壙とは異なる。しかし、静岡県考古学会シンポジウム「静岡県における中世墓」において、墓であるという見解が示されている。以上のことから墓壙と考えたが、今後も同形態の墓壙が検出されることが予想される。これからも注意していく必要がある。

炭窯は、7基検出された。中世の炭窯の出土例に、地面を掘り込み薪を積んで、上に枝などを載せ土を盛ったものがある。伏焼き式の窯で現代でも行われている。竹などを差し込んで煙道部とするような簡単なものであるが、本遺跡のものと類似しているように思える。本遺跡の炭窯は、覆土中に多量の炭化物や焼土を含み、底部に炭化した薪等が残っていた。このような状況から、中世以降の簡単な炭窯と考えた。しかし、なお検討の余地がある。

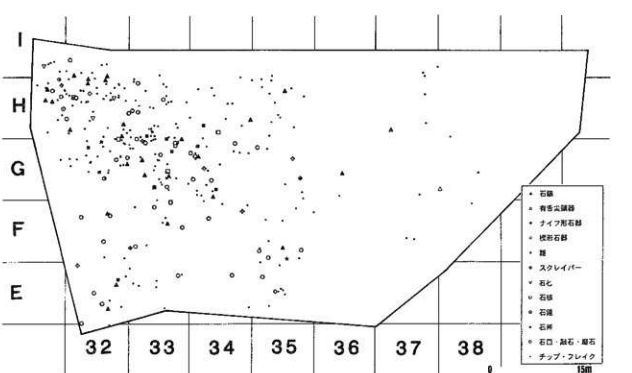
第2節 縄文時代

縄文時代の遺物は栗色土層や富士黒土層から出土し、遺構は富士黒土層や中部ロームに掘り込むかたちで検出された。遺構としては、土坑やピット・集石等がある。ここでは縄文時代の早期から後期まで幅広く出土した土器について、石器との関係を考えてみたい。

本遺跡から出土した縄文土器は2,956点と多い。特にまとまって出土した早期後半の条痕文土器群（第3群）、前期後半の竹管文土器群（第7群）、中期前半の新道式・藤内式・井戸尻式に比定される土器群（第9・10・11群）がある。この3者の分布状況（第78図）と石器の分布状況（第79図）を掲載した。土器と石器の関係を分布図からみると、縄文時代の石器群は、早期後半の条痕文系土器群に伴ったものが主体を示すように感じられる。また、石器の形態と土器型式の関係から分布状況をみていくと次のようである。本遺跡から出土している石鏃は、全部で28点である。石材は、ほとんどが信州産の黒曜石を



第78図　早・前・中期土器分布図

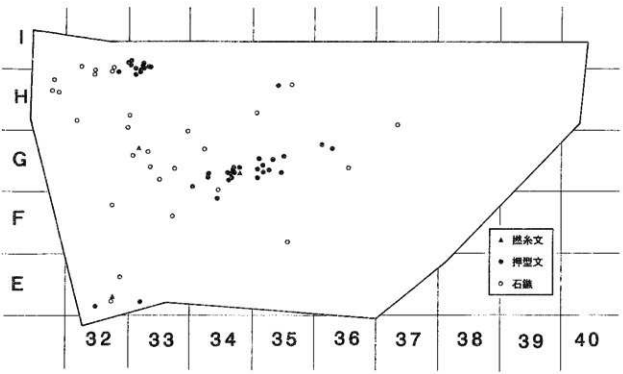


第79図　縄文時代石器分布図

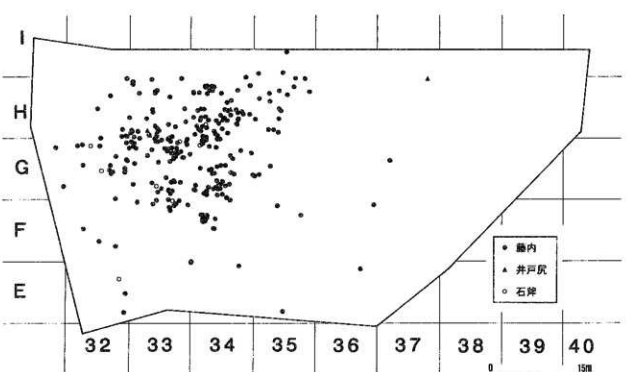
使っている。形態はY字石鏃や鍬形鏃・三角石鏃などが中心であり、縄文時代草創期後半から早期前半頃までのものと考えられる。土器型式でいえば、表裏縄文から押型文の時期に当たる。そこで、本遺跡の出土の土器の中で古い時期の撚糸文土器や押型文土器と石鏃の分布状況を第80図に示した。この分布状況からは、石鏃と早期前半の撚糸文土器や押型文土器との関連を読みとることはできない。

また、本遺跡の打製石斧は側辺を敲いただけの加工がほとんどであり、このような打製石斧は、前期以降に出現し、特に中期前半に多量に出土している。土器型式でいえば、藤内式土器や井戸尻式土器の時期に当たる。そこで、第81図に打製石斧と藤内式土器・井戸尻式土器の分布状況を掲載した。この分布図からは、打製石斧と藤内式土器や井戸尻式土器との関連が読みとれる。

このように、分布状況から土器と石器の関係、或いは石器の形態と土器型式の関係等を考察した。しかし、調査区が遺跡の主体部からはずれた北斜面に位置し、遺物が遺構を伴わない包含層からの出土であることを考慮しなければいけない。また、本遺跡における包含層遺物の分布状況であり、その分析結果であることを断っておきたい。



第80図　第1・2群土器・石鏃分布図



第81図　第10・11群土器・石斧分布図

（参考文献）

鈴木　敏中他	1992	三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ	三島市教育委員会
芦川　忠利他	1992	三島スプリングス C.C ゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	三島市教育委員会
関野　哲夫他	1989	清水柳北遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
池谷　信之他	1990	広合遺跡（b・c・d区）・広合南遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
鈴木　裕篤他	1990	大谷津遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
山本　恵一他	1993	二ツ洞遺跡（b・c区）発掘調査報告書	沼津市教育委員会
山本　恵一他	1996	西洞遺跡（a区）・葛原沢遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
平林　将信他	1985	天間沢遺跡Ⅱ	富士市教育委員会
小野　正文他	1986	釈迦堂Ⅰ	山梨県教育委員会
笹原　芳郎	1994	焼場遺跡　A地点	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
横山　秀昭	1996	加茂ノ洞B遺跡	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
篠原千賀子	1997	八山原遺跡	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
勝又　直人	1997	中峯遺跡	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

麻生　優 白石　浩之	1986	縄文土器の知識Ⅰ　草創・早・前期	東京美術
藤村　東男	1984	縄文土器の知識Ⅱ　中・後・晩期	東京美術
加藤　晋平 鶴丸　俊明	1980	図録石器の基礎知識Ⅱ　先土器（下）	(株)柏書房
鈴木道之助	1981	図録石器の基礎知識Ⅲ　縄文	(株)柏書房
小林　達雄	1988	古代史復元3　縄文人の道具	(株)講談社

三　島　市	1992	三島市誌　増補　資料編Ⅱ	
静　岡　県	1992	静岡県史　資料編3　考古三	

小林　達雄 小川　忠博	1988	縄文土器大観Ⅰ 草創期　早期　前期	(株)小学館
小林　達雄 小川　忠博	1988	縄文土器大観Ⅱ 中期Ⅰ	(株)小学館

写真図版

調査区発掘前（北西側より）検林伐採

調査区発掘終了（北西側より）

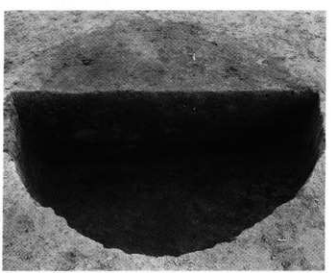
図版２

調査区全景（東側より）

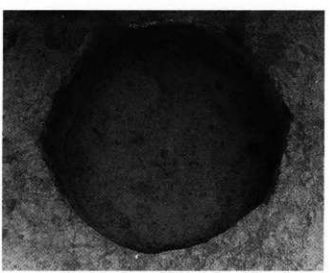
１区ＢＢ層遺構完掘状況（南側より）

BB層1号土坑断面

BB層3号土坑断面



BB層15号土坑断面



BB層15号土坑完掘

BB層1号炭窯断面

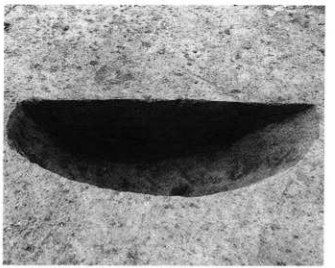
BB層2号炭窯完掘

図版4

1・2区Ｋｕ層遺構完掘状況（南側より）

1・2区Ｋｕ層遺構完掘状況（北側より）

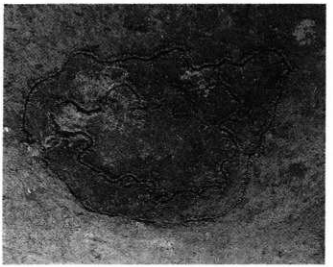
Ku層1号ピット断面



Ku層7号土坑断面

Ku層1号集石

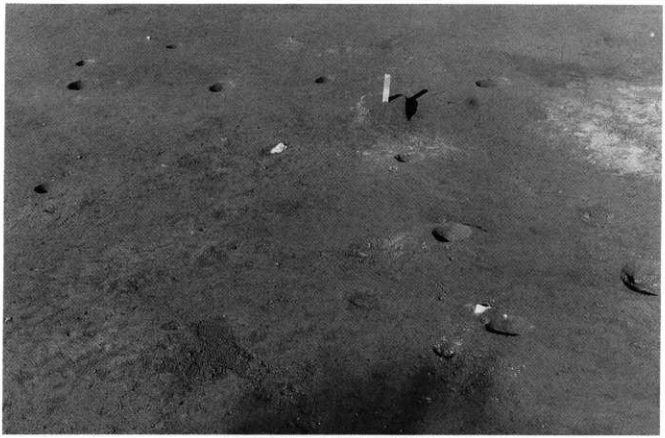
Ku層7号集石



Ku層1号焼土

Ku層1号焼土断面

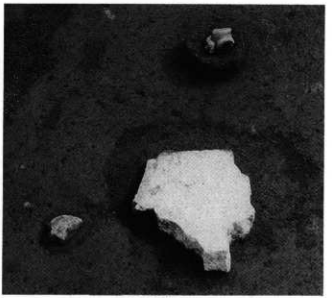
図版6



1区ＦＢ層ピット集中状況（南側より）

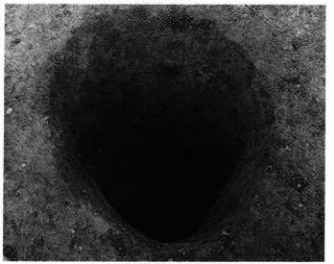
ＦＢ層精査終了状況（西側より）

FB層土器礫出土状況



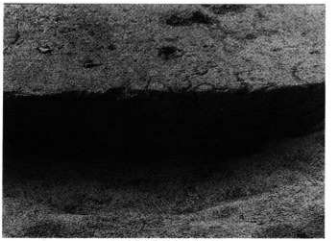
FB層土器礫出土状況

FB層3号ピット断面



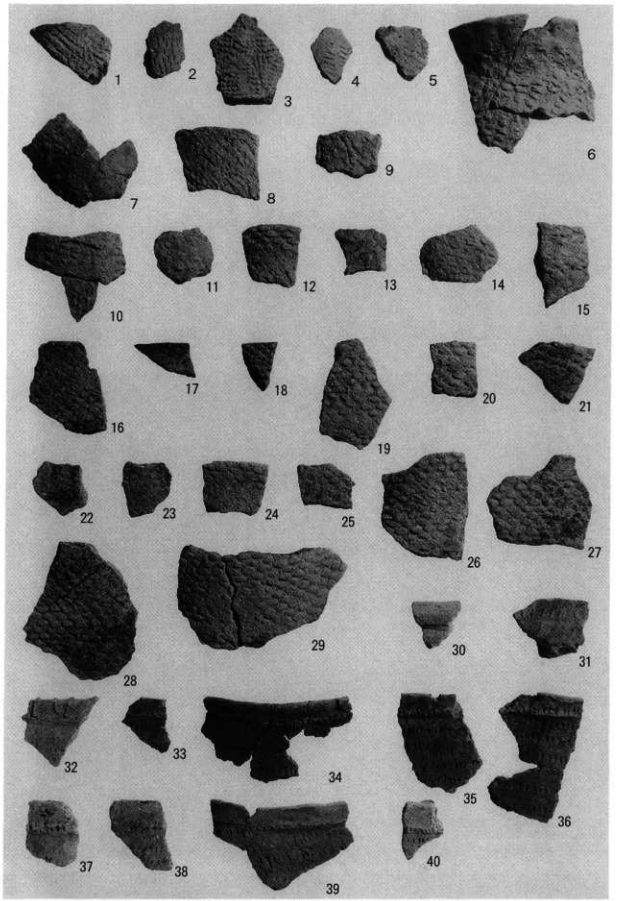
FB層3号ピット完掘

FB層3号焼土

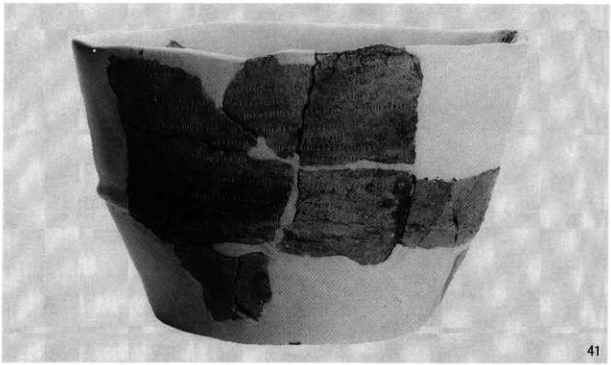


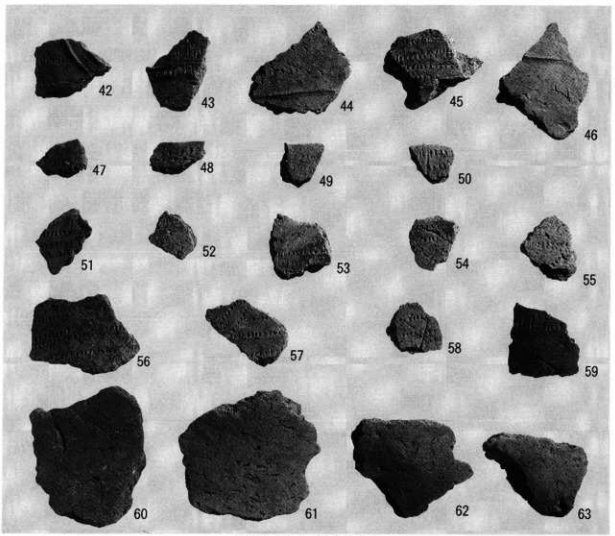
FB層3号焼土断面

図版８

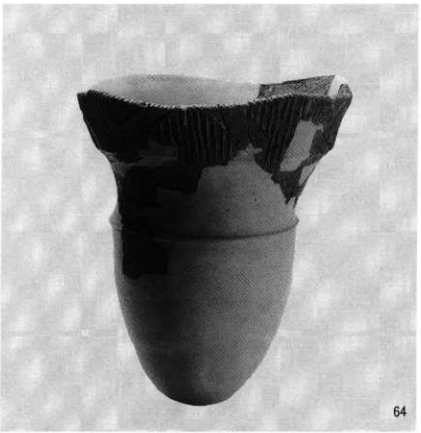


早期縄文土器（撚糸文、押型文、子母口、清水柳Ｅ）





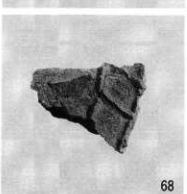
早期縄文土器（清水柳E）


64

66

67

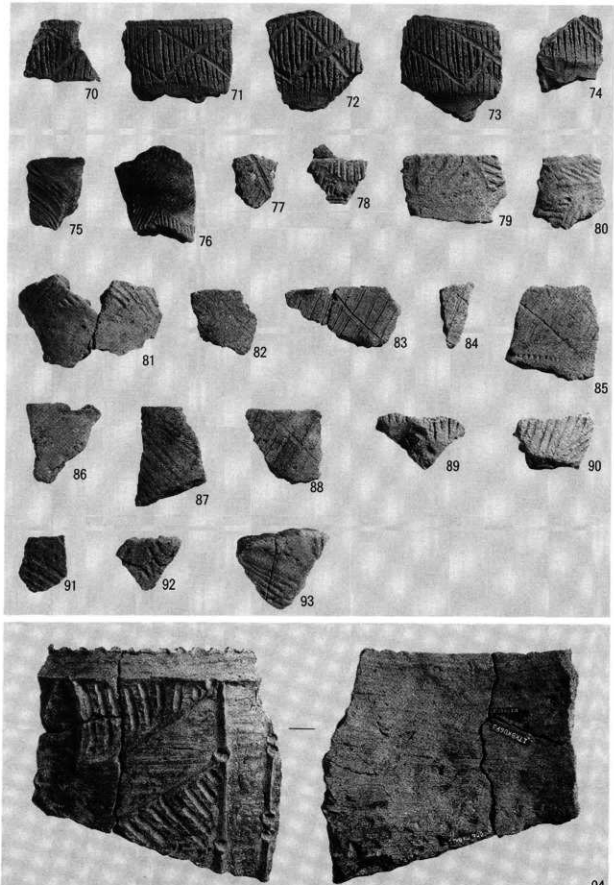
65


68

65

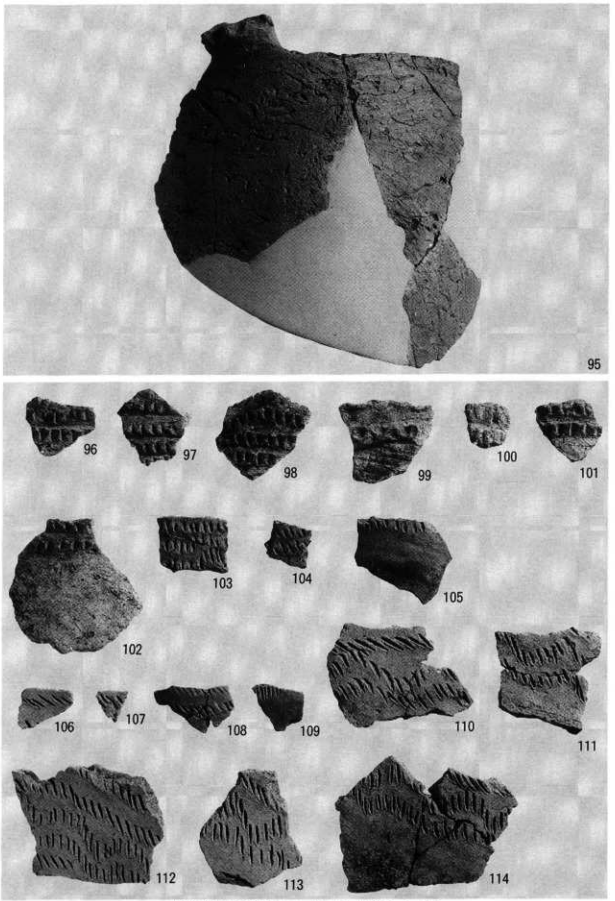
69

早期縄文土器（野島）

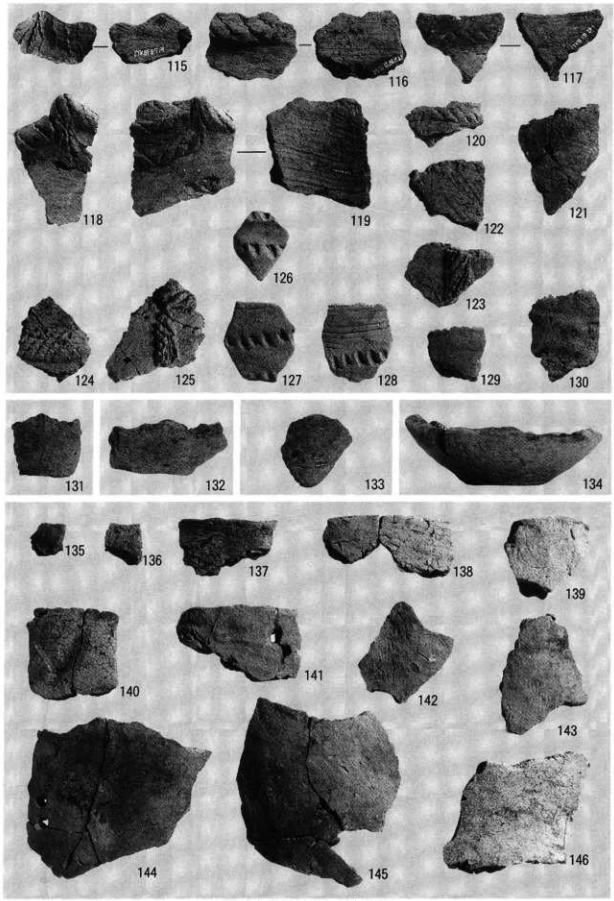


早期縄文土器（野島、鵜ヶ島台）

図版12

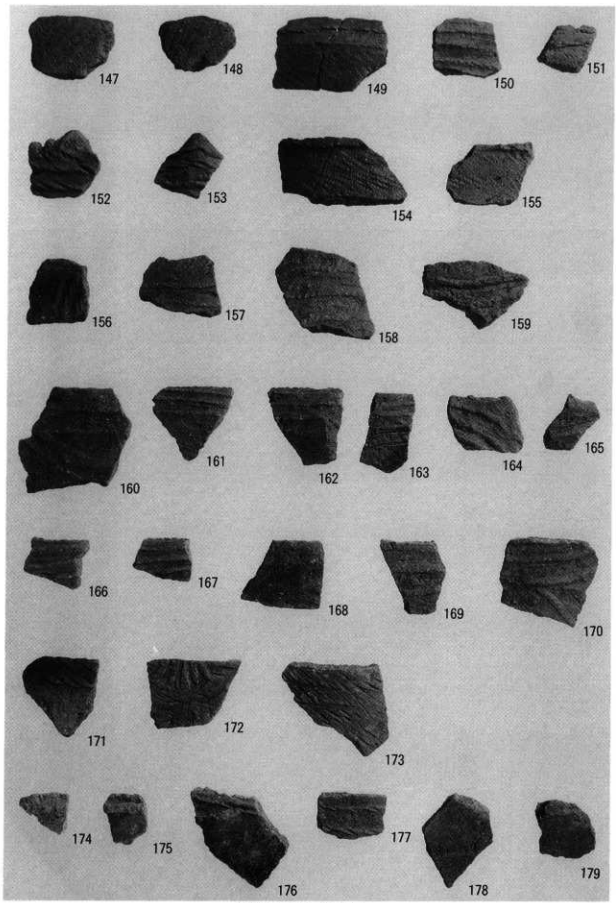


早期縄文土器（茅山上層、入海Ⅰ、入海Ⅱ、石山）

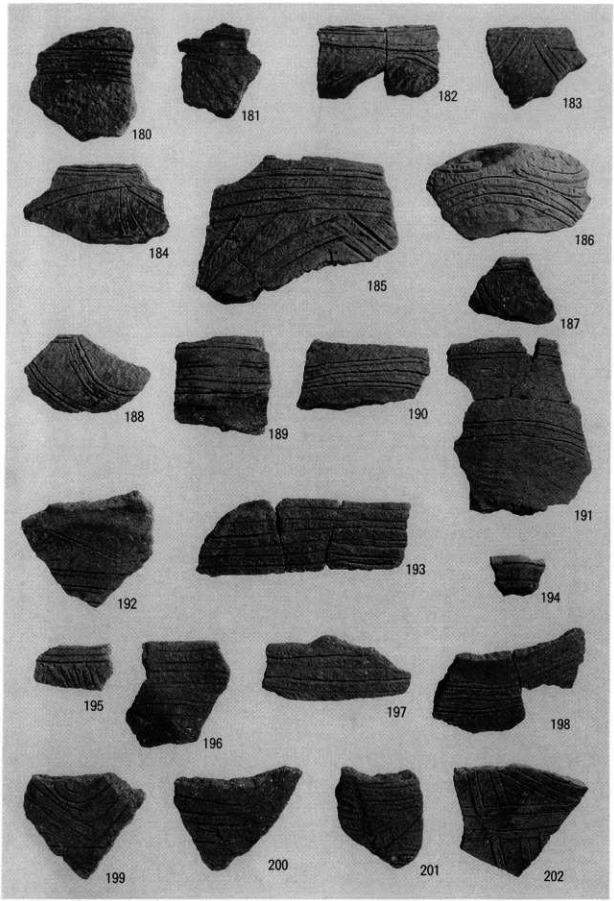


早期縄文土器（条痕、繊維土器）

図版14

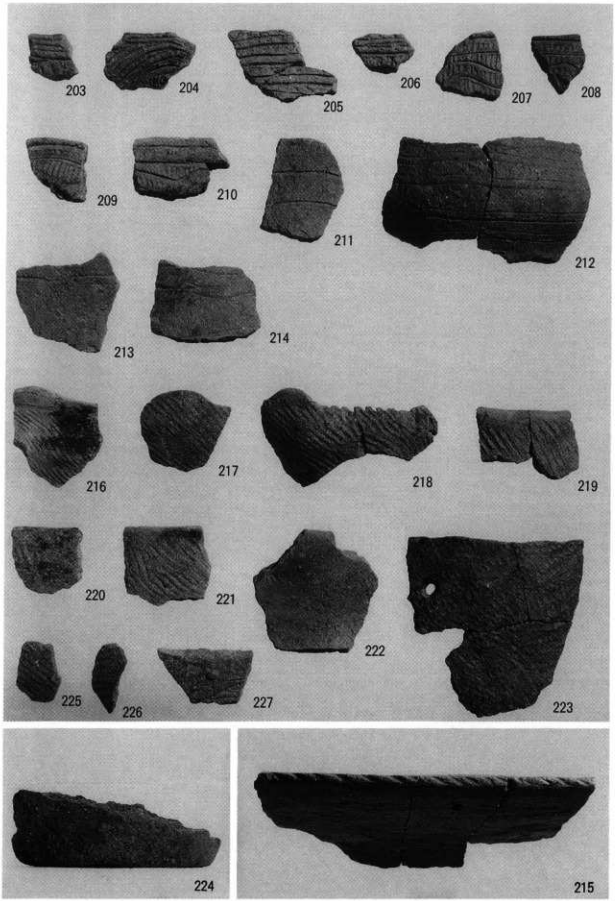


前期縄文土器（諸磯ｂ）

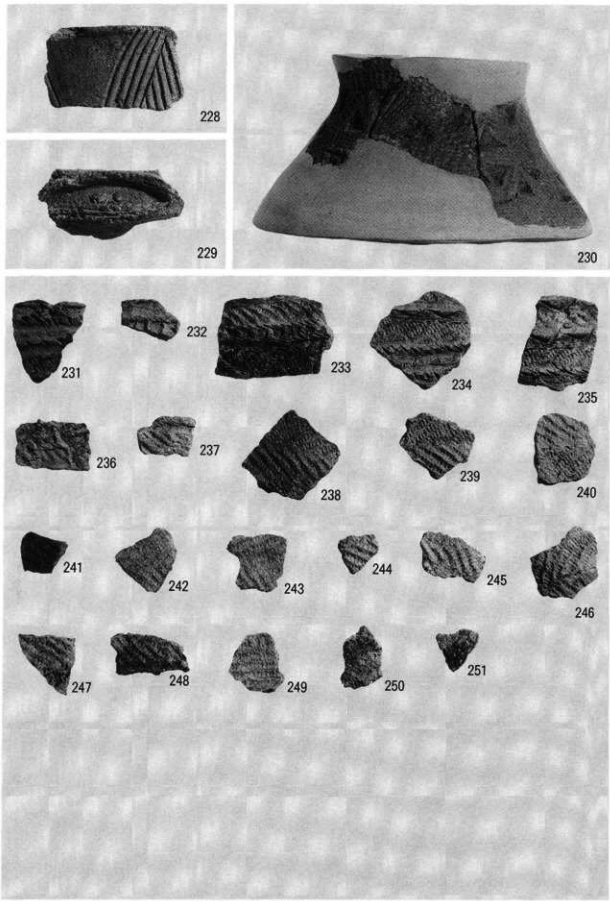

180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202

前期縄文土器（諸磯ｂ）

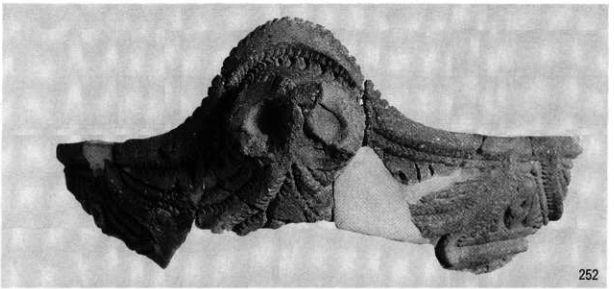
図版16

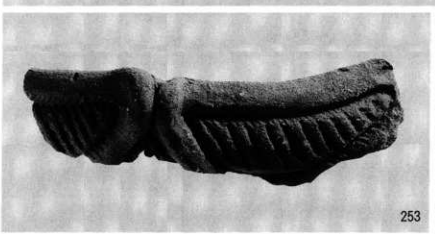


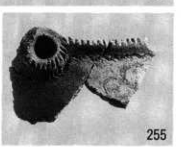
前期縄文土器（諸磯ｂ・ｃ）

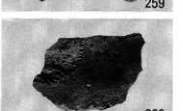


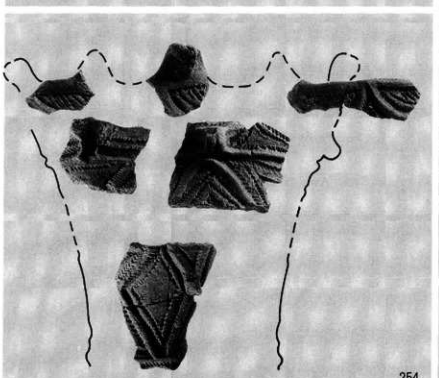
前期縄文土器（十三菩提、北白川下層）



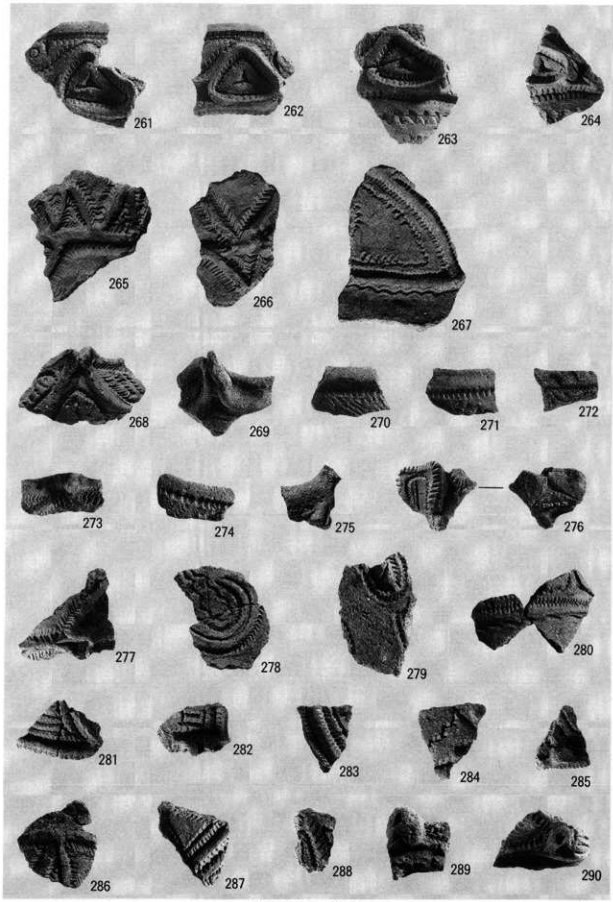






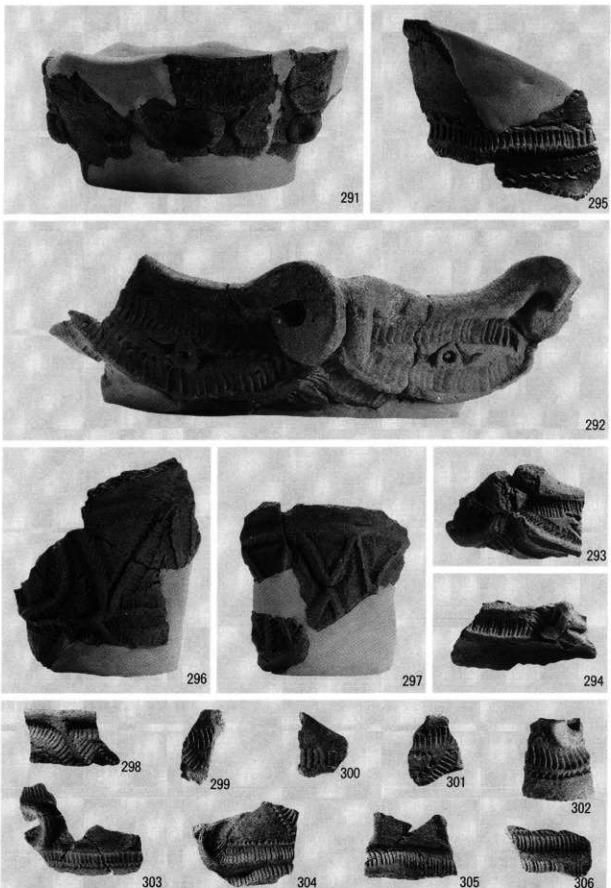


中期縄文土器（新道）

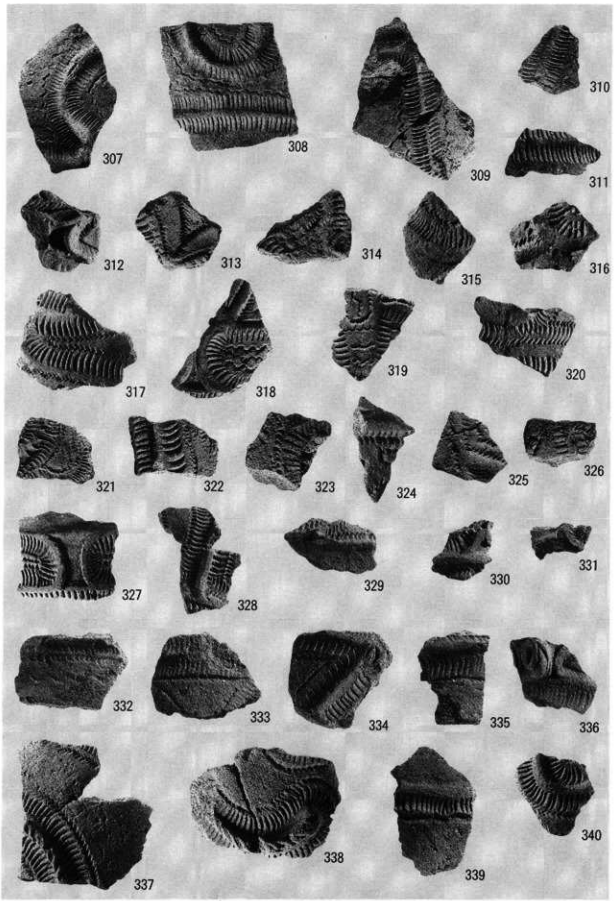

261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290

中期縄文土器（新道）

図版20

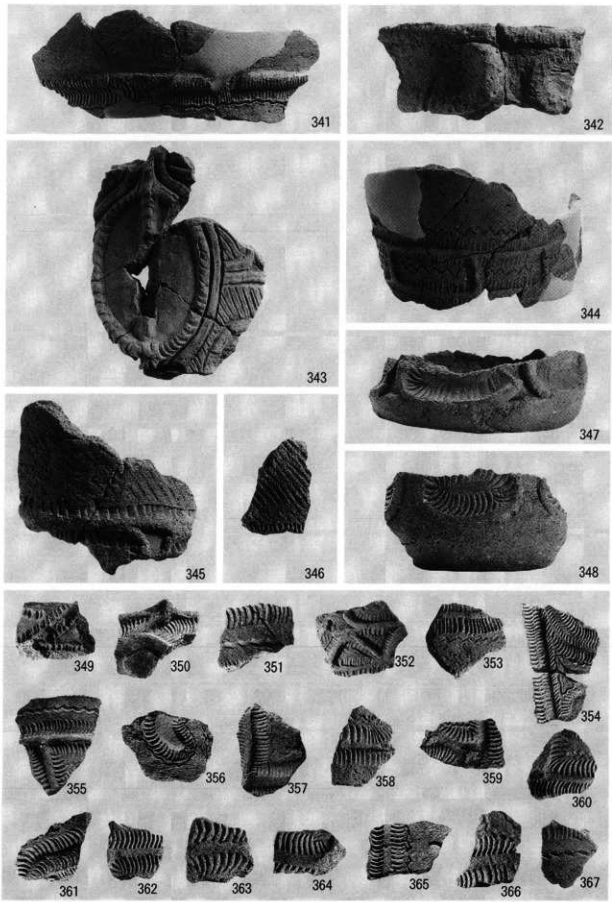


中期縄文土器（新道）

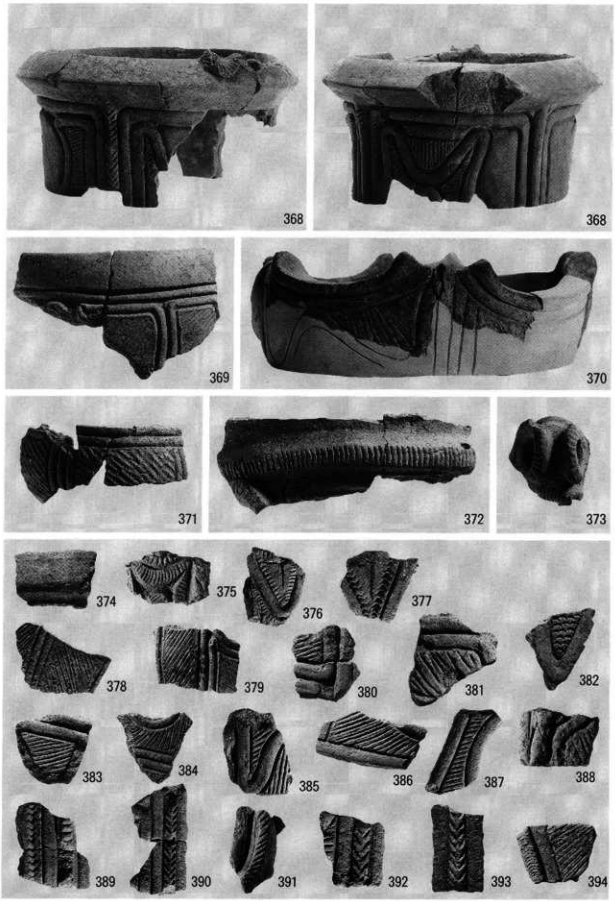

307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340

中期縄文土器（新道）

図版22



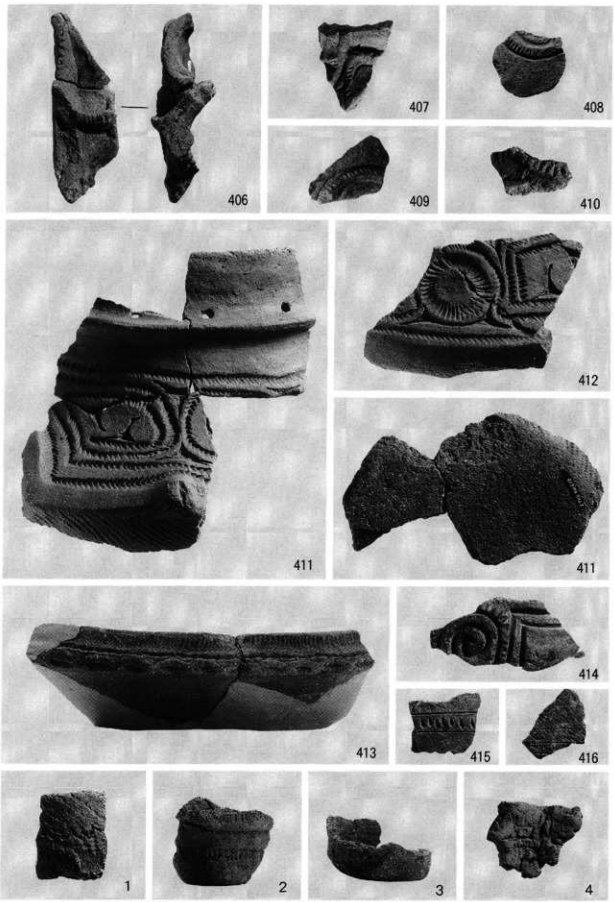
中期縄文土器（藤内）


368
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394

中期縄文土器（藤内）

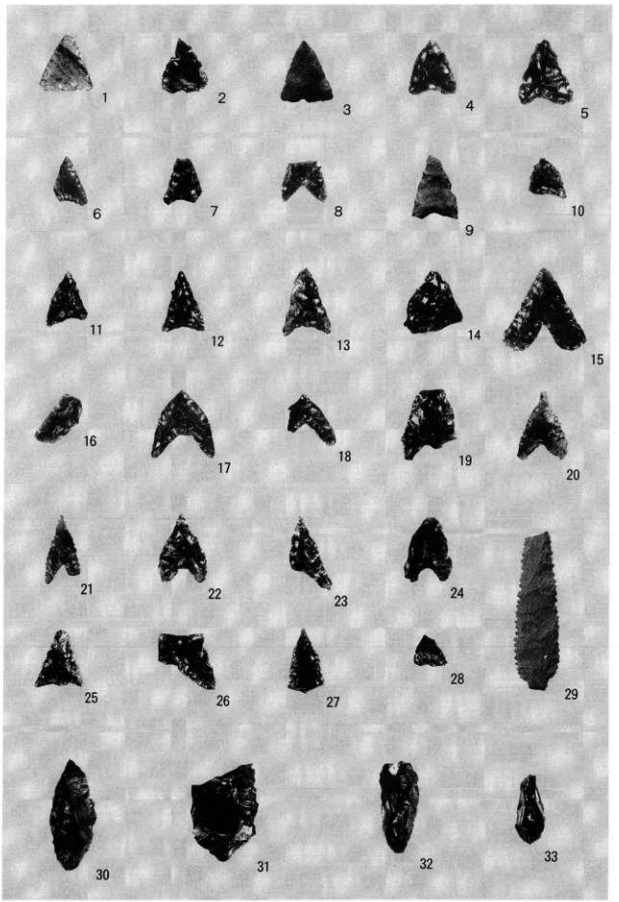
図版24

中期縄文土器（藤内）

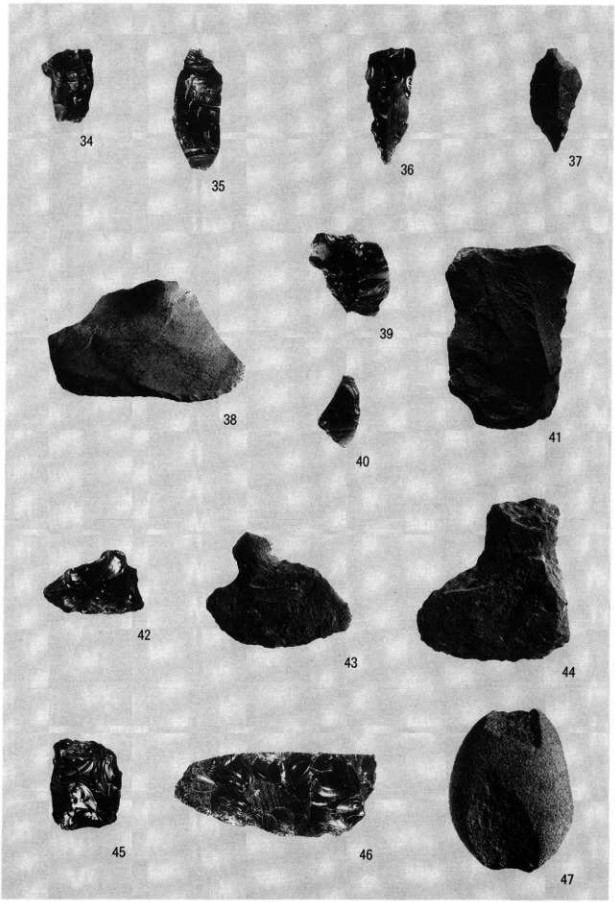


中期縄文土器（藤内）、後期縄文土器（堀之内、安行）、土製品

図版26

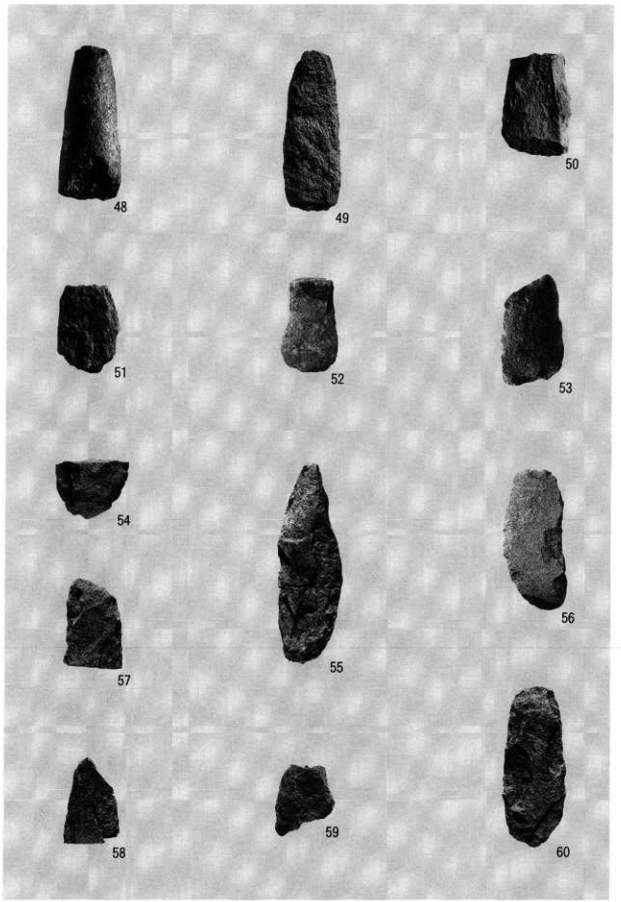


石鏃、有舌尖頭器、ナイフ形石器、楔形石器

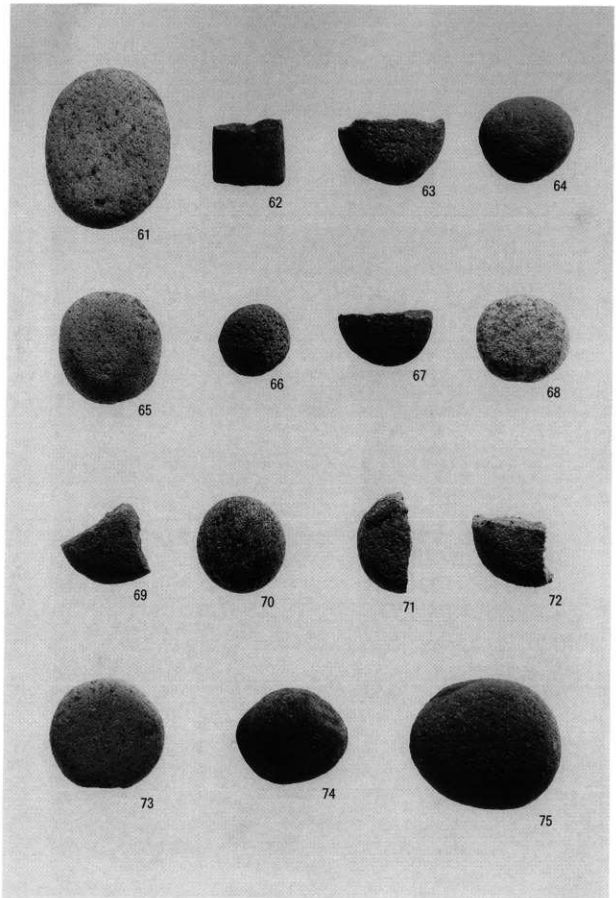


楔形石器、錐、スクレイパー、石核、石錘

図版28

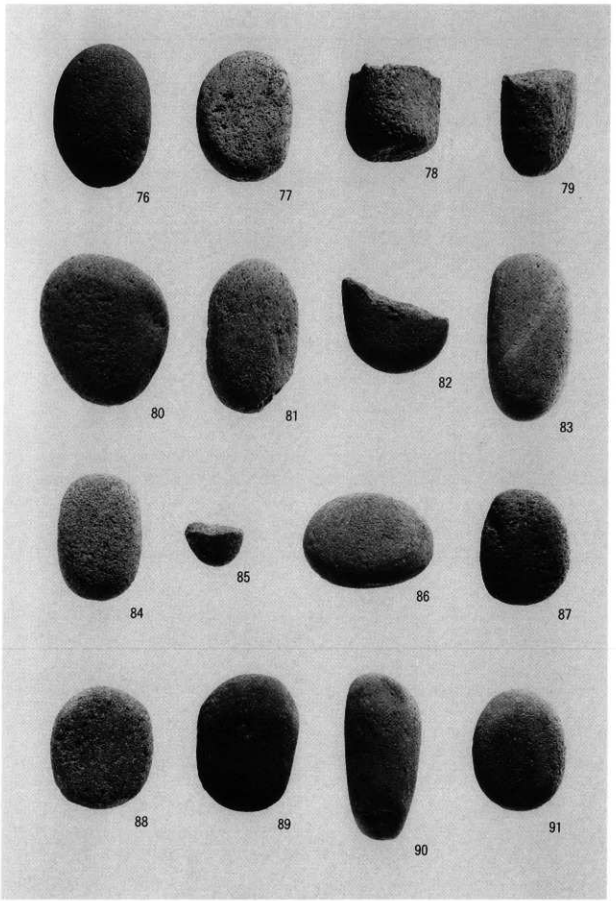


磨製・打製石斧

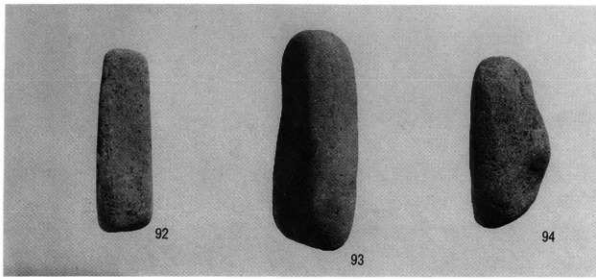


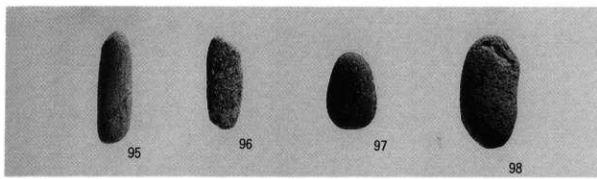
磨石、磨・敲石

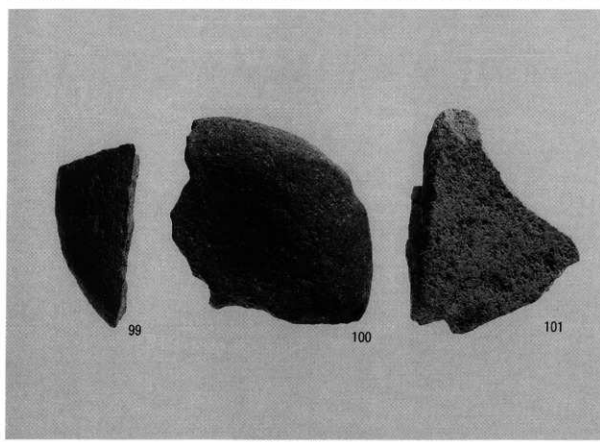
図版30



磨・敲石







特殊磨石、敲石、石皿

〈発掘調査参加者〉

斎藤　晋	石川　真子	神田　綾美	坂口　充世	鈴木亜由美	鈴木　博美
佐藤ちよみ	清水　光子	越後さつき	厚見　大作	飯田　勝哉	大嶽　憲一
小野　孝	勝又　整一	喜多村　清	杉山　文夫	鈴木　君法	芹沢　功
髙原　恒男	富永　保	永井孝太郎	西島　茂	平井　勝美	宮前　清一
吉田　友彦	渡辺　敏雄	石井　明良	石井　美香	石川　真子	遠藤登志子
小野　ナツ	小池せつ子	重信美知子	鈴木とき江	高村　玲子	田中　君子
平光　陽子	山本　町子	山本　洋子	渡辺なほみ	四條　哲	伊藤　梨香
木村聡一郎	井上　義一	杉沢　昇	鈴木小夜子	渡辺　佳代	武士　晴信
斎藤　憲一	広瀬　孝	鈴木　宗短	小野　泰	早瀬　亮介	端山　貴子
山田喜久恵	山本　光江	向笠かよ子	林　雅子	鷲木智津子	富岡てる子
木村　睦美	青柳　行子	鈴木美恵子	浦田みどり	杉本亜澄美	大竹　憲一
増山　譲治	田代　秀樹	藤村　明美	古郡やす子	真野　恵子	石井　明良

〈整理作業参加者〉

- 「第Ⅳ章　第3節（6）縄文時代の石器」については、石器の実測を行った㈱アルカの角張淳一氏、整理作業員の高遠美幸の所見を仲家が編集した。
- 石器の実測・トレースは、㈱アルカ、高遠美幸が行った。
- 土器の実測・トレースは伊澤幸恵、土器の拓本は村川裕子がそれぞれ中心になり、全員で行った。
- 遺構図のトレースは大川佳世子、遺物分布図の作成は藤林小百合がそれぞれ中心になって行った。
- 遺物写真撮影は、湊嘉　秀、斎藤　晋、石器の石材鑑定は、森嶋富士夫が行った。

報告書抄録

ふりがな	と　くら　　い　せき
書名	徳　倉　B　遺　跡
副書名	平成９年度東駿河湾環状道路工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第100集
編著者名	仲家　三千彦
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市谷田23－20　TEL054－262－4261
発行年月日	西暦1998年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯／東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とくら 徳倉B	みしまし 三島市 とくら 徳倉 1173－1	22206	92	138° 55′ 42″ ／55° 08′ 32″	1996年4月 ～ 1997年3月	9600	道路工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳倉B遺跡	集落跡	縄文時代 中・近世	土坑 焼土 集石 ピット 土坑（墓） 炭窯	縄文土器　撚糸文・押型文 条痕文・竹管文 北白川下層式 新道式・藤内式 石器　石鏃・有舌尖頭器・楔 ナイフ形石器・ｽｸﾚｲﾊﾟｰ 石匙・錐・石核 土師器	局部磨製の石鏃 集落の縁辺部か

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第100集

徳　倉　B　遺　跡

平成９年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年３月31日

発行所　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL（054）262－4261㈹

印刷所　みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL（0559）21－1839㈹